雲23

出雲市の文化財報告　23

出雲都市計画道路医大前新町線３工区道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３

神門寺付近遺跡 Ⅲ
高西遺跡

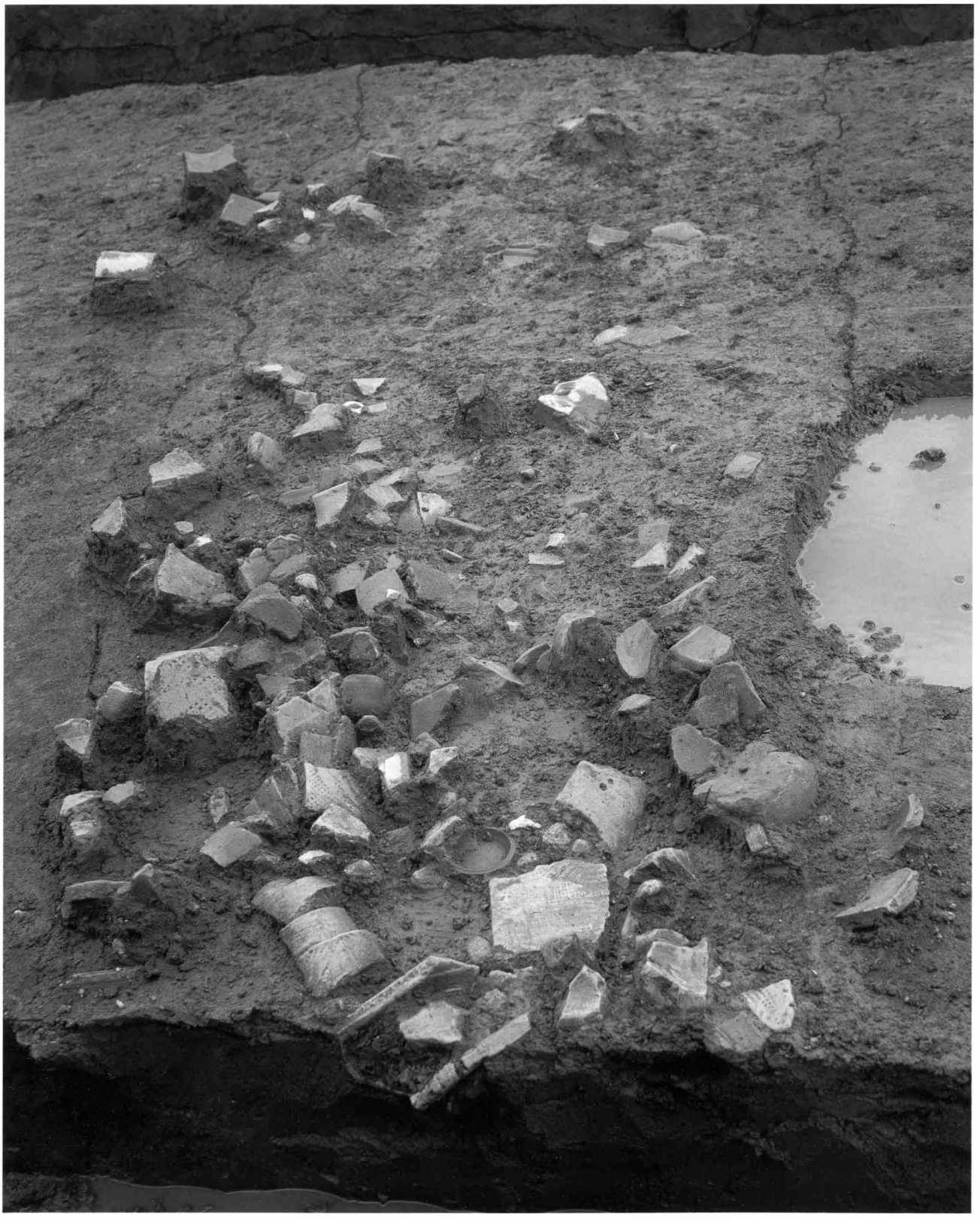
2013年3月

出雲市教育委員会

出雲市
蔵書
25. 7. 1

軒丸瓦

軒平瓦



溝 SD 06 遺物出土状況（南西より）

竪穴建物 SI 01（東より）

カラー図版 4

調査地周辺空撮（上が北）

出雲都市計画道路医大前新町線３工区道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３

神門寺付近遺跡Ⅲ
高西遺跡

2013年３月

出雲市教育委員会

序

本書は，出雲市都市建設部まちづくり推進課から依頼を受けて，平成23・24年度に実施した出雲都市計画道路医大前新町線3工区道路改良工事予定地内に所在する神門寺付近遺跡・高西遺跡の発掘調査の成果を記録したものです。

遺跡の所在する出雲市塩冶町は，市内でも有数の文化財集中地域であり，数多くの歴史的文化遺産が眠っています。中でも，今回の調査地に隣接する浄土宗神門寺は塩冶地区でも最も古くから知られている寺院で，その境内は奈良時代の寺院跡「神門寺境内廃寺跡」として市指定文化財（史跡）に指定されています。寺院所蔵品にも数多くの文化財が知られ，その内の『庭訓往来』二巻は最古の写本として平成24年（2012）に国の重要文化財に指定されました。

今回の調査では，特に神門寺付近遺跡の調査において古代寺院の北限を示すと思われる溝や弥生時代終末期の竪穴建物など多数の遺構を確認したほか，瓦をはじめとする多くの出土遺物を得ることができました。これらの成果から，古代寺院の範囲や寺院建立以前の様相等がわずかではありますが明らかになりました。

こうした調査成果が，出雲市の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました神門寺御住職様をはじめ，地元住民の皆様や関係者の皆様に厚く御礼申しあげます。

平成25年（2013）3月

出雲市教育委員会

教育長　中　尾　一　彦

例　言

1．本書は平成23年（2011）度から24年（2012）度にかけて出雲市教育委員会が実施した出雲都市計画道路医大前新町線3工区道路改良工事に伴う神門寺付近遺跡（島根県遺跡番号W146，出雲市遺跡番号F12），高西遺跡（島根県遺跡番号W128，出雲市遺跡番号F13）の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。本工事に係る調査は平成20年（2008）度から実施し，20年度の調査成果は『神門寺付近遺跡Ⅰ』として，21年（2009）度の調査は『神門寺付近遺跡Ⅱ』としてすでに報告している。

2．調査は下記の体制，期間で実施した。

調査地及び調査面積　出雲市塩冶町835－4ほか　約825㎡

調査期間　平成23年（2011）10月11日～平成24年（2012）5月25日

調査体制

＜平成23年度＞

事務局	花谷　浩	（出雲市文化環境部学芸調整官）	
	福間　浩	（出雲市文化環境部文化財課長）	
	宍道年弘	（同	課長補佐）
	景山真二	（同	埋蔵文化財係長）
調査員	岸　道三	（同	主任）
	須賀照隆	（同	主任）
調査指導	松尾充晶	（島根県教育庁文化財課）	

＜平成24年度＞

事務局	花谷　浩	（出雲市文化環境部学芸調整官）	
	福間　浩	（出雲市文化環境部文化財課長）	
	宍道年弘	（同	課長補佐兼埋蔵文化財1係長）
調査員	須賀照隆	（同	主任）
調査補助員	片寄雪美	（同	臨時職員）
	糸賀伸文	（同	臨時職員）
調査指導	今岡一三	（島根県教育庁文化財課）	

3．本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SB－建物（竪穴建物以外），SI－竪穴建物，SK－土壙，SD－溝，SE－井戸，P－ピット，SX－その他の遺構

4．本書で使用した方位は座標北を示す。座標は世界測地系第Ⅲ系に基づくものである。標高は海抜高を示す。

5．出土遺物の評価・時期等については，下記の文献を参考にした。また，木簡の解読は髙橋周（出雲市文化財課嘱託員）が行ない，瓦器椀の評価は廣江耕史氏（島根県埋蔵文化財調査センター）にご指導賜った。

参考文献

出雲市教育委員会 1985『神門寺境内廃寺』

出雲市教育委員会 2008『壱丁田遺跡（2次調査）』出雲市の文化財報告3

出雲市教育委員会 2009『神門寺付近遺跡Ⅰ』出雲市の文化財報告9

出雲市教育委員会 2009『築山遺跡Ⅲ』出雲市の文化財報告3

岡田裕之・土器検討グループ 2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究―古代山陰地域の土器様相と領域性―』島根県古代文化センター

鹿島町教育委員会 1992『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5

川原和人 2010「出雲地方における律令時代の須恵器の特色とその背景」『出雲国の形成と国府成立の研究―古代山陰地域の土器様相と領域性―』島根県古代文化センター

島根県教育委員会 2004『家ノ脇遺跡　原田遺跡4区　前田遺跡4区』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4

中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』

中川寧 1996「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会誌』第13集

花谷浩 2010「古代寺院の瓦生産と古代山陰の領域性―出雲西部を中心に―」『出雲国の形成と国府成立の研究―古代山陰地域の土器様相と領域性―』島根県古代文化センター

浜田竜彦 2005「山陰地方における縄文時代晩期の土器について」『縄文時代晩期の山陰地方』中四国縄文研究会

広江耕史 1992「島根県における中世土器について」『松江考古』第8号　松江考古学談話会

松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編―』正岡睦夫・松本岩雄編

柳浦俊一 1994「島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要―飯石郡頓原町森遺跡出土土器を中心に―」『島根考古学会誌』第11集　島根考古学会

6．発掘調査及び遺物整理にあたっては，以下のものが従事した。

伊藤　伸，大輝正人，金森光雄，河井幸男，川上晴夫，佐野静枝，周藤俊也，高根常代，

高根　豊，柳楽　晃，秦　誠治，花田増男，藤江　実（以上，発掘調査）

鵜口玲子，妹尾順子，吹野初子，細野陽子，前島浩子（以上，遺物整理）

7．遺物の写真撮影は坂本豊治（出雲市文化財課主事）が行った。

8．本書に掲載した遺物及び実測図，写真は出雲市教育委員会が保管している。

9．本書の編集・執筆は花谷浩，宍道年弘の指導の下，須賀照隆が行った。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　過去の調査 …… 8
　第１節　神門寺境内廃寺・神門寺付近遺跡 …… 8
　第２節　高西遺跡 …… 10
第４章　調査の概要 …… 11
第５章　高西遺跡（１区）の調査 …… 13
第６章　神門寺付近遺跡（5～11区）の調査 …… 19
　第１節　５・６区の調査 …… 19
　第２節　７～９区の調査 …… 31
　第３節　10・11区の調査 …… 40
　第４節　出土瓦の概要 …… 45
第７章　総括 …… 75

挿　図　目　次

第１図　医大前新町線３工区に係る調査地位置図 …… 3
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 6
第３図　過去の調査地位置図 …… 9
第４図　調査区配置図 …… 12
第５図　調査区土層柱状図 …… 12
第６図　１区遺構配置図 …… 14
第７図　１区土層堆積状況 …… 15
第８図　１区遺構実測図 …… 16
第９図　１区出土遺物実測図 …… 17
第10図　５・６区遺構配置図 …… 20
第11図　５・６区土層堆積状況 …… 21
第12図　６区遺構実測図－１ …… 22
第13図　６区遺構実測図－２ …… 23
第14図　６区遺構実測図－３ …… 25
第15図　６区遺構実測図－４ …… 26
第16図　６区遺構実測図－５ …… 27
第17図　６区遺構出土遺物実測図－１ …… 28
第18図　６区遺構出土遺物実測図－２ …… 29
第19図　５・６区遺構外出土遺物実測図 …… 30
第20図　７～９区遺構配置図 …… 31
第21図　７～９区土層堆積状況 …… 32
第22図　８・９区遺構実測図－１ …… 33
第23図　８・９区遺構実測図－２ …… 34
第24図　８・９区遺構出土遺物実測図 …… 36
第25図　９区遺構外出土遺物実測図 …… 37
第26図　10・11区遺構配置図 …… 40
第27図　10・11区土層堆積状況 …… 41
第28図　10・11区遺構実測図 …… 42
第29図　10区出土遺物実測図 …… 43
第30図　10・11区出土遺物実測図 …… 44
第31図　軒丸瓦（Ⅰ類）実測図 …… 51
第32図　軒丸瓦（Ⅰ・Ⅳ類）実測図 …… 52

第33図　軒丸瓦（Ⅱ類）実測図 ……53
第34図　軒丸瓦（Ⅲ類，接合部）実測図 ……54
第35図　軒平瓦実測図－1 ……55
第36図　軒平瓦実測図－2 ……56
第37図　丸瓦（1A・1B類）実測図－1 ……57
第38図　丸瓦（1A・1B類）実測図－2 ……58
第39図　丸瓦（1C類）実測図－1 ……59
第40図　丸瓦（1C類）実測図－2 ……60
第41図　丸瓦（2類）実測図 ……61
第42図　丸瓦（3・4類）実測図 ……62
第43図　丸瓦（4類）実測図 ……63
第44図　丸瓦（5類）実測図 ……64
第45図　平瓦（1類）実測図－1 ……65
第46図　平瓦（1類）実測図－2 ……66
第47図　平瓦（1類）実測図－3 ……67
第48図　平瓦（2類）実測図 ……68
第49図　平瓦（3類）実測図 ……69
第50図　平瓦（4類）実測図 ……70
第51図　平瓦（4・5類）実測図 ……71
第52図　平瓦（5類）実測図 ……72
第53図　平瓦（6・7類）実測図 ……73
第54図　道具瓦実測図 ……74
第55図　神門寺付近遺跡溝遺構配置模式図 ……76
第56図　明治9年下塩冶村道水路図合成図 ……77

表　目　次

表1　出土瓦重量集計表 ……50

図　版　目　次

カラー図版1　神門寺付近遺跡出土軒瓦
カラー図版2　溝 SD 06 遺物出土状況
カラー図版3　竪穴建物 SI 01
カラー図版4　調査地周辺空撮

図版1　1区遺構
図版2　6区遺構1
図版3　6区遺構2
図版4　6区遺構3
図版5　9区遺構
図版6　8・10区遺構
図版7　11区遺構
図版8　瓦類1
図版9　瓦類2
図版10　瓦類3
図版11　瓦類4
図版12　瓦類5
図版13　瓦類6
図版14　瓦類7
図版15　土器
図版16　土器・羽口・金属製品
図版17　土器・土製品・石製品・金属製品
図版18　木製品・石塔
図版19　木簡赤外線写真

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

出雲都市計画道路医大前新町線は，出雲市塩冶町から出雲市今市町を南北につなぐ約 1.5 km の都市計画道路として出雲市が計画する道路である。事業地内の一部（3 工区）が周知の埋蔵文化財包蔵地である神門寺付近遺跡の範囲内にあることから，事業担当課である出雲市都市整備部街路課（現在の都市建設部まちづくり推進課）と文化企画部文化財課（現在の文化環境部文化財課）で協議を重ね，平成 20 年（2008）4 月より発掘調査を実施することが決定した。

調査は開発事業の進捗にあわせ，事業地の南方より断続的に実施されることとなった。平成 20 年（2008）度，21 年（2009）度にはそれぞれ 120 m^2，230 m^2 の発掘調査を実施し，すでに報告書も刊行されている（『神門寺付近遺跡Ⅰ』，『神門寺付近遺跡Ⅱ』）。その後，平成 23・24 年度に残区間約 2000 m^2 を対象として発掘調査を実施することとなった。本報告書は，この発掘調査の成果をまとめたものである。

第２節　調査の経過

平成 23・24 年度の調査は，既存道路やその他既設工作物，排土置場等の状況を勘案し，調査地を便宜上 11 区に分けて実施した。調査期間は，平成 23 年（2011）10 月 11 日より平成 24（2012）年 5 月 25 日までの約 7.5 ヶ月間である。

調査は近現代の造成土，耕作土等を重機で取り除き，その後手掘りによって遺物包含層を掘り下げ，遺物，遺構の確認を土層ごとに行いつつ調査を進めた。当初は残事業予定地のほぼ全域を調査対象としていたが，調査過程において 2～4 区の間は遺跡の存在する可能性が低いと判断されたため，面的調査は 1 区と 5～11 区の 8 区間のみで実施することとなった。最終的な調査面積は 1 区約 400 m^2，5 区約 60 m^2，6 区約 215 m^2，7 区約 15 m^2，8 区約 15 m^2，9 区約 70 m^2，10 区約 30 m^2，11 区約 20 m^2 の合計約 825 m^{2}である。なお，当初は調査地全体を神門寺付近遺跡として捉えていたが，1 区を高西遺跡，5～11 区を神門寺付近遺跡として報告することとした。

また，調査成果については，平成 24 年（2012）3 月 3 日に 6 区において一般市民約 100 名参加の発掘調査現地説明会を，同年 5 月 15 日に 9 区において地元の市立塩冶小学校 6 年生 139 名参加による発掘調査現場見学会を，同年 4 月 11 日から 6 月 11 日まで出雲弥生の森博物館において出土品の速報展示を実施することによって，一般に公開している。

今回の調査では，6 区で古代から近代に至る寺院区画を示す可能性の高い溝群が確認されたほか，遺物の面からも大量の瓦を中心に古代寺院関連の資料が数多く確認されており，隣接の神門寺境内廃寺と一体的な古代寺院関連遺跡として，その実態を解明する上で欠かせない貴重な資料を得ることができた。

しかしながら，調査の原因となった道路改良工事については，公共性が高く計画変更も困難であることから，調査後に島根県教育委員会との協議を行った結果，遺跡を記録保存に留めることはやむを得ないとの判断に至った。

調査に関連する主な文化財保護法上の取り扱い経緯（平成 20 年～24 年）

平成 20 年（2008）

3 月 18 日　「埋蔵文化財発掘の通知について」市より市教委経由で県教委へ※H20・21 調査地

4 月 1 日　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委より市教委経由で市へ
「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委より県教委へ※H 20－1 区

4 月 25 日　「医大前新町線道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委より県教委へ※H 20－1 区

5 月 1 日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委より県教委へ※H 20－2 区

5 月 21 日　「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委より市教委へ※H 20－1 区

6 月 23 日　「医大前新町線道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委より県教委へ※H 20－2 区
「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委より市教委へ※H 20－2 区

6 月 13 日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委より県教委へ※H 20－ 3 区

8 月 1 日　「医大前新町線道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（3 区）に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委より県教委へ※H 20－3 区

8 月 15 日　「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委より市教委へ※H 20－3 区

平成 21 年（2009）

9 月 16 日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委より県教委へ※H 21 調査区

平成 22 年（2010）

1 月 21 日　「医大前新町線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委より県教委へ※H 21 調査区

1 月 22 日　「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委より市教委へ※H 21 調査区

平成 23 年（2011）

9 月 20 日　「埋蔵文化財発掘の通知について」市より市教委経由で県教委へ※H 23・24 調査地

9 月 26 日　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委より市教委経由で市へ

9 月 28 日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委より県教委へ※H 23・24－1～11 区

平成 24 年（2012）

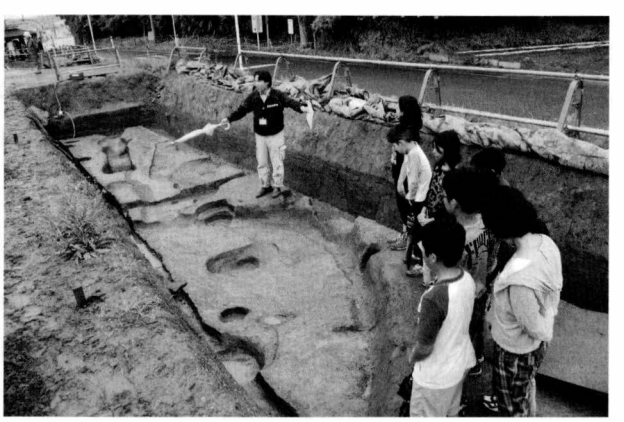
1 月 12 日　「医大前新町線 3 工区に伴う埋蔵文化財発掘調査（神門寺付近遺跡 11 区）に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委より県教委へ※H 23・24－11 区

1 月 17 日　「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委より市教委へ※H 23・24－11 区

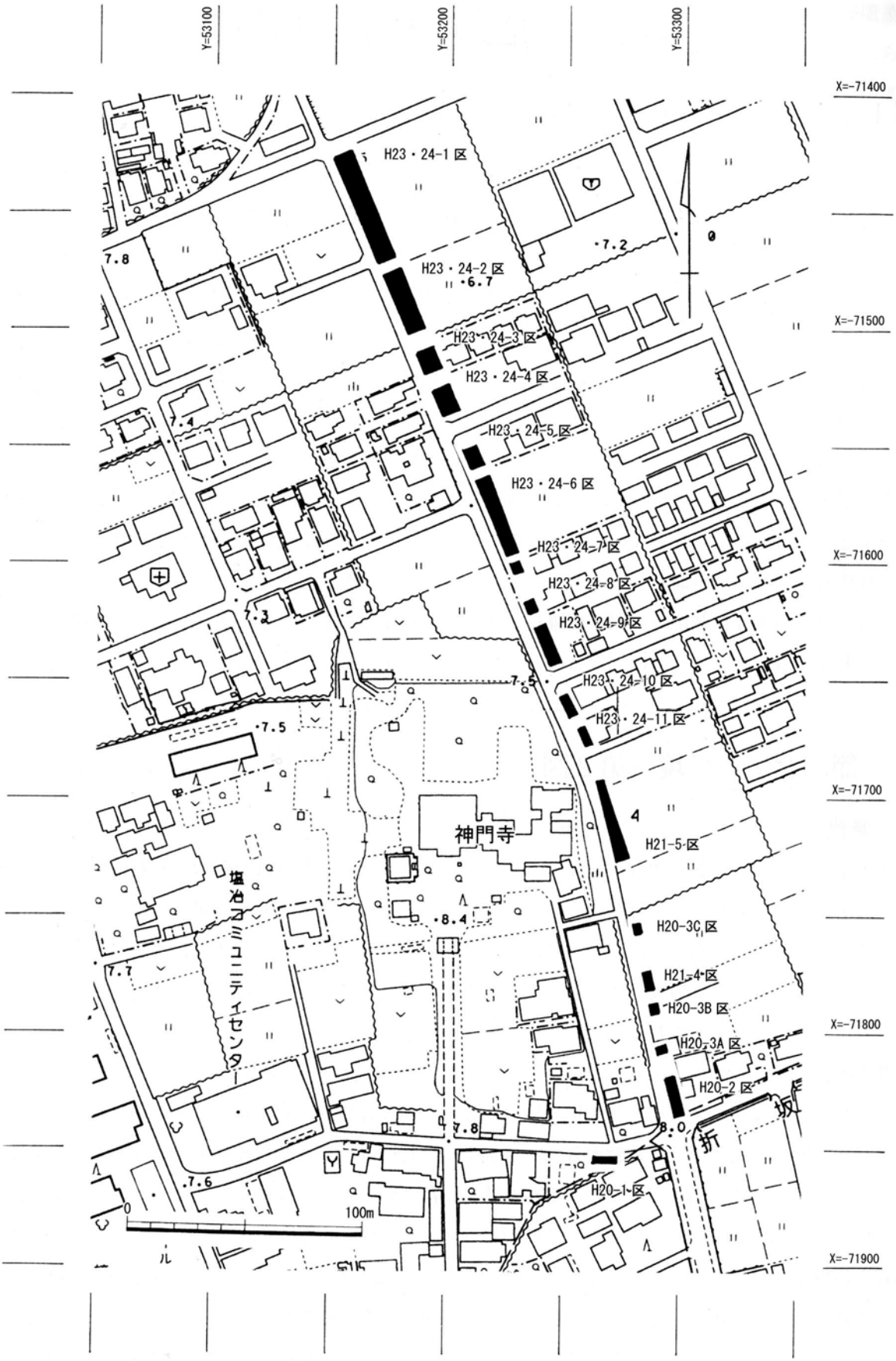
5 月 30 日　「医大前新町線 3 工区に伴う埋蔵文化財発掘調査（神門寺付近遺跡 1～10 区）に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委より県教委へ※H 23・24－1～10 区

6 月 4 日　「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委より市教委へ※H 23・24－1～10 区

発掘調査現地説明会



塩冶小学校発掘調査現場見学会



第１図　医大前新町線３工区に係る調査地位置図（1：2500）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境（第２図）

神門寺付近遺跡・高西遺跡は出雲市塩冶町地内，出雲市街地の中心部であるJR出雲市駅の南西に所在する。前者はその遺跡名の一部ともなっている寺院，神門寺の周囲東西約200 m，南北約400 mの範囲に及ぶ遺跡である。なお，神門寺の境内地は「神門寺境内廃寺跡」として市の史跡に指定（昭和35年12月）されているほか，遺跡名も「神門寺境内廃寺」として神門寺付近遺跡とは異なった名称が付されている。

遺跡の立地する出雲平野は，南を中国山地と北を島根半島に挟まれた，日本海から宍道湖西岸まで東西約20 kmにわたる県内最大の沖積平野である。平野を形成した二大河川，斐伊川と神戸川がそれぞれ宍道湖と日本海に注いでおり，遺跡の位置は平野南部の神戸川右岸にあたる。

出雲平野において斐伊川と神戸川による沖積作用が始まったのは，三瓶山が最後に噴火した約4000年前頃と考えられる。平野形成後の景観も現在とは大きく異なり，斐伊川の本流と神戸川は共に西流して神門水海（神西湖の前身）に注ぎ，宍道湖の西端も現在より大きく広がっていたものと考えられている。現在のように斐伊川本流が東流し，神戸川が直接日本海に注ぐようになったのは江戸時代以降のことである。

第２節　歴史的環境（第２図）

縄文時代

出雲平野における遺跡の初現は縄文時代早期である。平野北西端の山麓に所在する菱根遺跡（8，第２図参照，以下同じ）や平野西端の砂丘下に所在する上長浜貝塚(59)などが知られている。縄文時代後期から晩期になると，三田谷Ⅰ遺跡(40)や後谷遺跡(66)など，平野南部の丘陵裾部でも多くの遺跡が営まれ，平野中央部の矢野遺跡(13)などでも遺物が確認されるようになる。神門寺付近遺跡においても遺物の散布が確認される。

弥生時代

弥生時代になると，斐伊川と神戸川流域の微高地や丘陵縁辺部に営まれる集落が徐々に増え，特に弥生時代中期から後期には遺跡数が著しく増加する。神門寺付近遺跡や高西遺跡においてもこの頃から遺物量が増え，その周辺でも多くの集落遺跡が確認されるようになっている。この頃の出雲平野の代表的な集落遺跡としてあげられる矢野遺跡(13)，古志本郷遺跡(45)，下古志遺跡(48)，山持遺跡(34)，白枝荒神遺跡(17)，中野清水遺跡(19)，天神遺跡(29) などでは，北部九州系の品を中心として大陸系，西部瀬戸内系，北陸系，吉備系など，各地との交流品も確認される。

斐伊川右岸の丘陵地には，大量の銅剣や銅鐸，銅矛の埋納で知られる荒神谷遺跡(68)が存在する。これらの青銅器は弥生時代中期を中心に製作され，後期初頭までに埋納されたものと考えられている。

続く弥生時代後期には，斐伊川左岸の丘陵上に大型の四隅突出型墳丘墓群として知られる西谷墳墓群(27)が出現する。中でも3号墓と9号墓は山陰地方最大級の規模を誇る弥生墳丘墓である。これら荒神谷遺跡と西谷墳墓群は，先史時代の出雲平野部が最も栄えた時期を象徴するものとして，全国的にも注目される遺跡である。

古墳時代

古墳時代に入ると，出雲平野の集落は神戸川流域の古志本郷遺跡(45)や下古志遺跡(48)などで集落の廃絶，縮小化が顕著となり，平野全体を見ても古墳時代中期を中心に集落数の減少傾向が見られる。神門寺付近遺跡や高西遺跡の周辺についてみると，古墳時代中期前後にはやはり多くの集落遺跡で規模の縮小化がみられるが，古墳時代後期以降，天神遺跡(29)，築山遺跡(31)，角田遺跡(30)，宮松遺跡(30)など数多くの遺跡で遺構や遺物が再び確認されるようになっている。

古墳については，前期に西谷7号墳(27)，大寺1号墳(43)，山地古墳(57)などが，中期頃には北光寺古墳(58)，神庭岩船山古墳(69)などが知られるが，大型古墳は少ない。

後期になると，神戸川右岸に今市大念寺古墳(23)，上塩冶築山古墳(32)，上塩冶地蔵山古墳(35)といった有力首長墳が築かれるようになり，神戸川左岸の宝塚古墳(49)，妙蓮寺山古墳(50)，放レ山古墳(51)，そして平野北東部山麓の国富中村古墳(63)など，それらに次ぐ位置付けの首長墳も継続して築かれている。また，後期以降，横穴墓も盛んに造られ，神戸川右岸の上塩冶横穴墓群(39)，神戸川左岸の神門横穴墓群(54)など大規模な横穴墓群が築造されている。この時期の出雲平野は出雲地方における古墳文化の中心地の一つであり，前中期とは様相を異にしている。

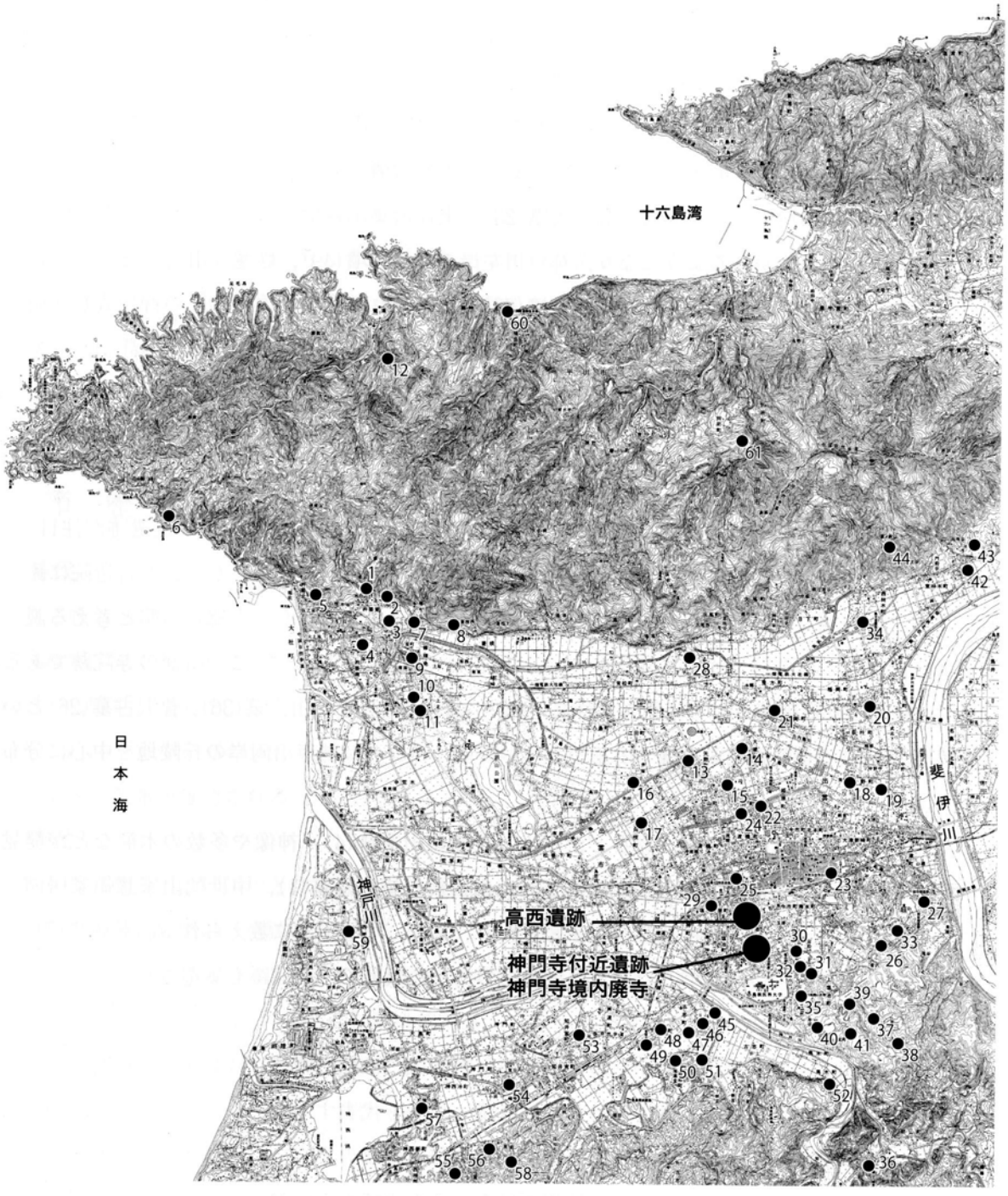
奈良時代以降

奈良時代の遺跡としては，特に『出雲国風土記』記載の官衙や寺院などとの関連遺跡が注目され，古志本郷遺跡(45)が神門郡家に，後谷遺跡(66)が出雲郡家に，西西郷廃寺(64)が沼田郷新造院に比定されている。その他，神門寺境内廃寺を朝山郷新造院，天寺平廃寺(74)を河内郷新造院と考える説もある。風土記記載の新造院に比定されるものではないが，長者原廃寺(33)もこの時期の寺院跡である。

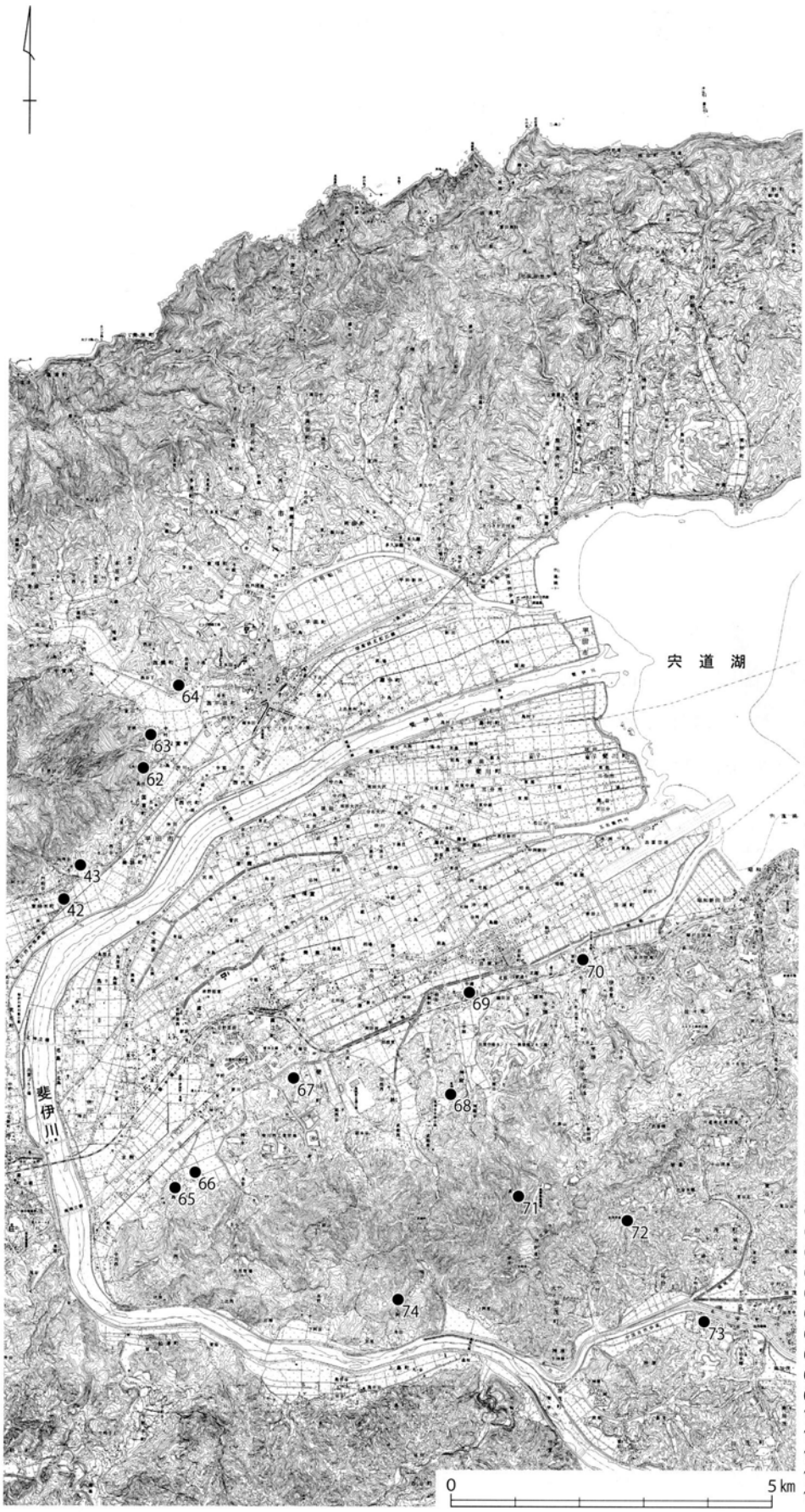
また，注目される墳墓として光明寺3号墓(41)，小坂古墳(52)，朝山古墓(36)，菅沢古墓(26)といった火葬骨を納める石製骨蔵器を持つ墳墓があげられる。これらは神戸川両岸の丘陵地を中心に分布している。

その他，奈良時代以降は奈良三彩などが出土した鹿蔵山遺跡(4)，神像や多数の木簡などが発見された青木遺跡(42)，中世期の巨大柱が確認された出雲大社境内遺跡(1)，中世朝山家惣領家居館の可能性が指摘される蔵小路西遺跡(24)などが知られる。また，尼子十旗に数えられる高瀬城跡(71)や神西城跡(55)，毛利系家臣が居城した鳶ヶ巣城跡(44)など，数多くの山城跡も築造されている。

以上のように，神門寺付近遺跡が立地する出雲平野地域には縄文時代以降数多くの遺跡が築かれており，その中でも神戸川両岸には古墳時代後期以降，地域を代表する古墳，官衙跡，仏教関連遺跡など重要な遺跡が集中している。その中にあって神門寺付近遺跡の中心にある神門寺境内廃寺は，この地域最古の寺院跡として歴史的に大きく位置づけられるものである。



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：100000）



1　出雲大社境内遺跡
2　真名井銅戈出土地
3　五反配遺跡
4　鹿蔵山遺跡
5　奉納山経塚
6　ひろげ遺跡
7　修理免本郷遺跡
8　菱根遺跡
9　原山遺跡
10　南原遺跡
11　中分貝塚
12　鷺銅山
13　矢野遺跡
14　大塚遺跡
15　小山遺跡
16　井原遺跡
17　白枝荒神遺跡
18　中野美保遺跡
19　中野清水遺跡
20　荻杼Ⅱ遺跡
21　高岡遺跡
22　姫原西遺跡
23　今市大念寺古墳
24　蔵小路西遺跡
25　海上遺跡
26　菅沢古墓
27　西谷墳墓群
28　高浜Ⅱ遺跡
29　天神遺跡
30　角田遺跡・宮松遺跡
31　築山遺跡
32　上塩冶築山古墳
33　長者原廃寺
34　山持遺跡
35　上塩冶地蔵山古墳
36　朝山古墓
37　大井谷Ⅰ遺跡
38　大井谷Ⅱ遺跡
39　上塩冶横穴墓群
40　三田谷Ⅰ遺跡
41　光明寺３号墓
42　青木遺跡
43　大寺１号墳
44　鳶ケ巣城跡
45　古志本郷遺跡
46　大梶古墳
47　田畑遺跡
48　下古志遺跡
49　宝塚古墳
50　妙蓮寺山古墳
51　放レ山古墳
52　小坂古墳
53　知井宮多聞院遺跡
54　神門横穴墓群
55　神西城跡
56　九景川遺跡
57　山地古墳
58　北光寺古墳
59　上長浜貝塚
60　猪目洞窟遺跡
61　鰐淵寺
62　上島古墳
63　国富中村古墳
64　西西郷廃寺
65　後谷Ⅱ遺跡
66　後谷遺跡
67　杉沢Ⅱ遺跡
68　荒神谷遺跡
69　神庭岩船山古墳
70　軍原古墳
71　高瀬城跡
72　加茂岩倉遺跡
73　神原神社古墳
74　天寺平廃寺

第3章　過去の調査

第1節　神門寺境内廃寺・神門寺付近遺跡（第3図）

神門寺は『雲陽誌』に「浄土宗天應山と號す，天平三年行基菩薩の開基なり（中略）相傳弘法歸朝の後密教を天下に流と欲たまふ，偶此州にいたり精基を求て宗風勸學の靈場となり神門寺と號す，天應元年建立故に天應山といふ（後略）」と記述のある寺である。神門寺境内廃寺と神門寺付近遺跡の出土品は，天應元年（781）よりさらに古い様相を示し，前章で述べたように『出雲国風土記』（733）に記載される神門郡朝山郷新造院にあてる説もある。

神門寺境内廃寺と神門寺付近遺跡の発見及び過去の調査等の概要については以下のとおりである。

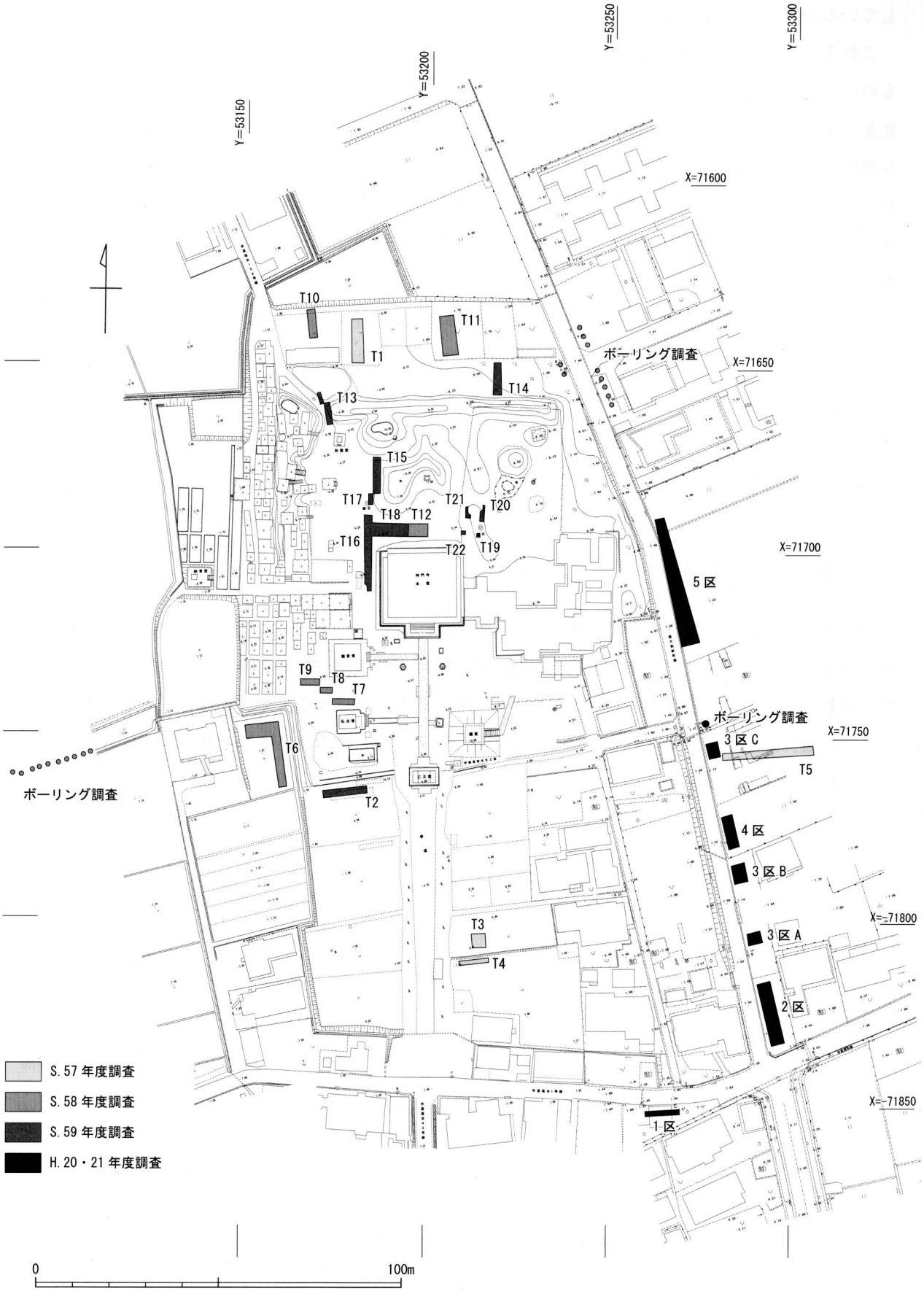
遺跡の発見は昭和22年（1947），井上狷介氏によって神門寺北方の路傍で採取された古代の瓦が契機となっている。その後，後藤稔氏らが神門寺境内より布目瓦が出土することに注目され，昭和25年（1950）には梅原末治氏の実地踏査によって，神門寺に保管されていた境内地出土瓦が井上氏採取瓦と類似した特徴を備えていること，境内地に古い礎石が存在することなどが明らかにされ，遺跡の位置と存在が確認された。当時から軒丸瓦の特徴（いわゆる水切り瓦）は注目されており，梅原氏によって備後寺町廃寺等，中国山地の古代寺院出土瓦との類似性が指摘されている。

昭和35年（1960）12月には神門寺の境内が「神門寺境内廃寺跡」として出雲市の指定文化財（史跡）に指定され，神門寺所蔵の「神門寺境内出土古瓦」も同時期に出雲市の指定文化財（考古資料）とされた。

昭和49年（1974）には，神門寺の東方で採集された縄文土器が宍道正年氏によって「神門寺東遺跡」出土縄文土器として報告されている。現在の神門寺付近遺跡の発見と言えよう。

昭和57年（1982）から昭和59年（1984）にかけては，出雲市教育委員会が3ヵ年にわたる国庫補助事業によって神門寺境内廃寺の寺域確認調査を実施している（神門寺境内廃寺1～3次調査・T1～T22及びボーリング，第3図）。調査では，遺構・遺物の分布状況等から古代寺院遺跡としての範囲が現神門寺境内の北東部を中心としており，その周辺にも古代寺院に伴わない遺構や縄文時代以降の遺物が広範囲に分布することが確認された。古代寺院に係る調査成果としては，多量の古代瓦が出土したほか，庫裡北側の礎石が版築を伴う基壇に据え置かれた原位置を保つことが確認されたのみである。そのほかには明確な古代の遺構は確認できていない。このときの神門寺境内廃寺1～3次調査等の成果によって，神門寺周辺にも相当の遺物散布地が広がることが明らかとなり，前述の神門寺東遺跡を含む周辺一帯が神門寺付近遺跡として知られるようになった。

平成20年（2008）から平成22年（2010）にかけては，出雲市教育委員会が都市計画道路医大前新町線3工区道路改良工事に伴う発掘調査を実施している（神門寺付近遺跡1～2次調査・H20・21－1～5区及びボーリング）。調査では南方のH20・21－2区で北東－南西方向に軸を取る時期不明の土手状遺構，溝状遺構が確認されたほか，北方の5区で中世期の墓壙や柱穴列，古墳時代前期の埋甕などが確認されている。古代寺院に係る調査成果としては，H20・21－5区を中心に一定量の瓦が出土



第３図　過去の調査地位置図（1：1500）

しているのみで，明確な古代の遺構は全く確認できていない。

これまでの調査では，古代寺院の寺域が現神門寺境内の北東部を中心としていることが想定できたものの，その広がりや伽藍配置の詳細については明らかとなっていない。また，出土瓦については軒丸瓦で単弁蓮華文軒丸瓦と水切りを伴う複弁蓮華文軒丸瓦の3類，丸瓦で5類，平瓦で7類，そのほか鴟尾，鬼瓦片等が報告されている。中でも水切り瓦の存在は古くから注目され，同笵瓦こそ発見されていないものの，備後寺町廃寺出土瓦などと酷似していることが指摘されてきた。また，これらの瓦群がおおむね奈良時代頃に製作されたものであることは異論ないところであるが，『出雲国風土記』編纂（733年）以前のものが含まれるか否かは議論の分かれるところであり，神門寺境内廃寺が風土記記載の「朝山郷新造院」に比定され得るかどうかの大きな論点となっている。

なお，古くから神門寺境内廃寺については「朝山郷新造院」のほか「古志郷新造院」に比定する説が論じられてきたが，平成10年（1998）から平成11年（1999）にかけて島根県教育委員会によって実施された古志本郷遺跡の発掘調査によって神門郡家の位置がほぼ確定し，古志郷新造院説は風土記に記述された位置関係と大きく矛盾することが明らかとなっている。

第2節　高西遺跡

神門寺付近遺跡の北西に広がる遺跡である。高西遺跡については1970年代にはその存在が確認されているものの，これまで発掘調査等は実施されておらず，昭和62年（1987）に実施された出雲市教育委員会による分布調査や同年度に実施された田中義昭氏らによる分布調査等で採集された弥生土器，土師器，須恵器片等によって時期と範囲が推察されているのみである。遺物の時期は弥生時代後期と古墳時代後期以降が中心となるようであるが，遺跡の実態は不明な点が多い。

参考文献

梅原末治 1952「古瓦についての一・二の覚書」『史迹と美術』第22輯―8
出雲市教育委員会 1956 『出雲市の文化財』出雲市文化財調査報告第1集
宍道正年 1974 『島根県の縄文土器集成』Ⅰ
出雲市教育委員会 1983 『神門寺境内廃寺1次発掘調査概報』
出雲市教育委員会 1984 『神門寺境内廃寺2次発掘調査概報』
出雲市教育委員会 1985 『神門寺境内廃寺』
出雲市教育委員会 1987 『塩冶地区遺跡分布調査報告』Ⅱ
田中義昭・西尾克己 1988 「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』第4号　島根大学山陰地域研究総合センター
妹尾周三 1993 「寺町廃寺軒丸瓦の伝播－備後寺町廃寺と出雲神門寺境内廃寺－」『島根考古学会誌』第10集　島根考古学会
山本清 1995 『古代出雲の考古学―遺跡と歩んだ70年―』ハーベスト出版
島根県教育委員会 2003 『古志本郷遺跡Ⅴ』
出雲市教育委員会 2009 『神門寺付近遺跡Ⅰ』 出雲市の文化財報告9
出雲市教育委員会 2010 『神門寺付近遺跡Ⅱ』 出雲市の文化財報告13

第4章　調査の概要

1．調査方法の概要（第4図）

調査地は既存道路やその他既設工作物，排土置場等の状況を勘案し，23～24年度の調査区は便宜上11区に分けたが，遺構・遺物の分布状況から判断し，面的な発掘調査は1区と5～11区のみで実施した。調査は基本的に造成土・客土を重機により掘削し，その後手掘りによって遺物包含層を掘り下げ，遺構・遺物の確認を土層ごとに行って調査を進めた。

なお，グリッド設定については北北西－南南東方向に狭長な調査区の形状を勘案し，各調査区北西端部を始点として長軸方向に5mピッチでグリッド設定を行った。基準となる杭には調査区ごとにアラビア数字を付与し，グリッド名称は各グリッド北西の杭の名称とした。

2．基本層序の概要（第5図）

各区の基本的な土層堆積状況は第5図のとおりである。6～11区では標高7～6.5m程度で近世～古代を中心とした時期の遺物包含層と近世頃の遺構面が，標高6.5m前後でシルト層・砂層を基盤層とした古代～中世を中心とした時期の遺構面が確認された。6区北端付近以北では地形が急激に落ち込み，標高6m前後で近世～古代を中心とした遺物包含層が，標高6m弱で近世～中世を中心とした時期の遺構面が，標高5.5m前後で古墳時代初頭以前の遺物包含層が確認された。

ただし，5区と1区南端では遺物散布状況も極めて少なく遺構も確認されていない。2～4区間においても一部トレンチ調査を実施したが，同様の状況である。この間には遺跡の断絶があると考えられる。断絶を挟んで北の1区が高西遺跡，南の5～11区が神門寺付近遺跡としてとらえられよう。

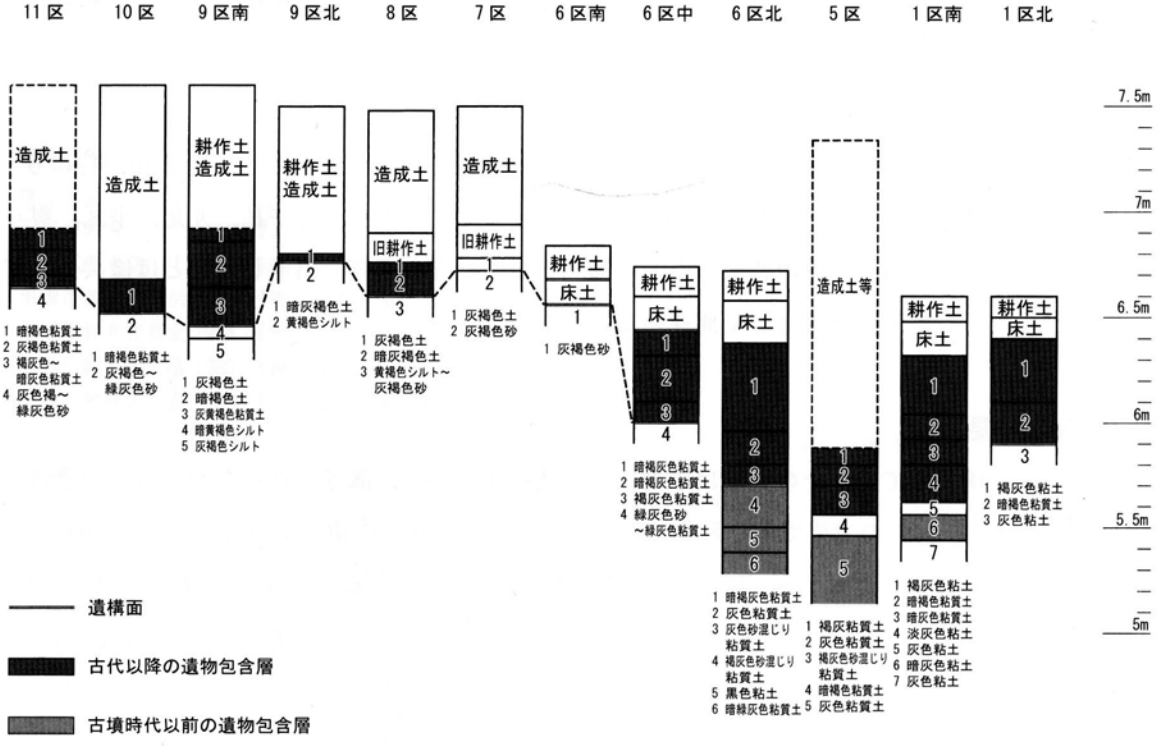
3．包含層遺物の概要

遺物包含層からは縄文時代から近世に至るまで幅広い時期の遺物が確認されているが，特に6～11区の区間では出土した遺物の大半が古代の瓦片となっており，軒丸瓦，軒平瓦，丸瓦，平瓦，熨斗瓦などその種類も豊富である。その特徴も過去の神門寺境内廃寺の調査で出土した瓦とほぼ共通しており，神門寺境内廃寺関連の資料として間違いないであろう。

4．遺構の概要

検出された遺構としては，その大半は中世以降の建物跡，井戸，溝等であったが，古代の遺構として6区の溝SD 06，古代の遺構である可能性があるものとして6区の溝SD 09がある。溝SD 06と溝SD 09は共に6区で検出された検出幅1.5m前後のほぼ平行に走る溝である。より削平の少ないSD 06では埋土上層より7世紀末～8世紀の土器と共に大量の瓦溜りが確認されており，古代寺院の北端を示す溝である可能性がある。弥生時代の遺構として9区の竪穴建物SI 01が確認された。弥生時代終末期の竪穴建物跡で，復元平面形は1辺5m程度の隅丸方形と推測される。

第４図　調査区配置図（1：2500）



第５図　調査区土層柱状図

第5章　高西遺跡（1区）の調査

1区は約50 m×8 m，約400 m^{2}の調査区で，今回の発掘調査では最も北に位置する。神門寺付近遺跡とは断絶が見られ，調査地の北西に広がる高西遺跡の一部と考えられよう。

基本的な層序は上から①耕作土・床土，②褐灰色粘土，③暗褐色粘質土，④暗灰色粘質土，⑤淡灰色粘土，⑥灰色粘土，⑦暗灰色粘土，⑧灰色粘土となっており，⑤⑥層上面の標高約5.9 mにおいて遺構を確認している。また，③層で近世～古代の遺物を，④層で中世～古代の遺物を，⑤層で古代の遺物を，⑦層で土師質の土器細片を確認している。⑧層以下では遺構遺物は全く確認されていない。

検出された遺構は畝状遺構1区画，溝2条（SD 01，SD 02），ピット2基（P 1，2）がある。ただし，確実に人為的に築かれた遺構は畝状遺構と溝SD 01のみで，その他は不整形な形状を呈している。いずれも遺構に伴う遺物が僅少のため時期判断が困難であるが，包含層出土遺物から中世以降のものと推察される。

1．遺　構

畑遺構（畝状遺構，溝SD 01）（第7・8図，図版1）

南北約25 mに渡って平行に築かれた畝状の遺構と，その南端を区画する溝である。畝状遺構はN－50～65°－E方向に，溝SD 01はN－55°～60°－E方向に主軸をとり，ほぼ同一の方位軸を示す。

畝状遺構は浅い掘り込み列のみが断片的に残存しており，調査区西半部ではその大部分が削平されて消失している。確認される掘り込み列は30列余りであるが，本来は南北約25 mの間に35～36列の掘り込み列があったものと考えられる。掘り込み列センター間の平均値は約72 cm，残存状況の良いもので1列の幅約30 cm，深さ約10 cmを測る。埋土は砂混じりの暗灰色粘土が堆積し，古代～中世期の須恵器，土師器小片が少量出土している。

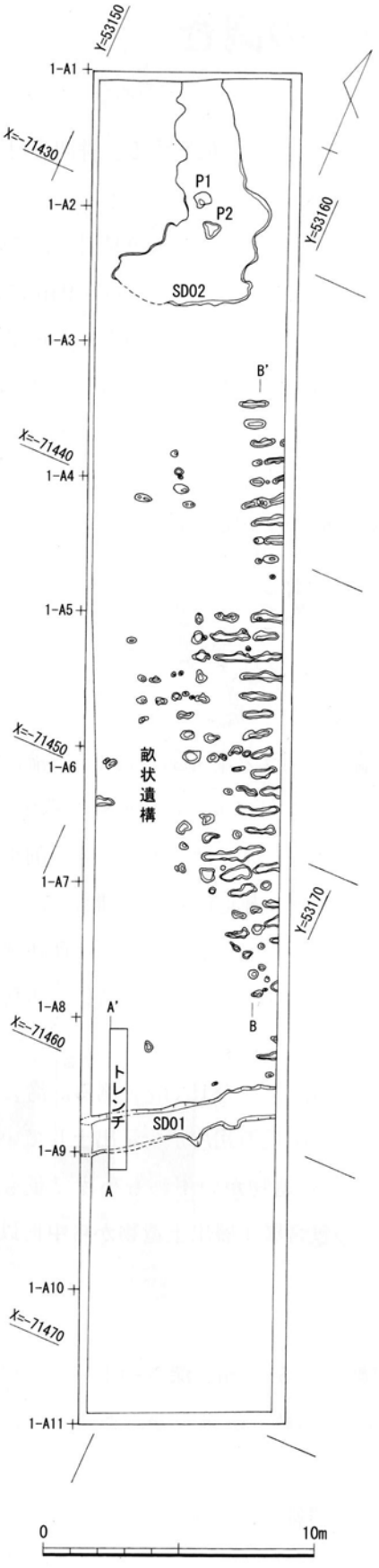
溝SD 01は畝状遺構の南端に平行して掘られた溝で，幅約1.3 m，深さ約15 cmを測る。溝には畝状遺構と同様に砂混じりの暗灰色粘土が堆積し，土師器細片と奈良時代の瓦片が少量出土している。

畝状遺構と溝SD 01は一体的な畑遺構と推定される。遺構出土の遺物がいずれも小片で量も僅少であるため，遺構内出土遺物からの時期判定は難しいが，直上の包含層④層出土遺物から中世以降のものと推察される。

自然流路SD 02（第8図，図版1）

調査区の北端で確認された不整形な浅い溝である。現状で幅約1.5～3 m，深さ約1～5 cm程度を測る。基本的には北北西―南南東方向へ伸びるが，調査区北端から約6 m地点から西南西方向へ屈曲している。

遺構内の堆積土には礫・砂が多く混じり，遺物も摩滅著しい土器細片しか確認されないことなどから，自然に形成された一時的な小流路跡の可能性が高い。近世以降の削平を受けており，出土遺物も僅少であることから時期についても不明である。



第６図　１区遺構配置図（1：250）

ピット（P１，２）（第８図，図版１）

自然流路 SD 02 の堆積土上から掘り込まれたピットが２基確認されている。いずれもやや不整形な形状で，径約 60 cm，深さ約 10 cm を測る。遺物はＰ２より須恵器細片が１点出土しているのみである。近世以降の削平を受けており，出土遺物も僅少であることから時期・性格についても不明である。

２．遺　物

（１）遺構内出土遺物（第９図―1・10・11，図版 14・17）

畝状遺構出土遺物（第９図―１）

１は須恵器坏蓋を転用硯として使用したものである。内面に墨痕と摩耗が観察される。その他，須恵器，土師器の小片が数点出土している。

溝 SD 01 出土遺物（第９図―10・11）

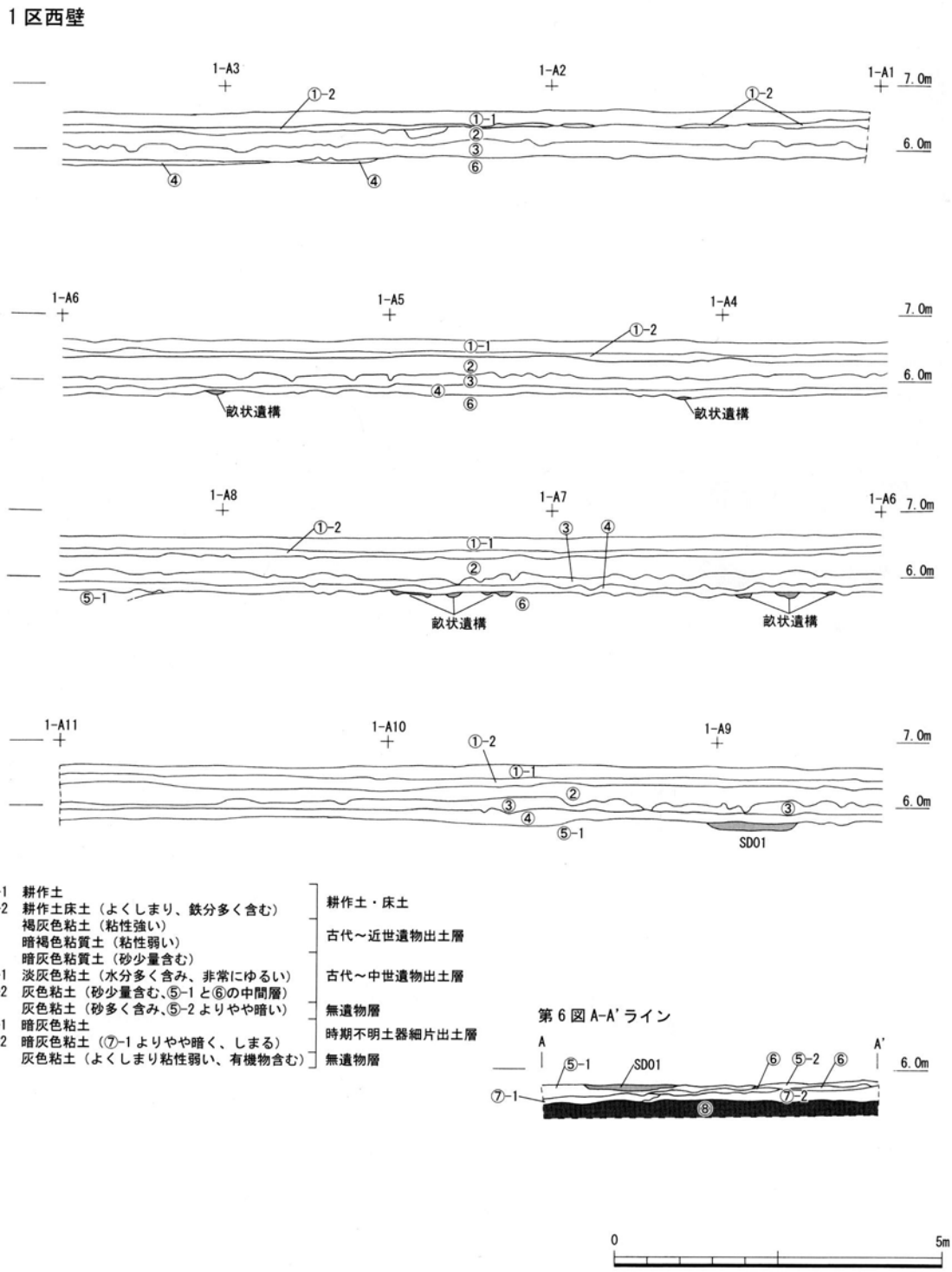
10 は隅切瓦で，凹面の布目痕，凸面の格子叩きスリケシが確認できる。11 は厚手の平瓦で，凹面の布目痕，凸面のタテ縄叩きが確認できる。その他，土師器細片も数点出土している。

（２）包含層出土遺物（第９図―2～9，12～14，図版 17）

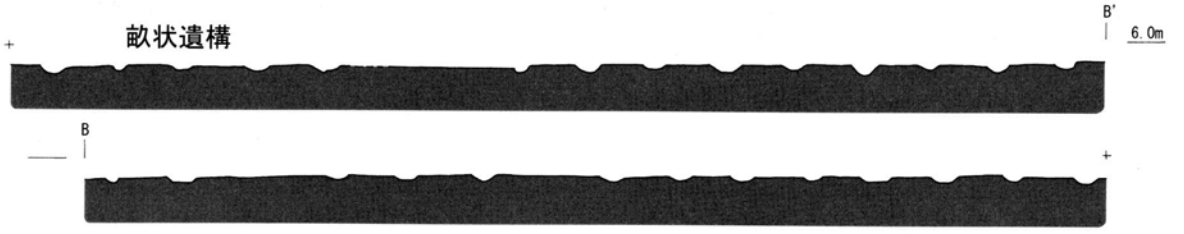
包含層出土遺物は瓦のほか土師器，須恵器，陶磁器等が確認されている。土器資料の大半は風化著しい土器小片で，図化可能な遺物はわずかであった。以下に④層以下の出土遺物を中心としてその概要を記す。

２～５は須恵器で，２は坏，３・４は高台付の皿または坏の底部，５は壺底部である。壺底部の内面には一部漆が付着している。６・７は土師器坏である。６は高台が付き，７は外面に赤色塗彩，底面に回転糸切り痕が残る。８は備前系の片口鉢または擂鉢の口縁部である。９は 1008 年初鋳の宋銭「祥符元寶」である。12～14 は平瓦で，凹面にはいずれも布目痕が残り，凸面には縄叩き痕が残る。12 はヨコ縄叩き，13・14 はタテ縄叩きである。その他図化していないが，青磁，白磁小片等も出土している。

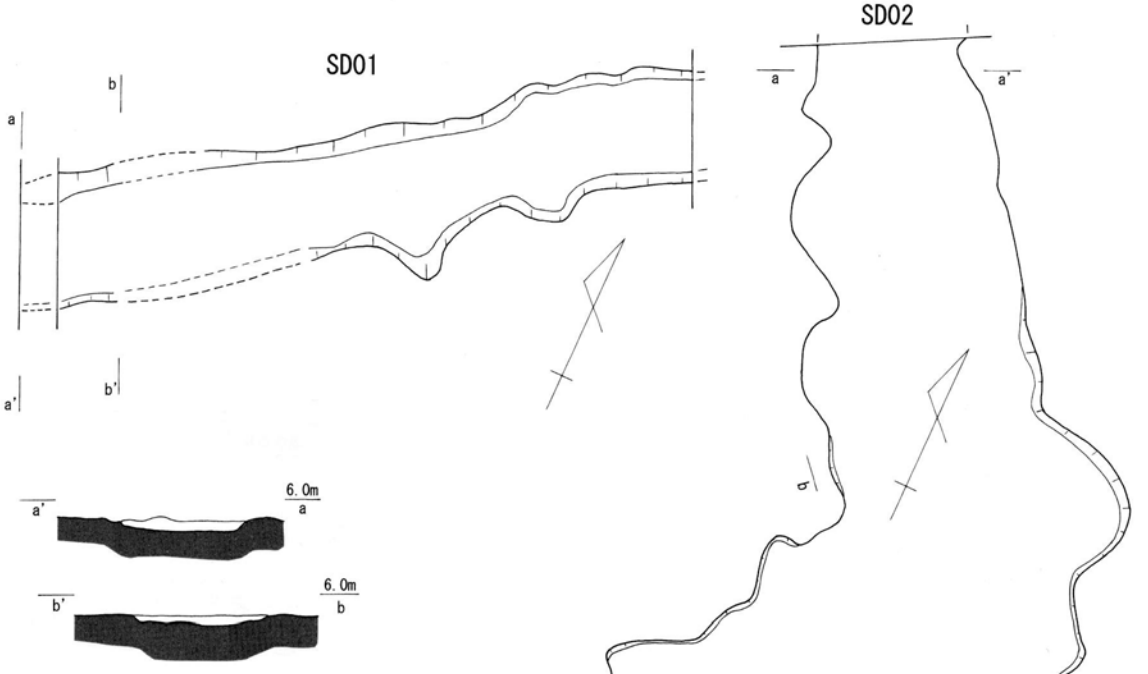
上記の遺物は全て④層出土遺物であるが，遺構面以下の⑤層で須恵器細片，⑦層で土師質の土器細片も確認されている。

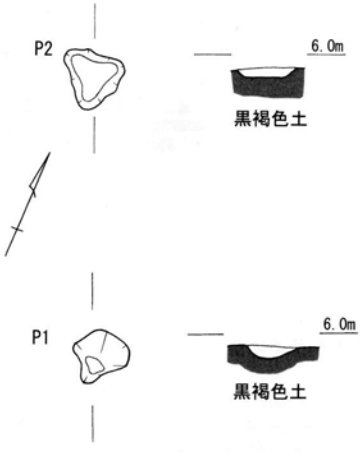


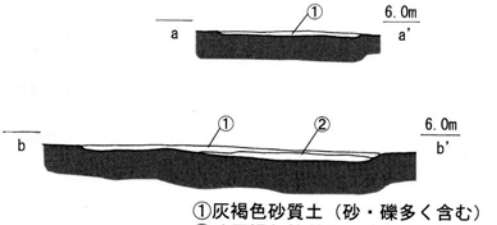
第7図　1区土層堆積状況（1：100）



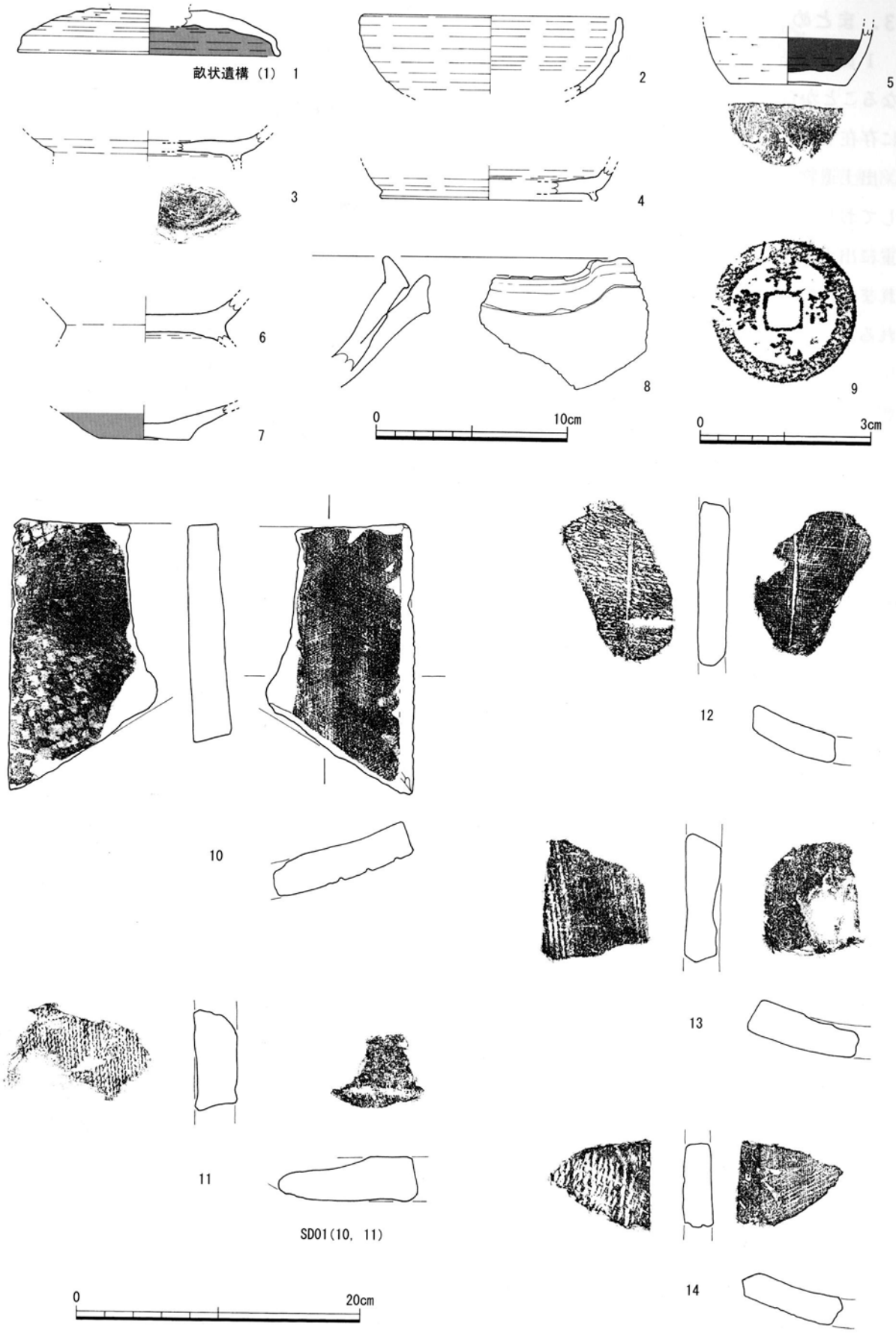
※第６図 B-B' ライン







第８図　１区遺構実測図（1：80）



第９図　１区出土遺物実測図（1～8，1：3）（9，1：1）（10～14，1：4）

３．まとめ

１区の調査では中世以降の畑遺構が確認された。調査区南方では地形が低くなり，遺構も少なくなることから，高西遺跡の縁辺部にあたると考えられる。建物跡などの生活の中心部は調査地の北西に存在するであろう。

出土遺物の中には数点の瓦がある。神門寺付近遺跡の北端から100 m以上離れた地点からも出土しており，神門寺境内廃寺との関連は不確実ではあるが，神門寺付近遺跡に近い調査区の南寄りから主に出土することから，神門寺境内廃寺において使用された瓦であった可能性は高い。瓦の中にはこれまで神門寺境内廃寺・神門寺付近遺跡で確認されていなかった隅切瓦が出土していることも注目される。

第6章　神門寺付近遺跡（5～11区）の調査

第1節　5・6区の調査

5区は約10 m×6 m，約60 m²，6区は約36 m×6 m，約215 m²の調査範囲で，1区の南南東約80 m，神門寺付近遺跡の北端にあたる調査区である。

基本的な層序は調査区の南北で大きく異なるが，6区の北地点で①耕作土・床土，②暗褐灰色粘質土，③灰色粘質土・灰色砂混じり粘質土，④灰褐色砂混じり粘質土，⑤黒褐色粘土，⑥暗緑灰色粘質土，⑦緑灰色粘砂，⑧緑灰色粘砂，灰褐色砂（地山）となっており，①②層下面から連続する標高約5.9 m～6.6 mで中世～近世の遺構面を，③④層下面から連続する標高約5.7 m～6.6 mで古代～中世の遺構面を確認している。また，②層で古代～近世の遺物を，③④層で古代～中世の遺物を，⑤層以下で縄文～古墳初頭の遺物を確認している。6区の南地点では基盤層となる⑧層が高まり，後世の削平等によって中世以前の包含層はほとんど消失している。反対に6区北方の5区においては基盤層が標高4.4 m以下まで急激に落ち込んでおり，標高5.7 m前後で若干の土層の乱れが見られるものの，明確な遺構面は確認できなかった。包含層出土遺物も僅少である。

検出された遺構は6区のみで，溝7条（SD 03～09），井戸1基（SE 01），土手状遺構1条（SX 01），土壙1基（SK 01），ピット1基（P 3）がある。この内古代の遺構は溝SD 06と溝SD 09のみであり，その他は全て中近世の遺構と考えられる。

また，6区は過去の神門寺付近遺跡の調査を通じて最も瓦の出土量が多かった調査区であり，古代以降の包含層・遺構からは大量の瓦が出土している。瓦については第4節において別に報告することとする。

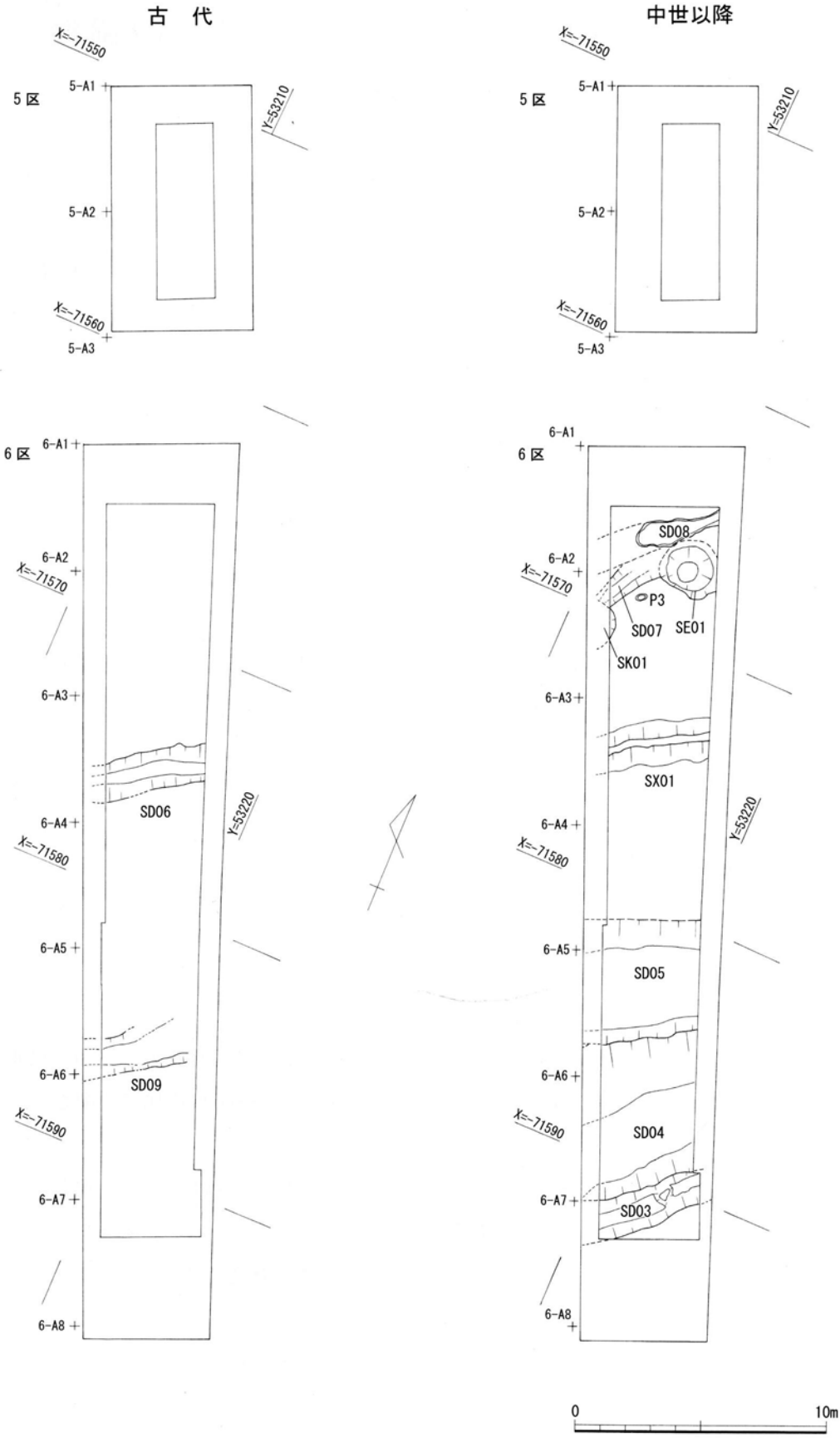
1．遺　構

溝群SD 03～05，SD 09（第12・13図，図版2・3）

6区の南半部で検出された，時期の異なる4本の溝群である。いずれも西南西～南西―東北東～北東方向に主軸をとる。その土層堆積状況からSD 09→SD 04→SD 03→SD 05の順で掘削されたと考えられる。

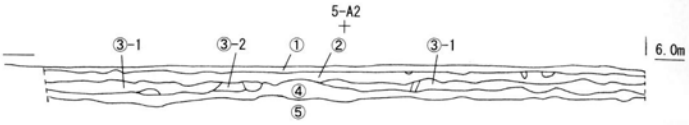
溝SD 09は北側の大部分を溝SD 05によって壊され，南側も削平を受けている。残存部検出面で最大幅約1.6 m，深さ約0.3 mを測るが，本来はこれ以上の規模があったものと考えられる。主軸方向はN－55°～60°－E。埋土は粘性弱い砂混じりの灰色粘質土を主体とする。出土遺物は瓦のほか8世紀の須恵器小片が確認された。

溝SD 04はその両肩を溝SD 03と溝SD 05によって壊されているが，ある程度本来の形状を留めている。残存部で幅約7 m，深さ約0.9 mを測る。主軸方向はN－40°～45°－E。埋土は下層（溝SD 04　④層以下）で砂・粘土が互層状に堆積する。出土遺物は瓦のほか12世紀前後の土師器，8世紀の須恵器，羽口などが確認された。瓦については特に埋土上層（SD 04　②③層）を中心に多く出土



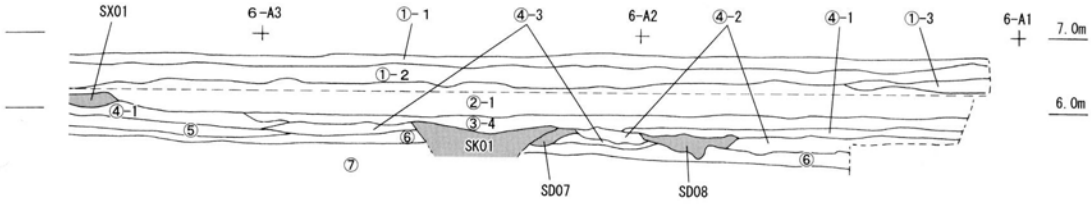
第10図　5・6区遺構配置図（1：250）

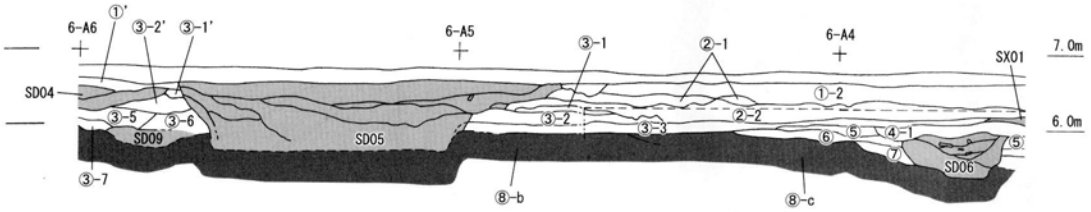
5区西壁

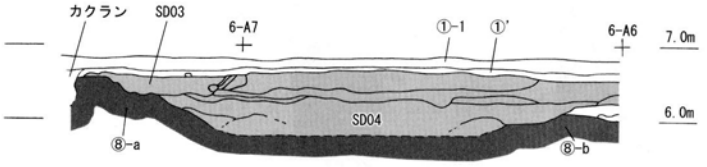


①	褐灰色粘質土（炭化物・小砂利を含む）	古代以降遺物出土層・6区②〜③層に似る
②	灰色粘質土（炭化物・小砂利を少量含む）	
③-1	褐灰色粘砂土（砂多く含む）	無遺物層
③-2	褐灰色粘砂土（砂少ない）	
④	暗褐色粘質土（粘性強くしまりがない）	
⑤	灰色粘質土	弥生時代遺物出土層

6区西壁



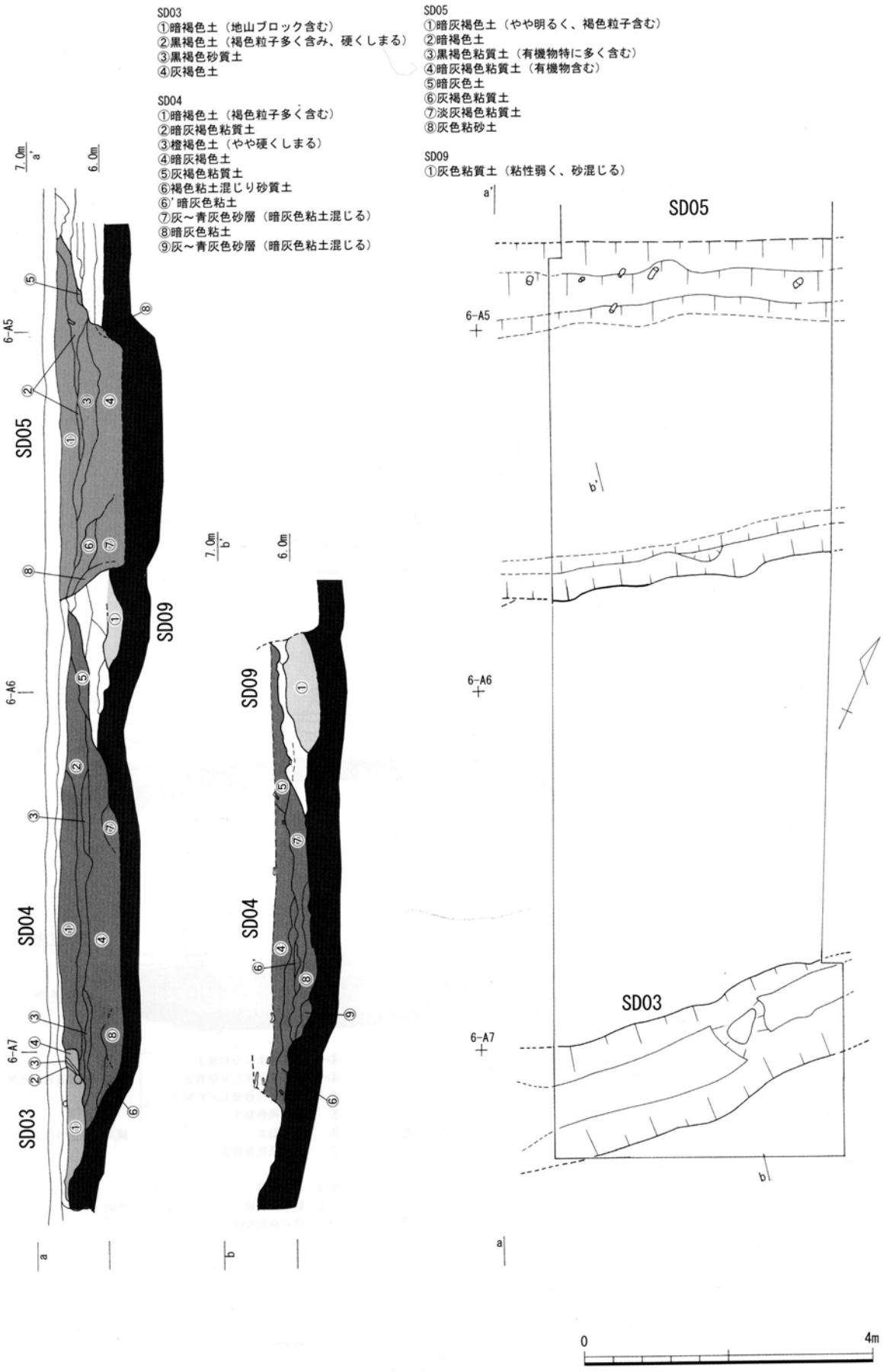




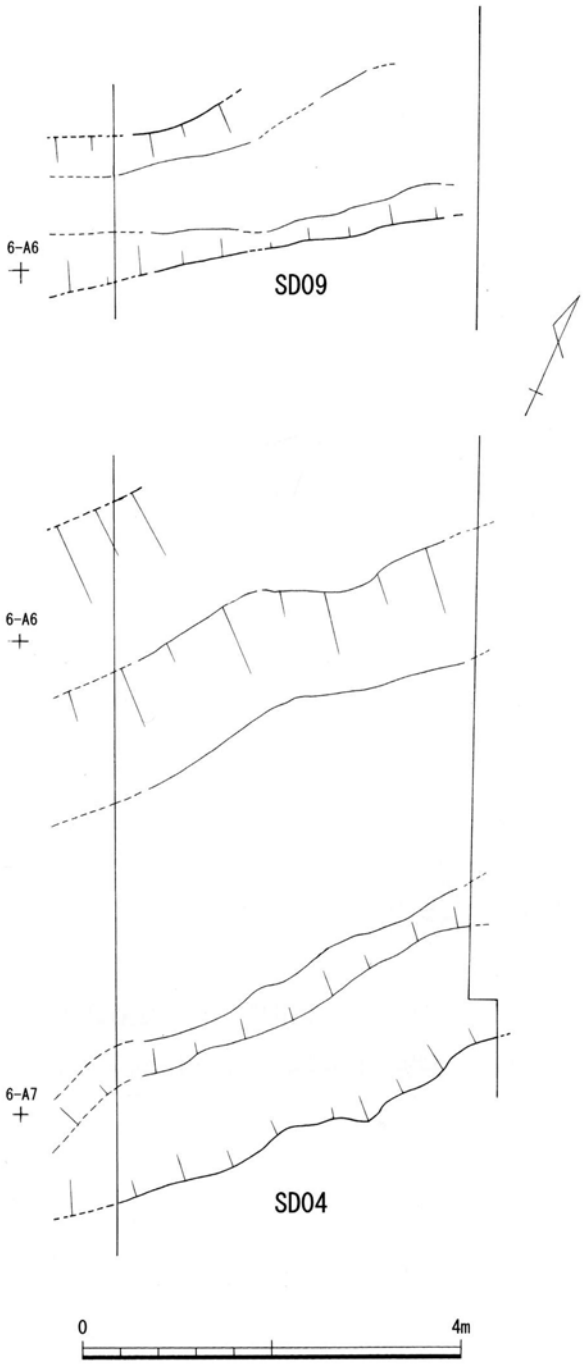
①-1	耕作土	耕作土・床土
①-2	橙灰褐色土（ビニル・ガラス片含む）	
①-3	橙灰褐色粘質土	
①'	橙褐色砂質土	
②-1	暗褐灰色粘質土（橙色粒子含む）	古代〜近世遺物出土層
②-2	暗褐灰色粘質土（炭化物含む）	
③-1	褐灰色砂混じり粘質土	古代〜中世遺物出土層
③-2	褐灰色粘土	
③-3	褐灰色粘質土（しまった土質）	
③-4	灰色粘質土	
③-5	暗褐灰色粘土	
③-6	暗灰色粘土	
③-7	暗灰色粘質土（粘性弱い）	
④-1	灰色砂まじり粘質土	弥生〜中世遺物出土層
④-2	灰褐色砂まじり粘質土	
④-3	淡褐灰色砂まじり粘質土	
⑤	暗灰褐色粘土	縄文〜弥生時代遺物出土層
⑥	黒色粘土	
⑦	暗緑灰色粘質土	
⑧-a	灰褐色砂	地山
⑧-b	緑灰色粘砂	
⑧-c	緑灰色粘質土	

0　5m

第11図　5・6区土層堆積状況（1：100）



第12図　6区遺構実測図ー1（1：80）



第13図　6区遺構実測図ー2（1：80）

している。

溝SD 03は溝SD 04の南肩を壊して掘削されている。溝群の中では最も小規模な溝で，幅1.3～1.7 m，深さ0.25 m前後を測る。主軸方向はN－40°～45°－E。埋土は地山ブロック含む暗褐色土を主体とする。出土遺物は瓦のほか須恵器，土師器，羽口等が確認されたが，その大半が溝SD 04から流入したものと考えられる。

溝SD 05は検出幅で3.9～4.4 m，本来約5 mの幅を持つ溝で，深さ約1 mを測る。ただし，標高5.8 m以下では大量の水と砂が湧き出すボイリング現象が起こり面的な調査が困難となったため，最深部は部分的な確認のみに止めた。その他，標高6.2 m前後の傾斜が緩やかとなる地点で杭列が確認されている。主軸方向はN－60°～65°－E。SD 03・04検出面の上層から掘削されている。埋土は有機物を多く含む黒褐色～暗灰褐色粘質土（SD 05　③④層）を主体とするが，土層堆積状況からこれが掘り返し後の堆積土であることが確認できる。出土遺物は瓦のほか古代の須恵器，中近世の土師器，陶磁器，漆器などが確認される。埋土最上層（SD 05　①層）では近代のものと思われる陶器片，ガラス片も混在していた。掘削時期は確定できないが，掘り返しを行いながら近代まで使用された溝である。

溝群の時期をまとめると，溝SD 09が8世紀以降12世紀以前，溝SD 04が12世紀頃，溝SD 03がSD 04以降，溝SD 05がSD 03以降近代までとなる。

溝SD 06（第14図，カラー図版2，図版4）

調査区の北寄り，3グリッドで検出された幅約1.5 m，深さ0.5～0.6 mを測る溝である。主軸方向はN－55°～60°－E。遺構埋土下層（SD 06　④～⑥層）ではほとんど遺物が確認されていないが，埋土上層（SD 06　①②層）において7世紀後葉～8世紀前葉頃の須恵器と共に大量の瓦溜りが確認された。出土した瓦は，第4節で後述する軒丸瓦Ⅰ類，軒平瓦，丸瓦1～5類，平瓦1～5類が混在し

ている。

溝 SD 07（第16図，図版2）

6区の北端付近，1～2グリッドで検出された幅約1m，深さ約0.15mを測る溝である。主軸方向はN－25°～30°－E。遺物は土師器片1点のみが確認される。土師器は細片のため図化しておらず詳細な時期も不明だが，胎土は中世期のものに似る。後述の井戸SE 01や溝SD 08より先行する遺構であることが確認できるが，遺構埋土が溝SD 08の遺構埋土と類似しており，大きな時期差はないものと考えている。

溝 SD 08（第16図，図版2）

6区の北端，1グリッドで検出された溝である。遺構面である④－2層上面においての検出が困難であったため，平面形は1層下の⑥層上面においての検出となったが，壁面土層から幅約1.3m，深さ約0.2～0.3mの規模を確認した。主軸方向はN－40°～50°－E。遺物は瓦片が少量確認されるのみである。溝SD 07より後出し，井戸SE 01より先行する遺構であることが確認できる。

井戸 SE 01（第15図，図版4）

6区の北寄り，1～2グリッドで検出された復元径約2.5m，深さ1.6m以上の井戸である。水溜部分は大量の湧き水により遺構壁面崩落の危険が生じたため底面まで確認できていない。埋土上層（SE 01②～⑥層）には石，古代瓦が多く混入していたが，井戸側・水溜め等に石材，古代瓦を使用した痕跡は認められない。出土遺物は上記の古代瓦のほかに土師器坏，皿，鉄鎌，木製品などが確認された。土師器の特徴から井戸SE 01は12世紀頃に使用されたものと考えられる。

土壙 SK 01（第16図，図版2）

6区の北端付近，2グリッドで検出された土壙である。調査区外に広がる遺構であるため詳細は不明であるが，調査区壁面で幅約2m，深さ0.4m以上を測る。遺物は土師器細片と瓦片が少量確認されるのみである。溝SD 07より後出する遺構であることが確認できる。

土手状遺構 SX 01（第16図，図版4）

6区の北寄り，3グリッドで検出された底面幅約1.5～1.8m，上面幅約0.3～0.5m，高さ約0.2～0.3mを測る硬く締まった土で築かれた土手状遺構である。主軸方向はN－53°～62°－E。遺構構築土や遺構面以下の包含層から12～14世紀代の土師器が確認されている。

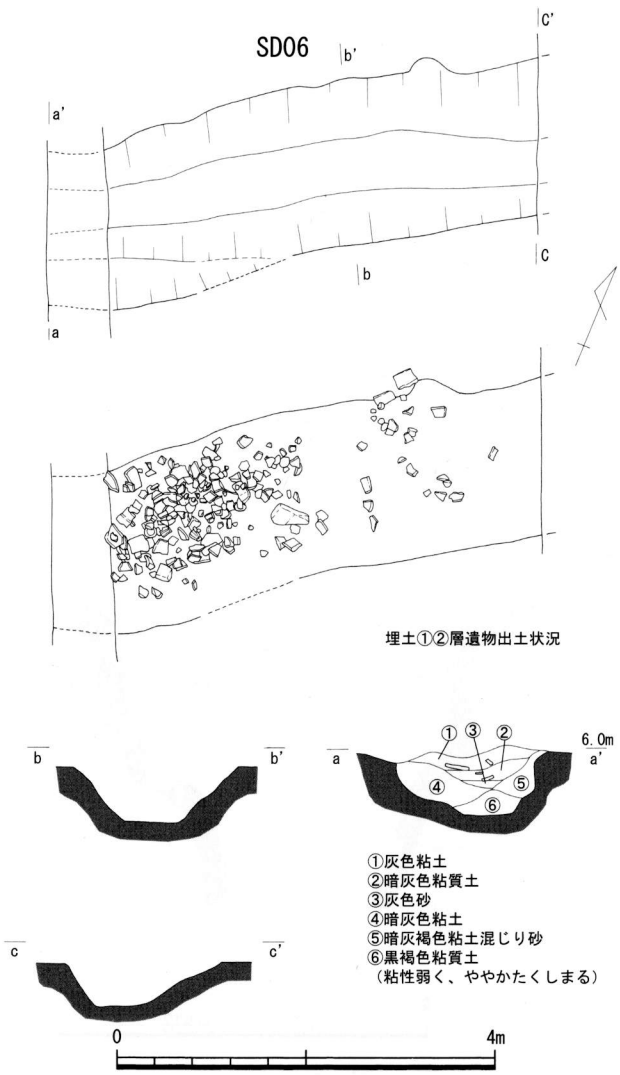
2．遺　物

（1）遺構内出土遺物（第17・18図，図版15，16）

溝群 SD 03～05，SD 09 出土遺物（第17図，第18図－1～6）

第17図－1は溝SD 09出土遺物で，8世紀中葉～後半頃の須恵器坏の口縁部である。

第17図－2～13は溝SD 04出土遺物で，2～7が須恵器，8～12が土師器，13が羽口である。比較的大型の土器片では7の鉄鉢形須恵器があるが，これはSD 03出土土器片と接合したものである。13の羽口は製鉄の小鍛冶に用いたものと考えられる。須恵器の時期はいずれも8世紀代を中心とした時期のものであるが，堆積土下層から出土した10～12の土師器は12世紀前後の特徴を示す。



第14図　6区遺構実測図ー3（1：80）

第17図ー14～18は溝SD03出土遺物である。14は須恵器坏蓋を転用硯として使用したもので，内面に墨痕と摩耗が観察される。15・16が土師器甕，17・18が13と同様の羽口である。出土遺物の多くが溝SD04からの混入品と考えられる。

第18図ー1～6は溝SD05出土遺物で，1・2は須恵器，3は陶胎染付椀，4・5は総赤色の漆器椀，6は燻瓦である。陶磁器，漆器，燻瓦はいずれも近世以降のものであろう。

溝SD06出土遺物（第18図ー7～11）

第18図ー7～10は須恵器で，7は壺蓋を転用硯として使用したもの。内面に墨痕と摩耗が観察される。8が坏，9が灯明皿形土器，10が甑，11が甕である。甕を除く須恵器は7世紀後葉～8世紀前葉の時期であろう。

井戸SE01出土遺物（第18図ー12～17）

第12図ー12～14は土師器坏皿，15は鉄鎌，16・17は木製品である。土師器は12世紀頃である。

（2）包含層出土遺物（第19図，図版17～19）

5区包含層出土遺物（第19図1～3）

出土遺物は僅少であり，瓦のほか弥生土器，土師器，須恵器の小片がわずかに確認されるのみであった。②③層から瓦，土師器，須恵器が，⑥層から弥生土器が出土しており，④⑤層，⑦層以下では遺物は全く確認されていない。

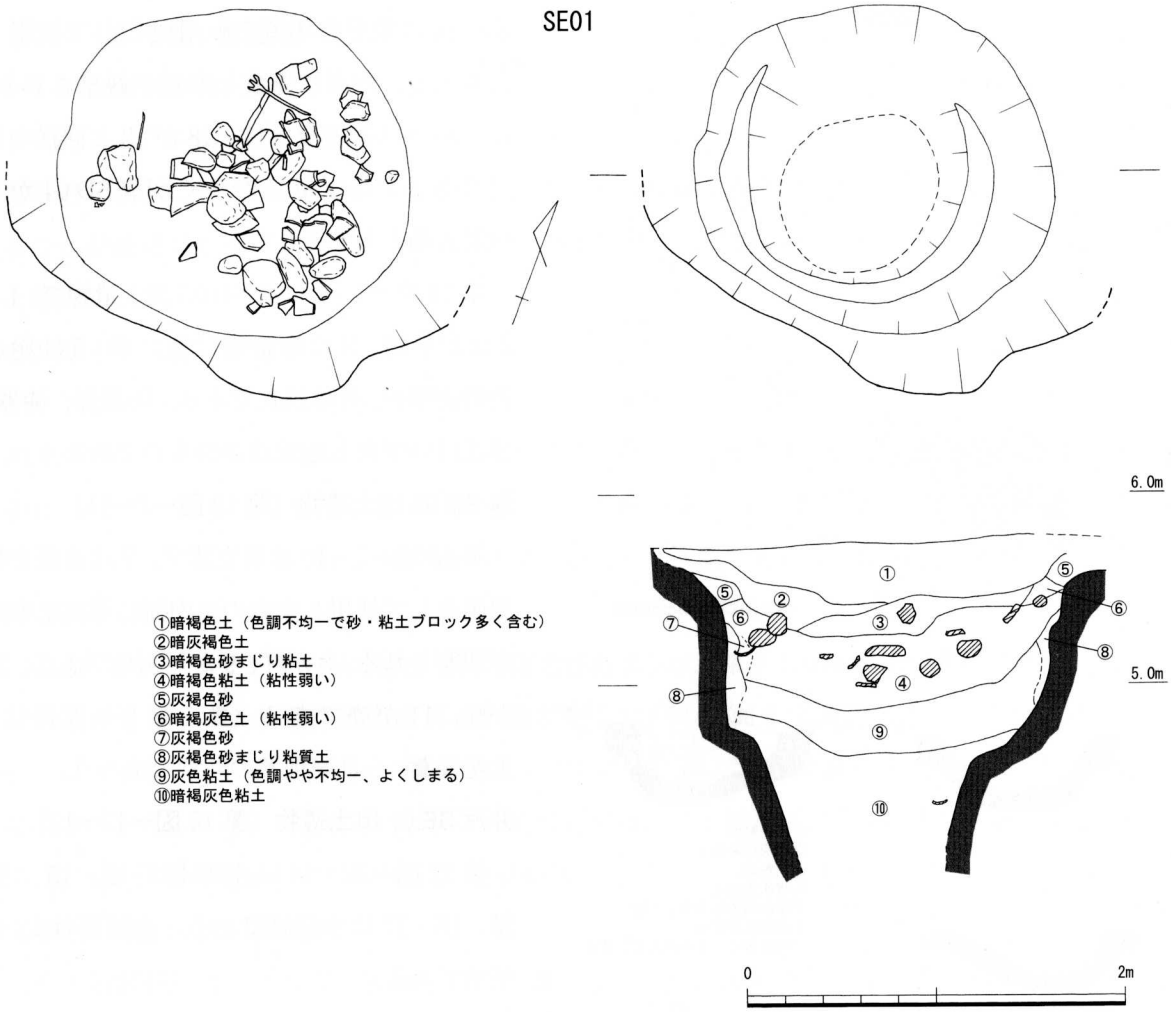
土器資料で図化可能なものは1～3の3点で，1が⑥層出土の弥生土器，2・3が②③層出土の須恵器である。土師器は全て細片であった。

6区包含層出土遺物（第19図4～27）

瓦のほか縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，羽口，砥石，金属製品，土製品，木製品等が確認されている。以下に③層以下の出土遺物を中心としてその概要を記す。

4～10は④層下面～⑥層出土遺物である。4が滋賀里Ⅰ式併行の縄文土器深鉢，5～8が弥生土器甕，9が弥生土器高坏，10が弥生土器注口土器である。縄文土器は縄文時代後期後葉，弥生土器は弥生時代後期後葉～終末期に位置づけられるものである。なお，⑦層からも弥生土器細片が確認されている。

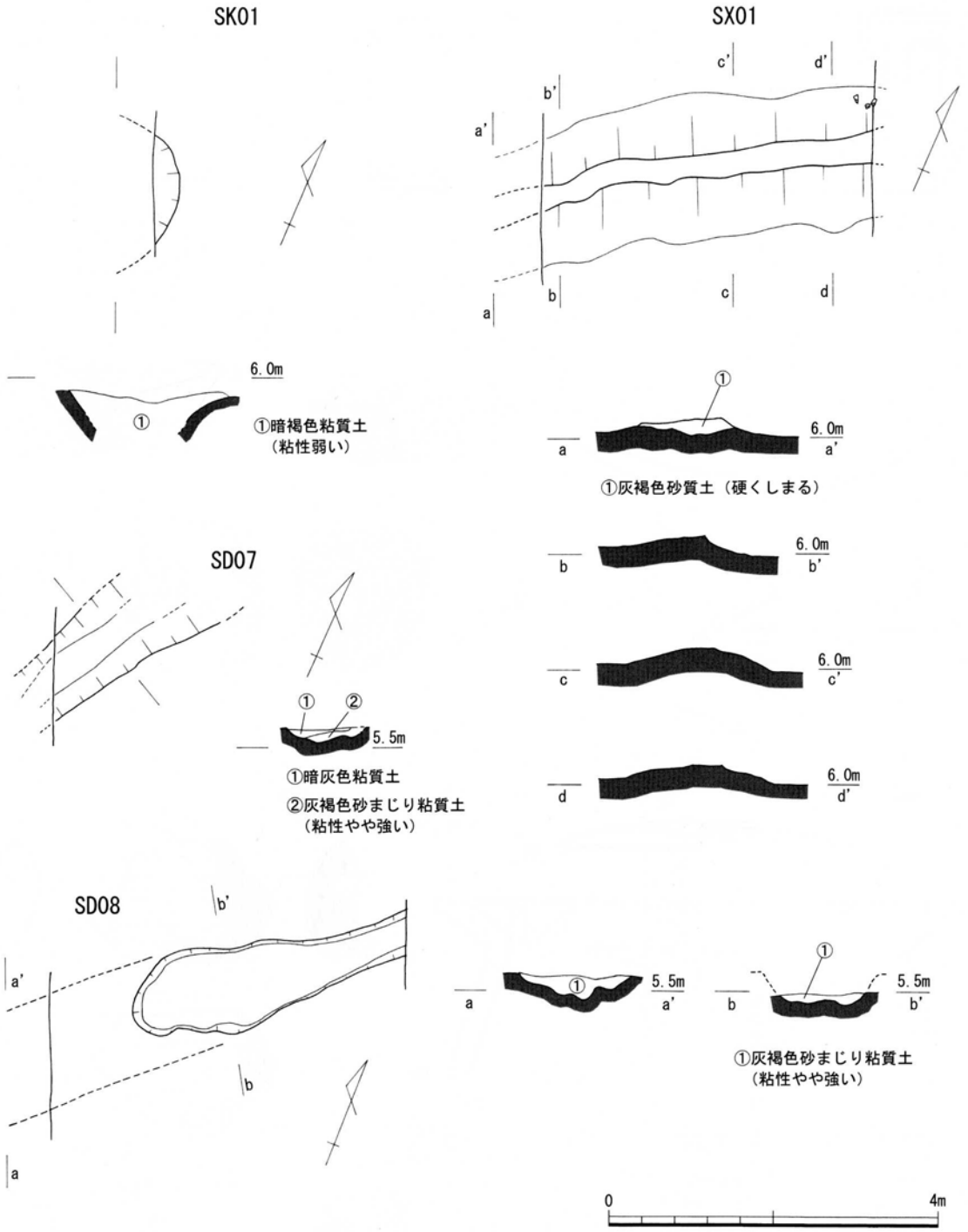
11～22は③④層出土遺物である。11～14は須恵器で，11は坏蓋，12は坏，13は高台付坏，14は



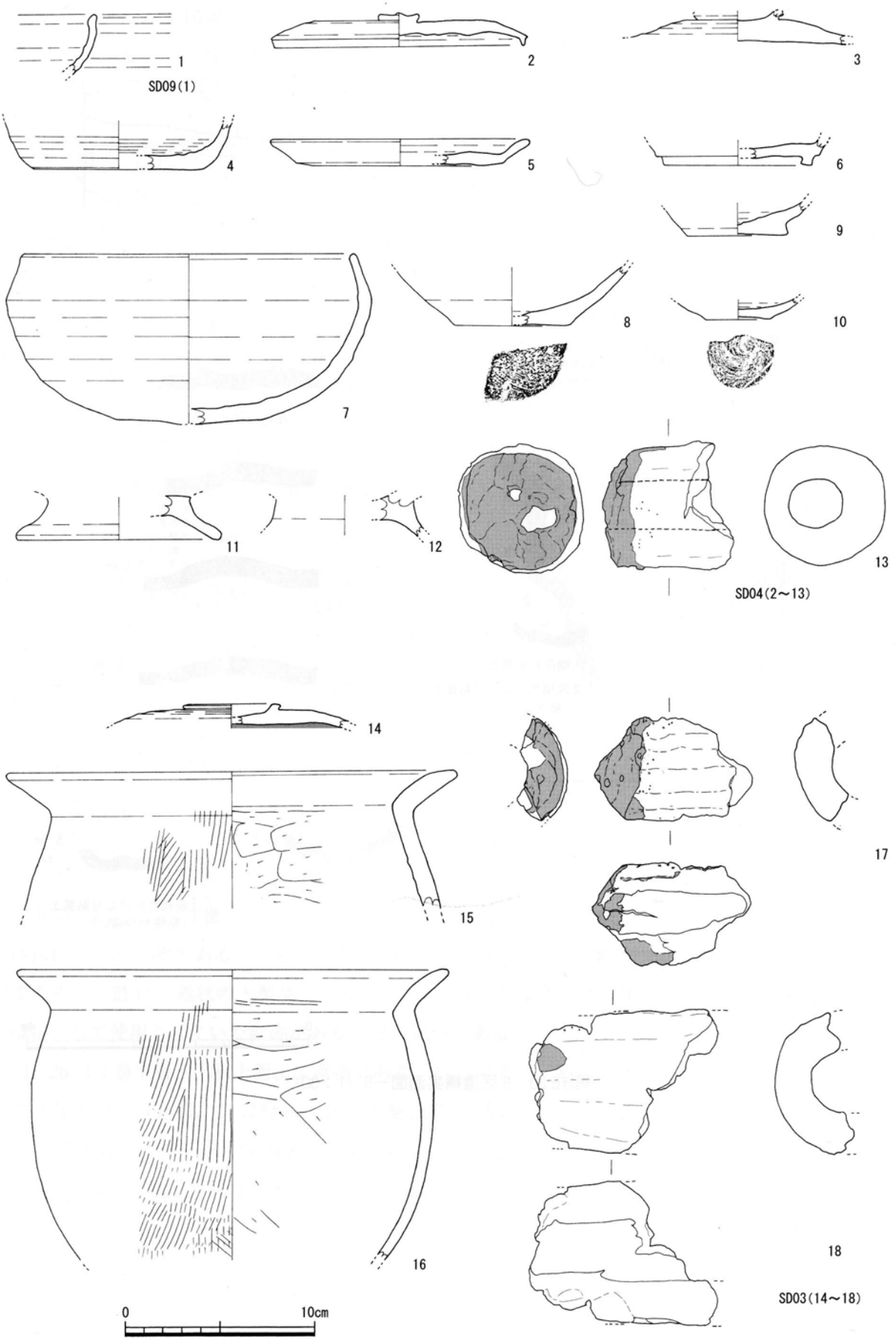
第15図　6区遺構実測図―4（1：40）

皿である。7世紀末～9世紀初頭におさまるであろう。15～20は土師器で，15～18は皿，小皿，19は高台付坏，20は甕である。全形の分かる個体が少ないが，皿，坏類についてはおおむね12～14世紀であろう。21は円錐状の土製品で，風化しているが，現状で3本の沈線がほぼ平行にめぐる。底面は接合して使用されていた痕跡がある。22は砥石である。

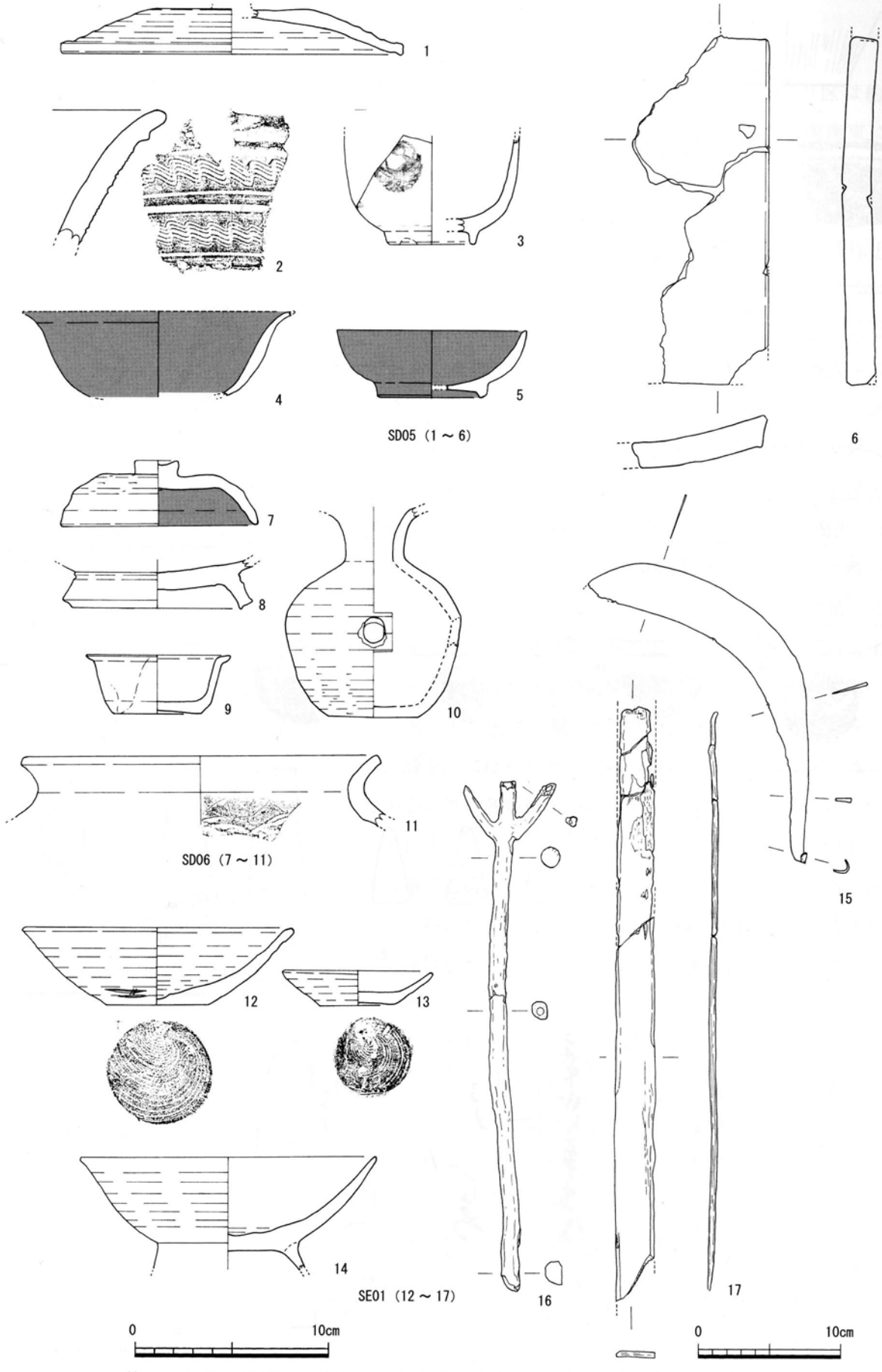
23～26は②層下層～③層上面出土遺物である。23は鉄製品，24～27は木製品である。23は刀装具の責金具等，24は匙状，25は付札，26は木簡，27は下駄である。26の表面には「□六斗貳升三合寺役」，裏面には「[　　] □左衛門」と記されている。近世神門寺の寺役に係るものであろうか。なお，②層では図示した資料のほか，中近世陶磁器，近世瓦，須恵器，土師器等の細片も出土している。



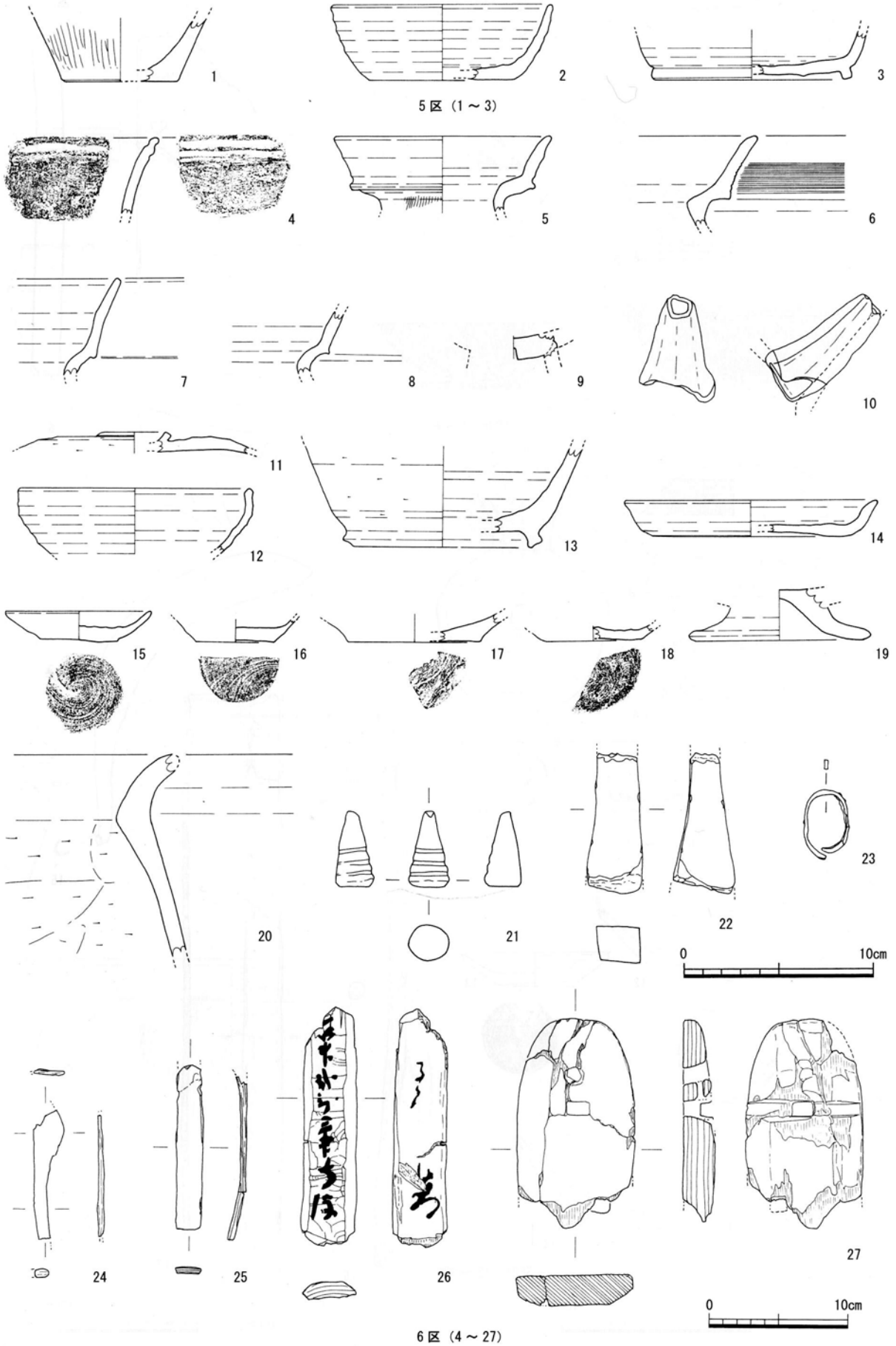
第16図　6区遺構実測図ー5（1：80）



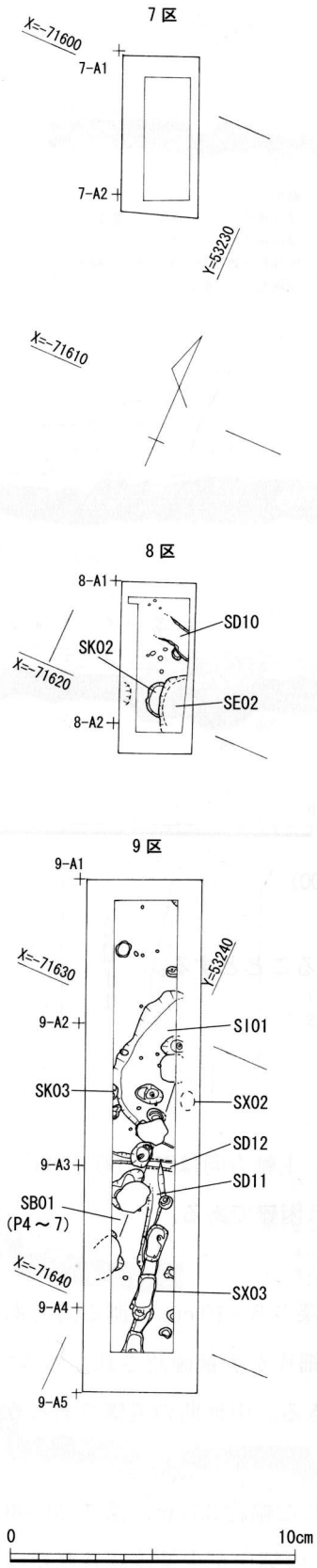
第17図　6区遺構出土遺物実測図ー1（1：3）



第18図　6区遺構出土遺物実測図―2（1～5，7～14，1：3）（6，15～17，1：4）



第19図　5・6区遺構外出土遺物実測図（1～23，1：3）（24～27，1：4）



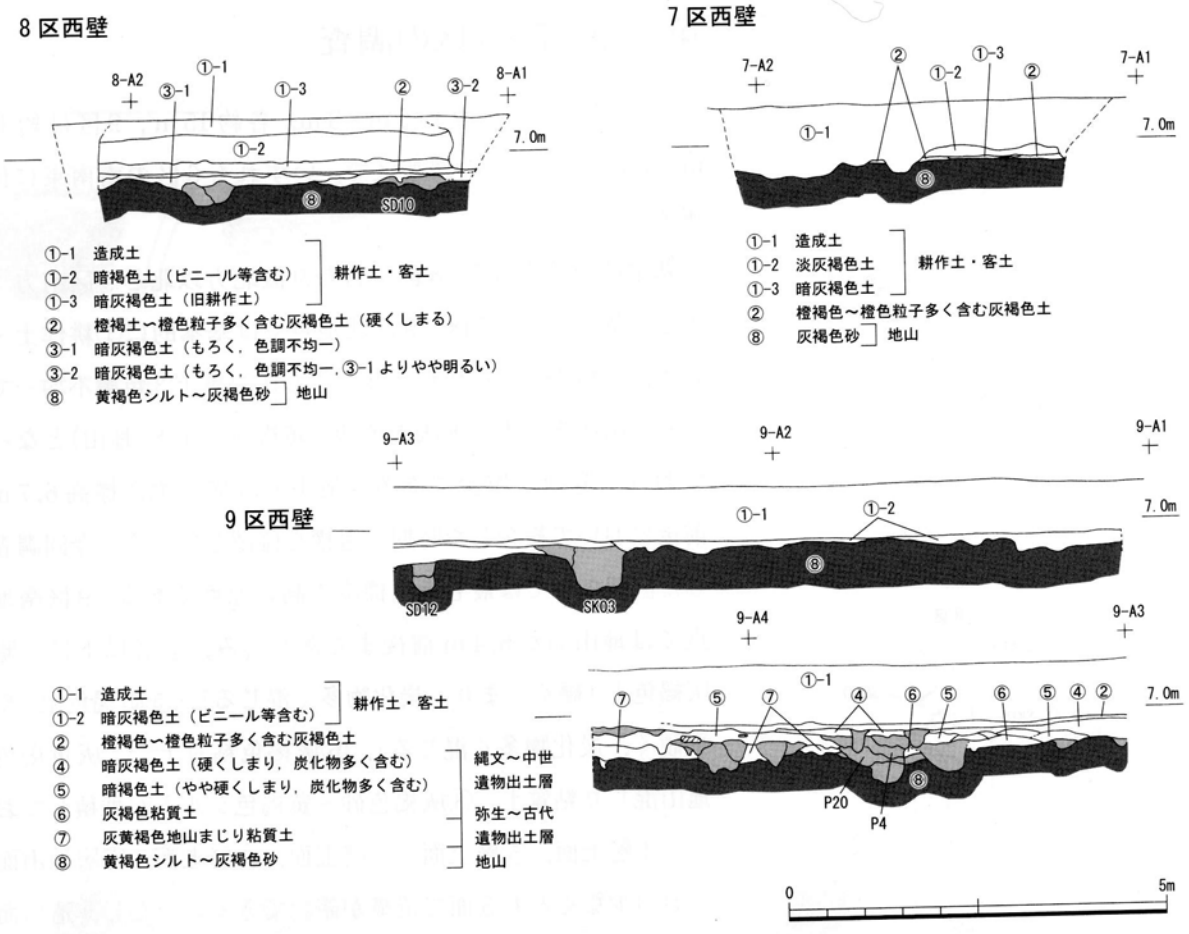
第20図　7～9区遺構配置図（1：250）

第2節　7～9区の調査

7・8区はそれぞれ約5m×3m，各約15m²，9区は約18m×4m，約70m²の調査区で，いずれも6区の南南東に位置する。

基本的な層序は7・8区を含む9区北方以北と9区南方で大きく異なるが，7区～9区北地点では基本的に①耕作土・客土，②橙褐色～橙色粒子多く含む灰褐色土③色調不均一でもろい暗灰褐色土，⑧灰褐色砂～黄褐色シルト（地山）となっており，遺物は僅少である。地山の⑧層上面，標高6.7m前後において複合した時期の遺構を確認している。今回調査した区間の中では最も地山標高の高い地点である。9区南地点では地山面が6.4m前後まで落ち込み，②層以下に④暗灰褐色土（硬くしまり，炭化物多く混じる），⑤暗褐色土（やや硬く，炭化物多く混じる），⑥灰褐色粘質土，⑦灰黄褐色地山混じり粘質土，⑧灰褐色砂～黄褐色シルトが堆積しており，④層上面，⑤層上面，⑥層上面，⑦層上面，⑧層地山面上面の少なくとも5面で遺構が確認できる。ただし，遺構面④⑤層上面と⑥⑦⑧層上面は個別の検出が困難であったため，調査時にはそれぞれ一括の検出となった。9区南地点では地山以外の各堆積土からいずれも縄文～古代の遺物が混在して出土しており，⑧層上面で検出された竪穴建物SI 01以外は遺構内出土遺物も僅少であるため時期判定は困難であるが，⑦層に中世以降の遺物が確認されないことから遺構面⑦層上面以上がおおむね中世以降，⑧層上面がそれ以前の遺構面と考えられようか。

検出された遺構は8区では溝1条（SD 10），土壙1基（SK 02），井戸1基（SE 02），ピットが確認され，9区で溝2条（SD 11・12），土壙1基（SK 03），竪穴建物1棟（SI 01），礎石建物1棟（SB 01），布掘り状遺構1基（SX 03），瓦溜り1所（SX 02），ピット（P 8～18）が確認されている。7区においては削平のため遺構は確認できていない。この内⑧層上面で確認される確実な遺構は9区の竪穴建物SI 01のみで，弥生時代終末期の遺構である。その他溝SD 12と瓦溜りSX 02が⑧層上面の遺構である可能性がある。



第21図　7～9区土層堆積状況（1：100）

なお，瓦については5・6区と同様に第4節において別に報告することとする。

1．遺　構

溝 SD 10（第22図，図版6）

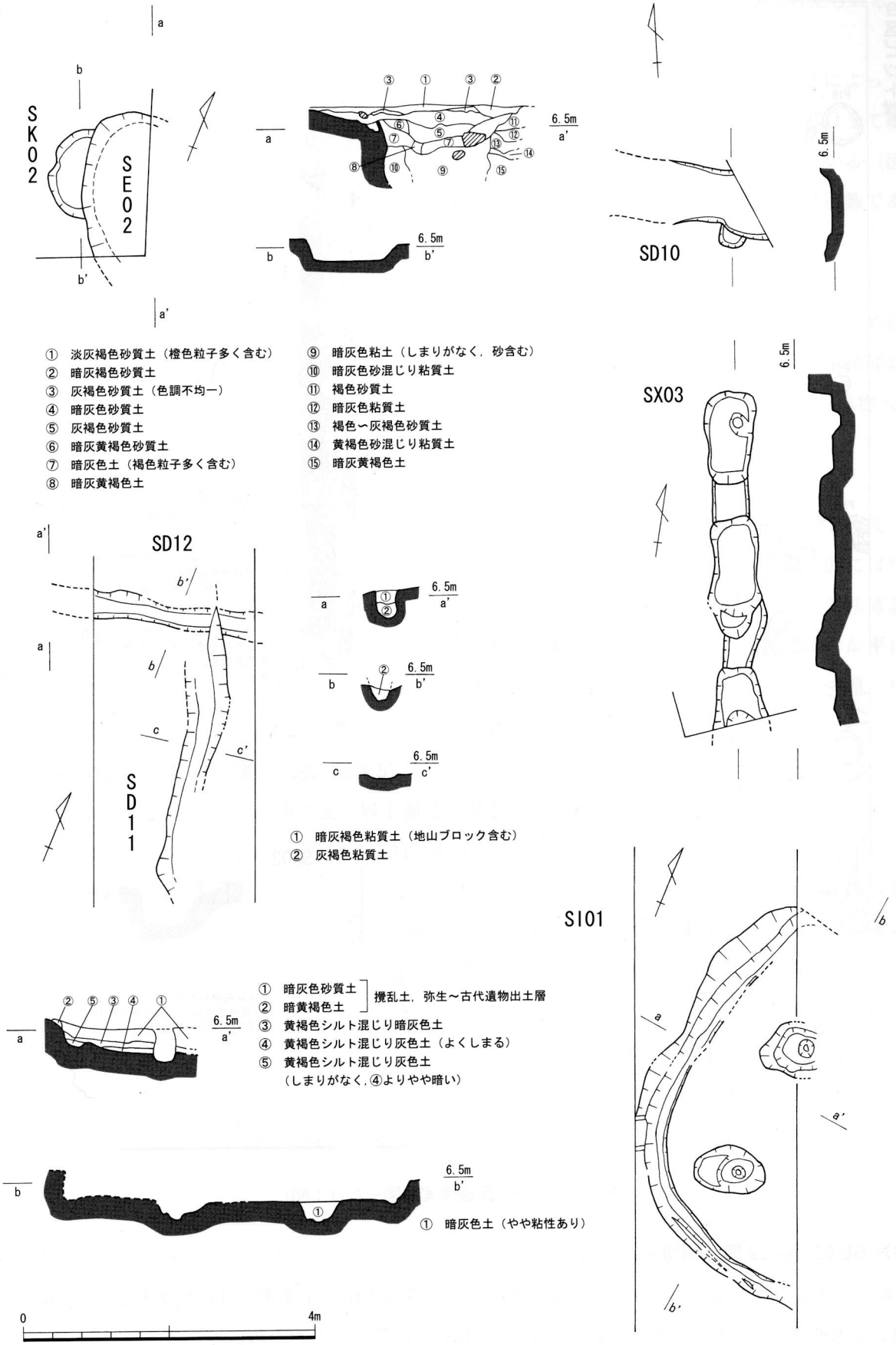
8区で検出された幅約85 cm，深さ約5 cmを測る浅い溝である。主軸方向はW－80°～85°－N。遺物は土師器細片が少量出土しているが，出土遺物からの時期判定は困難である。

溝 SD 11（第22図，図版5）

9区の南寄り，3グリッド⑦層上面で検出された幅40～60 cm，深さ5～10 cmを測る溝である。主軸方向はW－18°～22°－N。遺物は弥生土器，須恵器，土師器の細片が少量確認されたのみである。溝SD 12より新しく，布掘り状遺構SX 03より古いことが確認できる。中世期の遺構であろうか。

溝 SD 12（第22図，図版5）

9区の中ほど，2・3グリッド⑦層上面ないし⑧層上面で検出された幅約35 cm，深さ20～40 cmを測る溝である。主軸方向はN－60°～65°－E。遺物は弥生土器，瓦の細片が少量確認されたのみである。出土遺物からの時期判定は困難であるが，溝SD 11より古いことが確認できる。



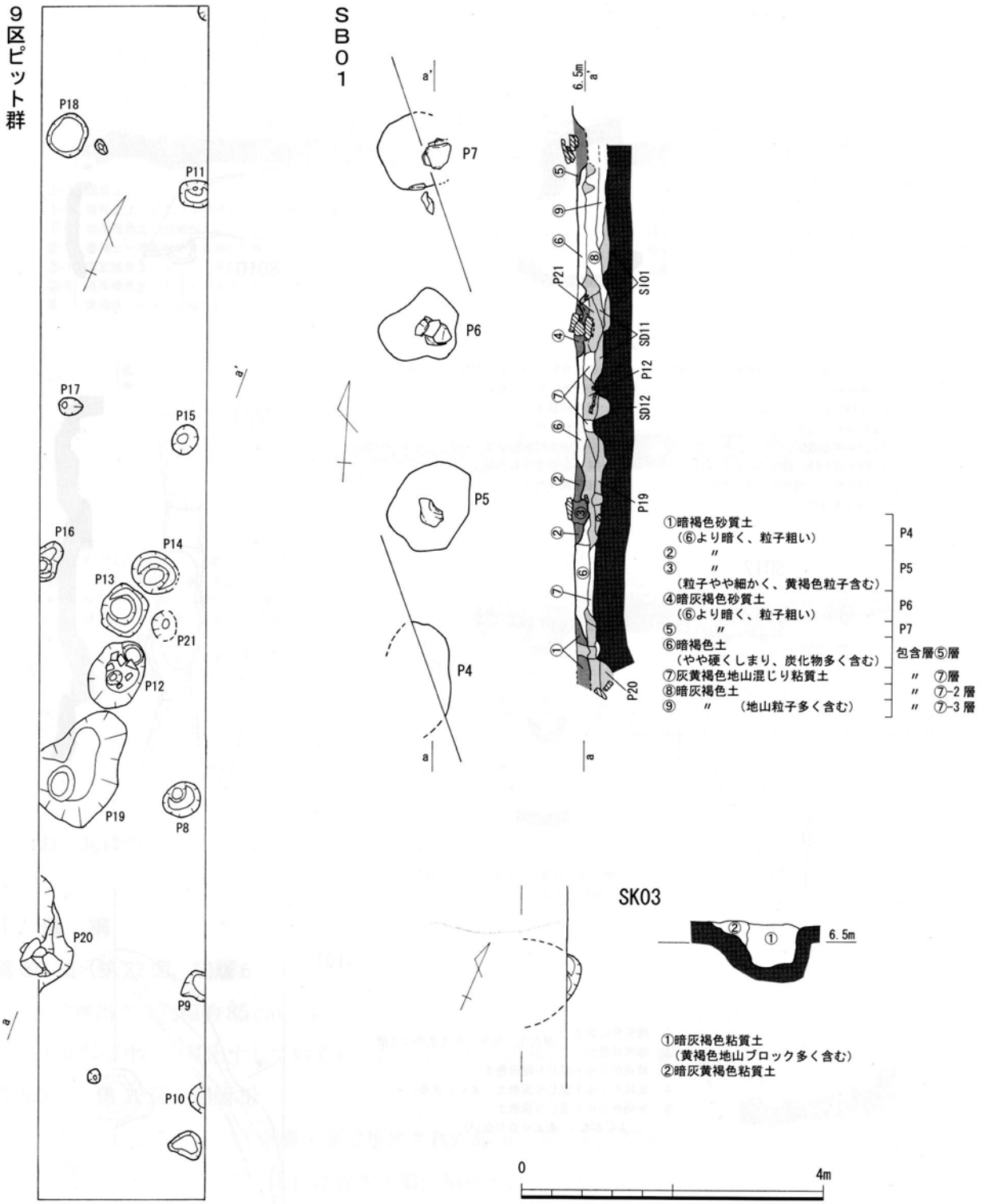
① 淡灰褐色砂質土（橙色粒子多く含む）
② 暗灰褐色砂質土
③ 灰褐色砂質土（色調不均一）
④ 暗灰色砂質土
⑤ 灰褐色砂質土
⑥ 暗灰黄褐色砂質土
⑦ 暗灰色土（褐色粒子多く含む）
⑧ 暗灰黄褐色土
⑨ 暗灰色粘土（しまりがなく，砂含む）
⑩ 暗灰色砂混じり粘質土
⑪ 褐色砂質土
⑫ 暗灰色粘質土
⑬ 褐色～灰褐色砂質土
⑭ 黄褐色砂混じり粘質土
⑮ 暗灰黄褐色土

① 暗灰褐色粘質土（地山ブロック含む）
② 灰褐色粘質土

① 暗灰色砂質土
② 暗黄褐色土
撹乱土，弥生～古代遺物出土層
③ 黄褐色シルト混じり暗灰色土
④ 黄褐色シルト混じり灰色土（よくしまる）
⑤ 黄褐色シルト混じり灰色土
（しまりがなく，④よりやや暗い）

① 暗灰色土（やや粘性あり）

第22図　8・9区遺構実測図―1（1：80）



第23図　8・9区遺構実測図―2（1：80）

井戸 SE 02（第22図，図版6）

8区で検出された長さ1.9m以上，幅0.9m以上，深さ1m以上を測る井戸である。土壙SK 02を壊して掘削されている。大量の湧き水により壁面崩落の危険が生じたため底面まで確認できていない。中層以下で20～30cm大の石が点在しているが，井戸側等に使用した痕跡は認められない。出土遺

物は瓦のほか土師器，須恵器が確認されている。土師器の特徴から，13世紀代の遺構と考えられる。

土壙 SK 02（第22図，図版6）

8区で検出された長さ1.2m，幅0.5m以上，深さ0.3mを測る土壙である。井戸SE 02によって一部壊されている。出土遺物は瓦のほか土師器，須恵器が確認されている。土師器，須恵器は全て細片であったが，底面付近で確認された瓦1点は風化しているものの大形片の状態で出土している（図53－88）。遺跡内でも出土例の少ない平瓦7類（第4節参照）であった。遺構の時期判断は困難であるが，井戸SE 02との前後関係から13世紀以前のものと考えられる。

土壙 SK 03（第23図，図版5）

9区の中ほど，2グリッド④層上面で検出された土壙である。調査区外に広がる遺構であるため詳細は不明であるが，調査区壁面で幅約1.2m，深さ約0.6mを測る。遺物は弥生土器細片が少量確認されたのみである。混入資料と考えられる。遺物からの時期判定は困難であるが，後述の礎石建物SB 01よりもさらに後出する遺構であり，近世以降のものであろう。

竪穴建物 SI 01（第22図，カラー図版3，図版5）

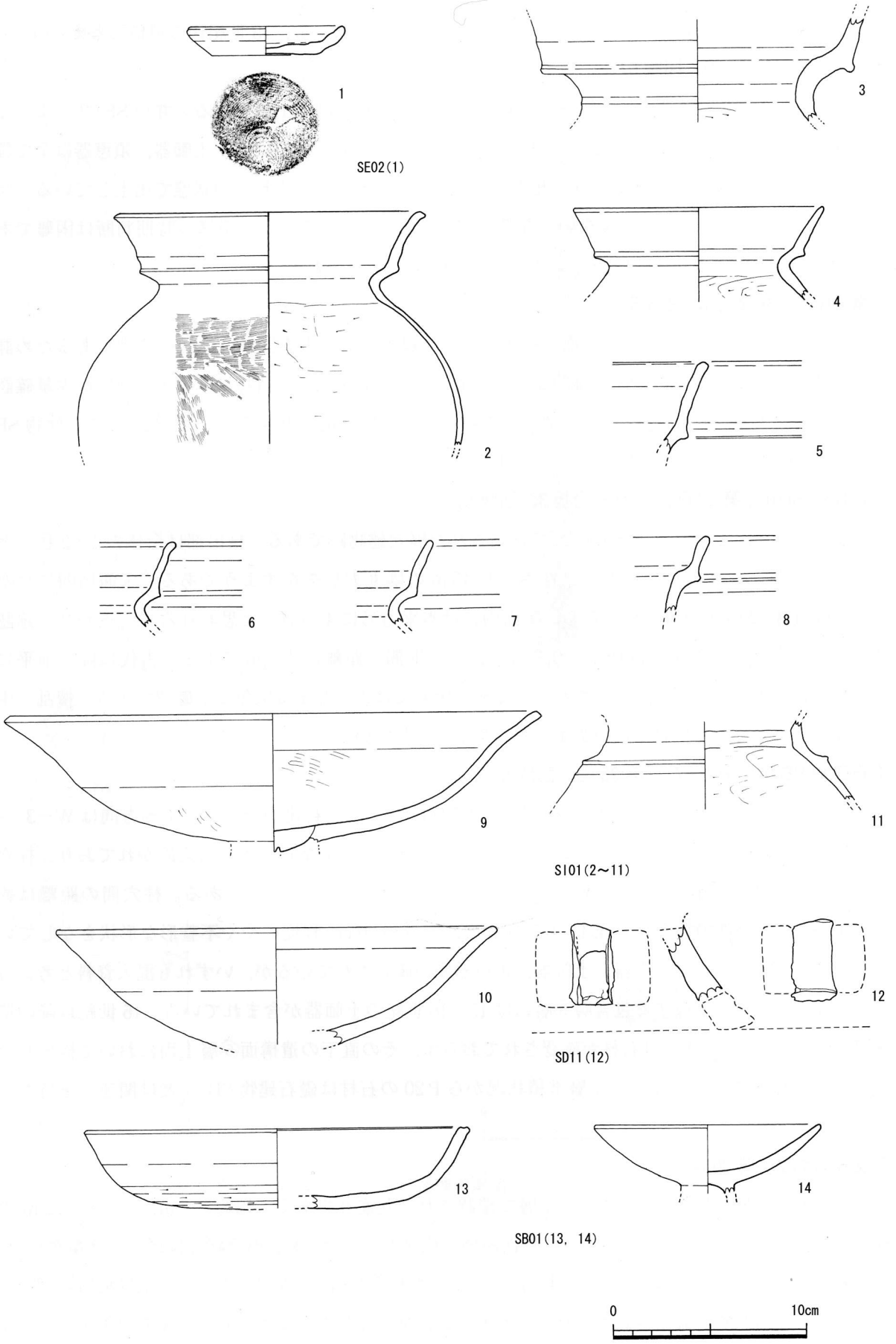
9区の北側，1～2グリッド⑧層上面で検出された竪穴建物跡である。検出部は全体の1／2程度と推察されるが，一辺4.5～5m程度，深さ約0.45mの隅丸方形をなすようである。床面周囲には幅0.2～0.3m程度の浅い溝をめぐらし，床面内には本来方形に4つ並ぶと思われるピットが2基確認されている。ピットの深さは0.25～0.3mで，ピット間の距離は約2mである。古代以降の削平によって遺構埋土①～②層まで攪乱されているが，床面にはよくしまる灰色土が確認できる。攪乱土中から瓦片のほか弥生時代終末期の弥生土器片等が出土している。

礎石建物 SB 01（P 4～7）（第23図，図版5）

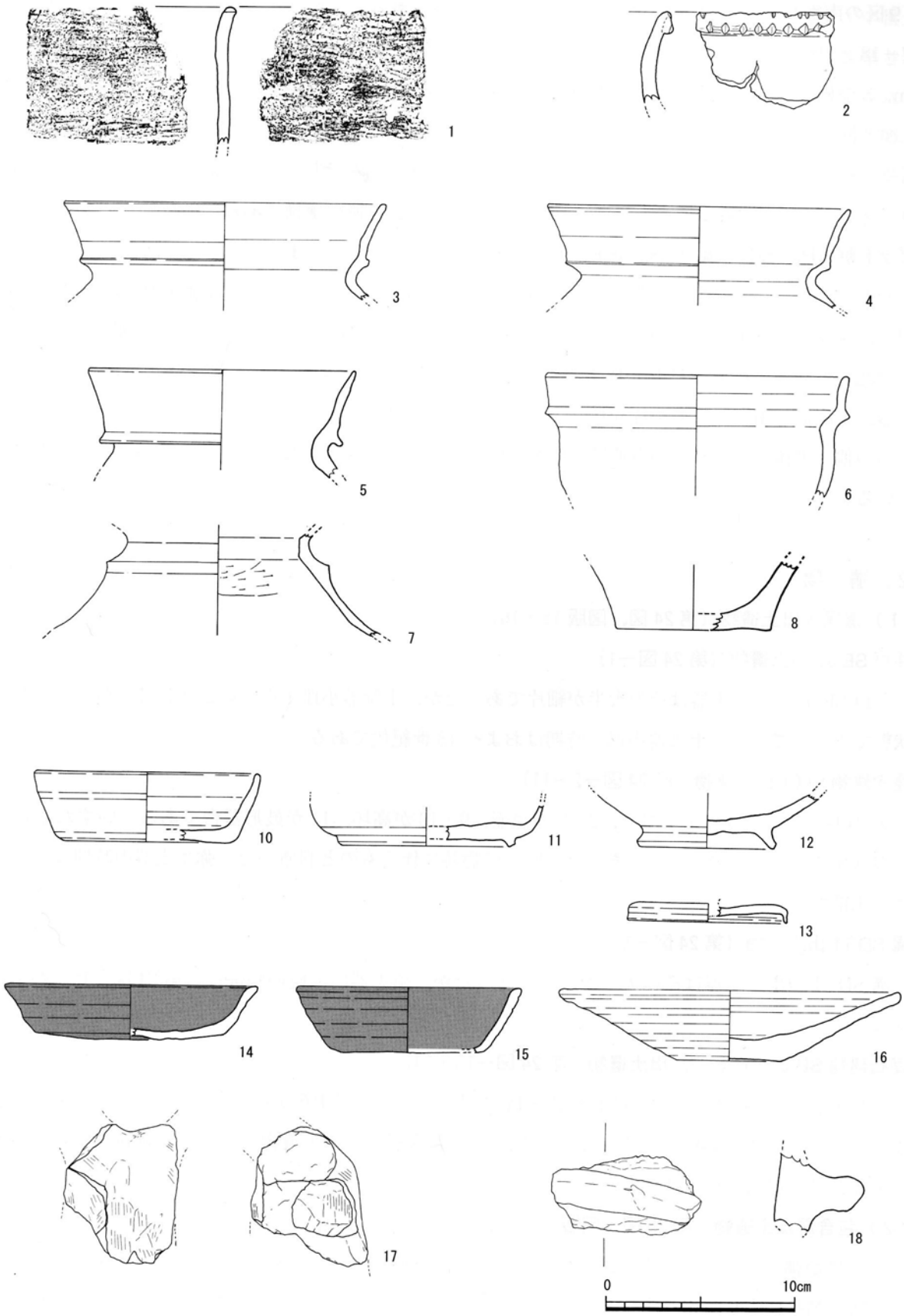
9区の中ほど，2～3グリッド遺構面⑤層上面で検出された礎石建物である。主軸方向はW－3°～4°－N。4つ並んだ柱穴の内3つはほぼ中央部に板状の礎石が重なるように据え置かれており，柱穴底面から積み上げられるものと底面から浮いた状態で配置されるものがある。柱穴間の距離は約2.4m（8尺），個々の柱穴は直径1～1.5m程度，深さ約20cm程度のやや不整形な形状をなしている。遺物は瓦片のほか弥生土器，土師器，須恵器片が確認されているが，いずれも混入資料と考えられる。遺構の基盤を形成する包含層⑤層には15～16世紀の土師器が含まれている。16世紀以降の遺構であろう。なお，P 4では石材が確認されておらず，その直下の遺構面⑥層上面において検出したP 20で石が確認されているが，土層堆積状況からP 20の石材は礎石建物SB 01とは関連性を持たないことがわかる。

瓦溜り SX 02（第20図）

9区2グリッドの東側壁面，包含層⑦層で確認された瓦溜りである。幅約0.6m，高さ約0.2mの範囲で約10.5kgの瓦が確認されたが，壁面崩壊の危険もあったため，出土状況は図化できなかった。現地の観察では土壙状の落ち込み等，特筆すべき堆積状況は確認できず，平坦な土地に集積されていたものと考えられる。確認された瓦はいずれも凸面に格子叩きを残すもので，第4節で後述する丸瓦1類，平瓦1類であった。



第24図　8・9区遺構出土遺物実測図（1：3）



第25図　9区遺構外出土遺物実測図（1：3）

布掘り状遺構 SX 03（第22図，図版5）

9区の南寄り，3～4グリッド遺構面⑥⑦層上面で検出された布掘り状の柱穴列である。主軸方向はW－18°～22°－N。柱穴間の距離は1.8 m前後，検出値で布掘り状の溝は幅40～50 cm，深さ10～15 cm，3つ確認された柱穴は長辺1.3 m前後，短辺0.7 m前後，深さ0.4 m前後を測る。遺構面⑧層上面と同レベルでの検出となったため実際には10～20 cm程度更に深い遺構であったと考えられる。遺物は弥生土器，土師器，須恵器の細片が少量確認されたのみである。出土遺物からの時期判定は困難であるが，溝SD 11より新しいことが確認できる。中世以降の遺構である。

ピット群（P 8～21）（第23図，図版5）

9区の全域にわたって確認されるピット群である。P 11，16～18については削平のため遺構面の判別が困難なピット群，P 8～10，12～15，19～21は遺構面⑥⑦層上面で検出されたピット群である。P 12では瓦片と石が，P 20では石が埋土中より確認されている。その他の出土遺物は瓦小片のほか弥生土器，土師器，須恵器等の小片が確認されたが，いずれも混入品と考えられる。第23図に図示したものの他，堆積土等の様相から遺構面④層上面以降のものと考えられる新しい小ピット群も確認されている。

2．遺　物

（1）遺構内出土遺物（第24図，図版15・16）

井戸 SE 02 出土遺物（第24図－1）

井戸SE 02の出土土器はその大半が細片であったが，土師器小皿1点（第24図－1）がほぼ完形の状態で出土している。土師器小皿の時期はおよそ13世紀代である。

竪穴建物 SI 01 出土遺物（第24図－2～11）

第24図－2～11は弥生土器で，2～8が甕壺，9・10が高坏，11が鼓形器台である。いずれも瓦片が混在する攪乱土中の出土品であるが，竪穴建物跡に伴うものと判断した。弥生土器の時期は弥生時代終末期である。

溝 SD 11 出土遺物（第24図－12）

溝SD 11の出土土器はその大半が細片であったが，須恵器円面硯の脚部片（第24図－12）が1点あった。

礎石建物 SB 01（P 4～7）出土遺物（第24図－13・14）

図化可能なものについては第24図13・14に図示した。13はP 6から出土した須恵器坏，14はP 4から出土した弥生土器低脚坏である。また，13は包含層⑤層出土遺物と接合した資料である。いずれも掘削時の混入資料と考えられる。

（2）包含層出土遺物（第25図，図版17）

瓦のほか縄文土器，弥生土器，須恵器，土師器等が確認されている。ただし，7・8区については包含層の削平により図化可能な遺物はほとんど確認されていないため，ここでは9区の包含層出土遺物のみを報告する。以下に⑤層以下の出土遺物を中心としてその概要を記す。

1・2は縄文土器深鉢で，1が篠原式中～新段階，2が滋賀里Ⅳ式併行である。3～6，8は弥生土器甕，7は弥生土器鼓形器台，10～12は須恵器坏，13は須恵器蓋，14・15は土師器坏，16が中世土師器坏，17は土製支脚，18は竈等の破片である。12の須恵器坏は転用硯で，内面に摩耗が観察される。13の須恵器蓋は小型で外面に灰釉がかかる。14・15の土師器坏は内外面に赤色塗彩が施されている。遺物の時期は，縄文土器が縄文時代晩期中葉～晩期後葉，弥生土器が弥生時代終末期，須恵器・土師器が7～8世紀，中世土師器が15～16世紀であろう。

基本的に包含層中からは中世以降の資料はわずかしか出土しておらず，その大半は弥生土器と古代の須恵器・土師器であったが，少なくとも包含層⑥層以上において中世土師器片と思われる土器細片が混在しており，包含層の大半は中世以降に堆積したものであることがうかがえる。

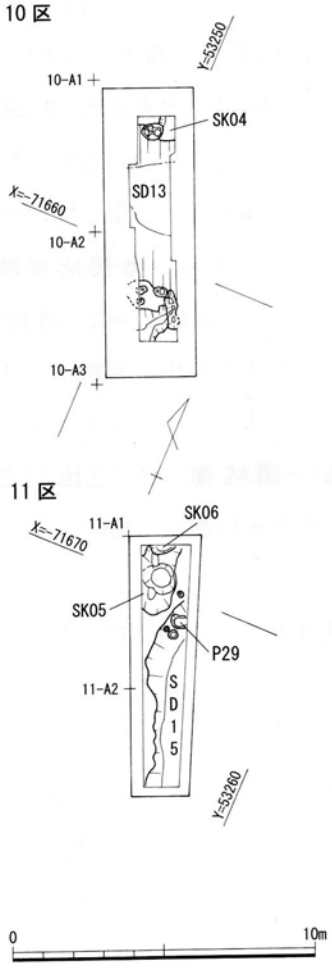
第3節　10・11区の調査

10区は約10 m×3 m，約30 m²，11区は約7.5 m×2.5 m，約20 m²の調査区で，9区の南方，今回の調査範囲の南端にあたる調査区である。

基本的な層序は10区と11区で異なる。10区では基本的に①客土，②暗褐色粘質土（やや硬くしまり，炭化物含む），③灰色粘土④灰色～緑灰色シルト質砂層（地山）となっており，溝SD 13が調査区の大半を占めている。11区では基本的に①客土等，②灰褐色粘質土（硬くしまり，炭化物・砂利を含む），③褐灰色～暗褐灰色粘質土（炭化物，砂利，褐色粒子含む）④灰色～緑灰色シルト質砂層（地山）となっており，③層内は土質，色調のやや異なる土層が細かく堆積している。包含層中からは古代～近世の遺物が混在して確認されている。

検出された遺構は10区で溝2条（SD 13・14），土壙1基（SK 04）ピット（P 22～26）が確認され，11区で溝1条（SD 15），土壙2基（SK 05・06），ピット（P 27～30）が確認されている。遺構の時期については不明のものが多いが，溝SD 13が15世紀ごろ，溝SD 15が近世以降のものと考えられる。明確な古代の遺構は確認できていない。

なお，瓦については5～9区と同様に第4節において別に報告することとする。



第26図　10・11区遺構配置図（1：250）

1．遺　構

溝SD 13（第28図，図版6）

10区の大半を占める範囲で検出された幅約5.5 m，深さ約2.5 mの溝である。遺構の肩や底面はやや不整形ではあるが，比較的整った形状を残している北側のラインでは主軸方向がN－60°～65°－Eとなる。基本的な断面形は台形であるが，南側はその一部がせり出すように段々のステップ状に形成されている。埋土⑦⑧層を中心に多くの有機物とともに石塔を含む多くの石が面的に堆積していた。埋土⑦⑧層より下層では粘土と砂が互層状に堆積している。遺物は瓦のほか石塔，須恵器，土師器，陶磁器などが確認される。埋土⑨層以下から出土した土師器の時期から，15世紀頃の遺構と考えられる。

溝SD 15（第28図，図版7）

11区の南・東壁に伸びる溝で，全形は不明であるが，検出幅1.3 m以上，0.3 m以上を測る。若干カーブしているため主軸方向はW－0°～20°－Nと幅があるが，ほぼ南北方向に軸をとる。断面形状は肩部から緩やかに傾斜して途中から鋭角に落ち込む形で，底面はレンズ状に掘り込まれている。また，南側では深さ0.15 m程度であるが，途中から北側に向けて深さ0.3 m程度まで急

激に落ち込んでいる。遺物は瓦のほか須恵器，土師器，陶磁器細片が少量確認されたのみであるが，底面付近からも近世陶磁器と思われる染付椀の細片が出土しており，近世以降の遺構と考えられる。

土壙 SK 04（第 28 図，図版 6）

溝 SD 13 の北肩に重なって検出された土壙である。遺構の 2 面が調査区壁に続いているため形状は不明であるが，検出幅で 0.8 m 以上，深さ 0.15 m を測る。遺物も出土していないため時期については不明であるが，溝 SD 13 より後出することが壁面土層から確認できる。

土壙 SK 05（第 28 図，図版 7）

11 区の北壁付近で検出された土壙である。北側は土壙 SK 06 に壊され，西側も調査区外に広がるため全形は不明であるが，幅 1.2 m 以上，長さ 2.2 m 以上，深さ 0.9 m を測る。南北にやや平坦な面を持ち，中心部は円形に落ち込む。最深部直上からは 3 個の石が検出されている。遺物は土壙 SK 06 と一括して取り上げたため，各遺構の区別は不能だが，瓦片のほか須恵器，土師器の細片が少量確認されたのみである。出土した土器細片は中世土師器と同様の胎土の資料を含んでいる。

土壙 SK 06（第 28 図，図版 7）

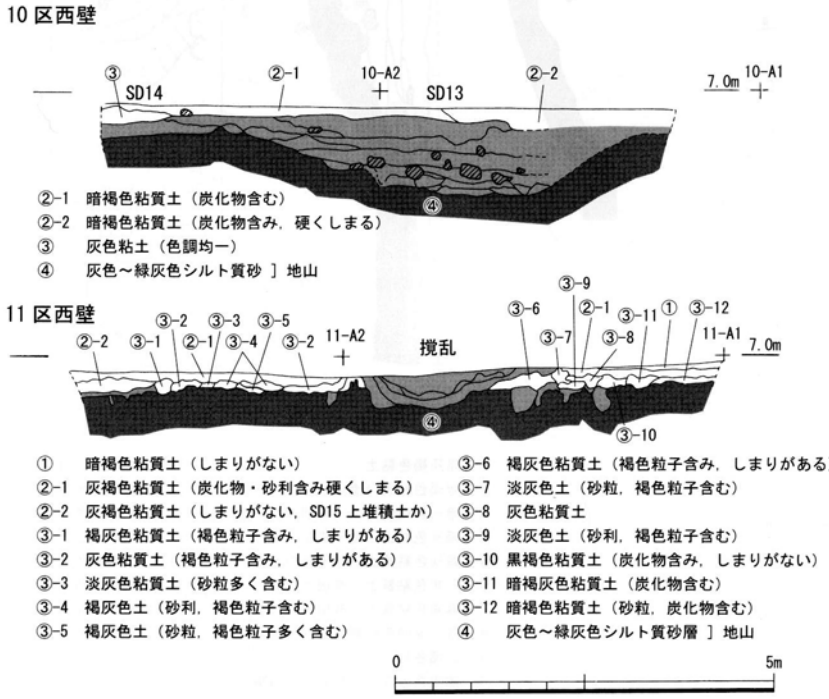
11 区北端で検出された土壙である。北側は調査区北壁へ伸びるため全形は不明であるが，幅 0.8 m 以上，深さ 0.3 m を測る。底面付近から 1 個の石が検出されている。遺物は上記土壙 SK 05 記述のとおりである。土壙 SK 05 に後出する遺構であることが確認できる。

溝 SD 14・10 区ピット群（P 22～26）（第 28 図，図版 6）

10 区において溝 SD 13，土壙 SK 04 以外に検出された遺構はいずれも不整形な形状であり，その大半が過去の自然小水路や木根の痕跡である可能性が高い。

11 区ピット群（P 27～30）（第 28 図，図版 7）

11 区において溝 SD 15 の西肩付近で確認された 4 基のピット状遺構である。最も大きい P 29 で径 0.5 m 前後，深さ 0.35 m を測り，底面付近で石，瓦が検出された。瓦片のほか遺物は確認されていない。



第 27 図　10・11 区土層堆積状況（1：100）

2．遺　物

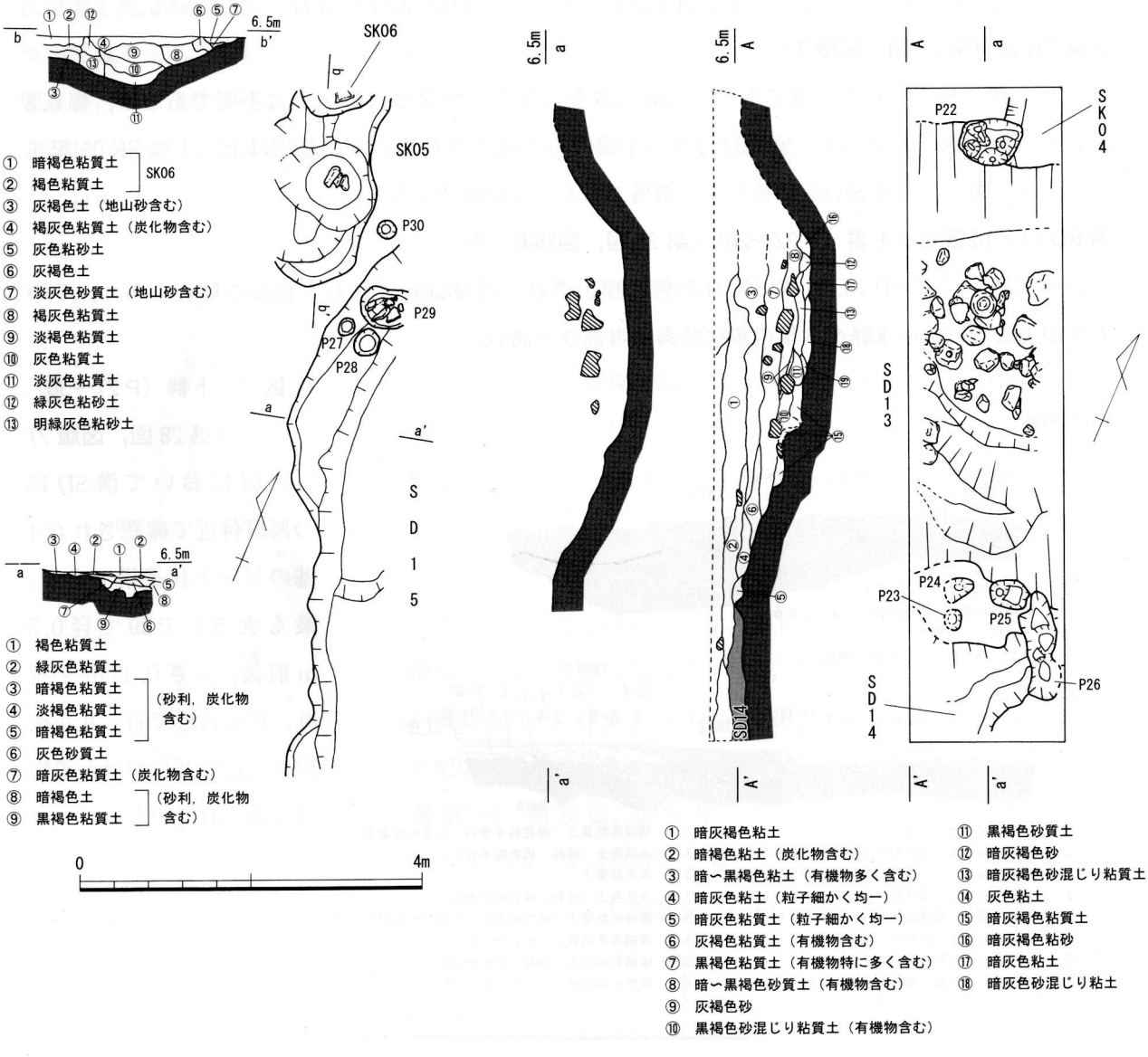
（1）遺構内出土遺物（第29図，第30図－1～10，図版15・16・18）

溝SD13出土遺物

石塔（第29図－1～5），須恵器（第30図－1），土師器（2～4），陶磁器（5～10），などが確認されている。第30図－1は須恵器坏蓋を転用硯として使用したもので，内面に摩耗が観察される。陶磁器には貿易陶磁器と思われる白磁（6），青磁（7・8），天目茶碗（5）も確認される。遺物の時期には幅があるが，埋土⑨層以下から出土した2～4の土師器は全て15世紀頃の特徴を示す。

（2）包含層出土遺物（第30図－11～17，図版17）

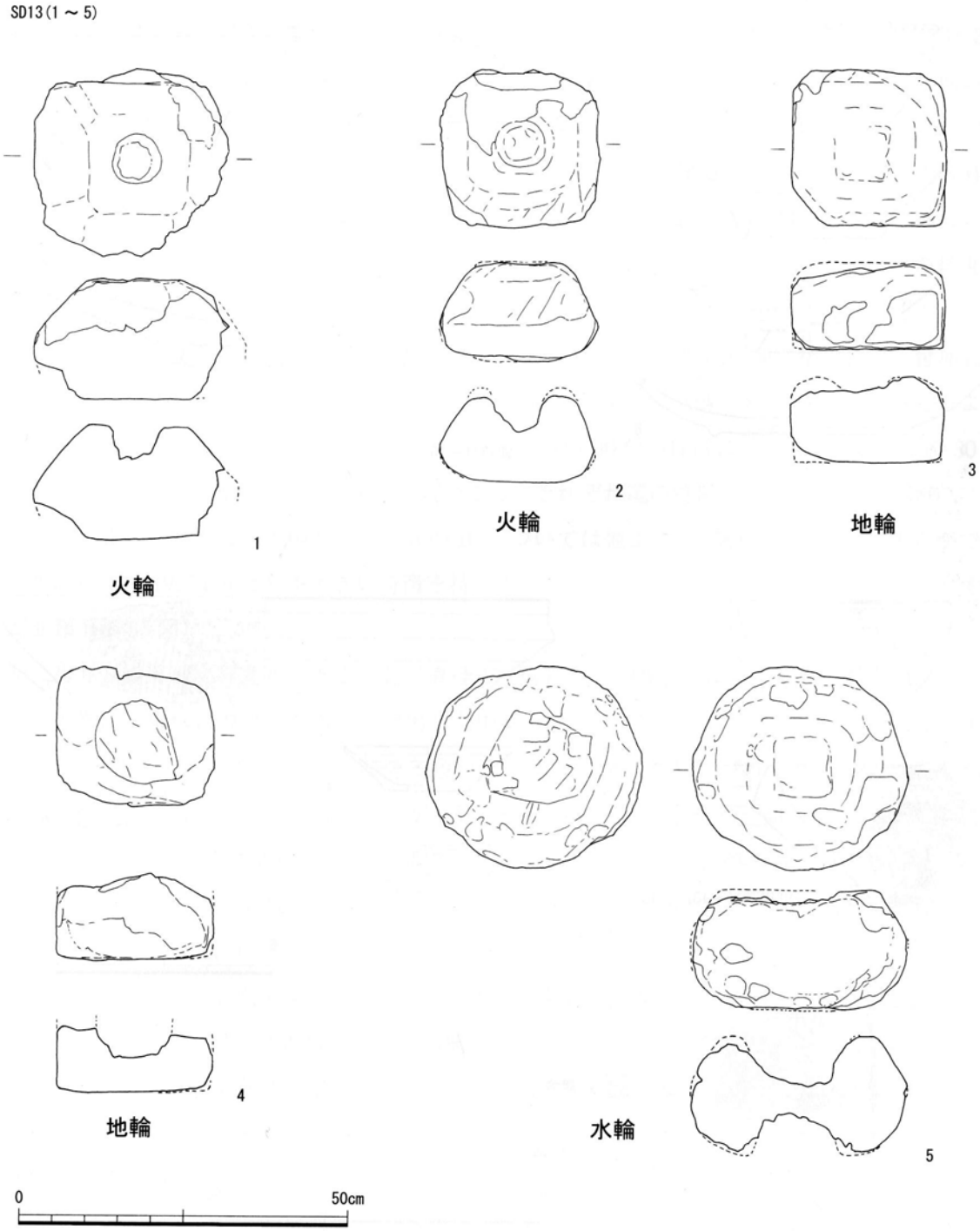
瓦のほか須恵器，土師器，陶磁器，金属器等が確認されているが，そのほとんどが細片であったため図化可能なものはわずかであった。11～13が10区包含層出土遺物，14～17が11区包含層出土遺



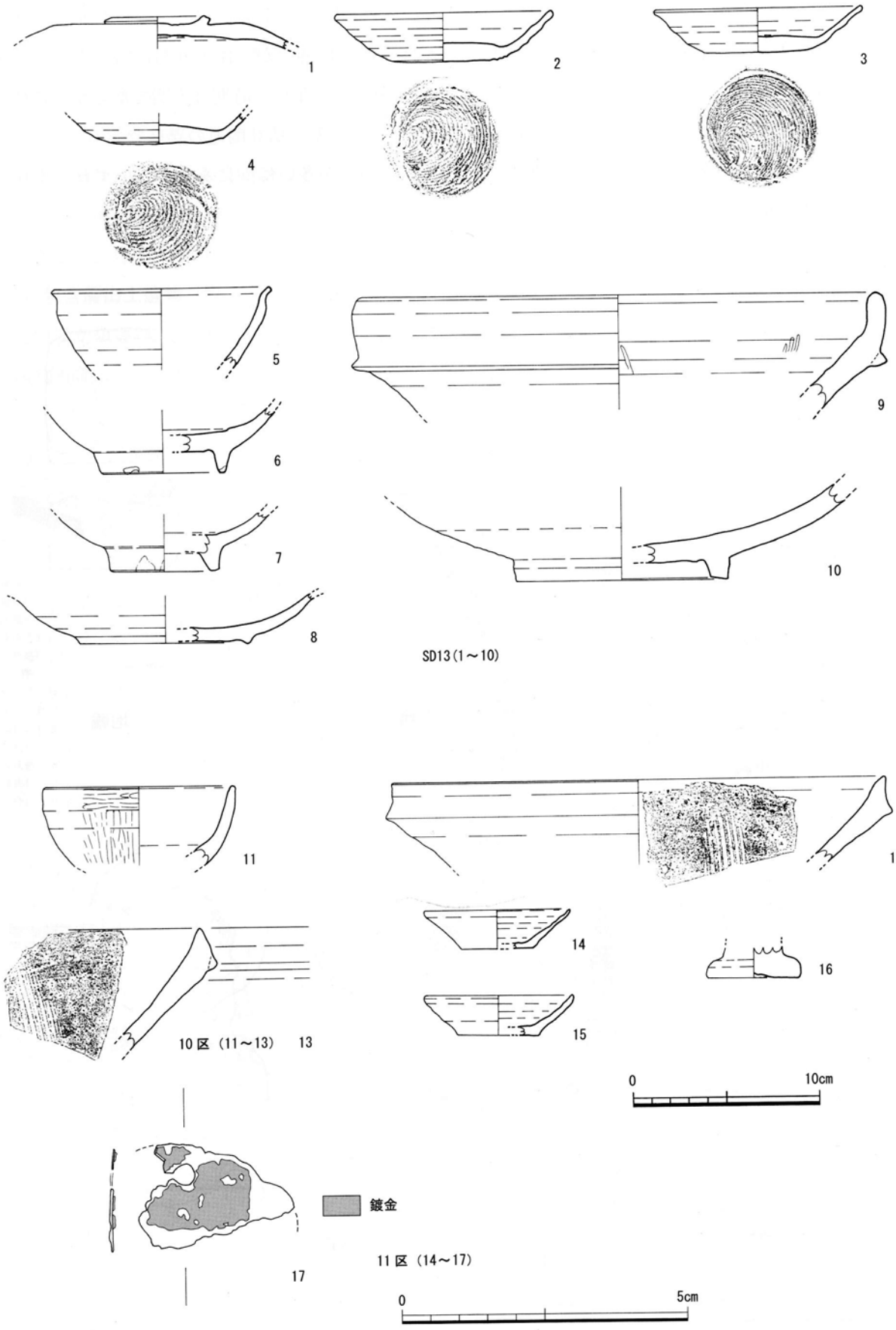
第28図　10・11区遺構実測図（1：80）

物である。12・13は備前系の擂鉢，11は瓦器椀，14・15は中世土師器皿，16は中世土師器柱状高台，17は飾り金具である。11の瓦器椀は大和型瓦器椀に似た形態だが，体部外面に密なタテミガキを，内面にヨコナデを施し，畿内にはみられない特徴を備える。産地・時期は不明であるが，模倣品であろう。17の飾り金具は金銅製で，表面に鍍金が残存している。仏具関連の瓔珞であろう。

基本的に包含層遺物は10区で陶磁器が多く，11区で土師器が多い傾向にあるが，いずれも堆積の時期を明確に示すものではない。



第29図　10区出土遺物実測図（1：10）



第30図　10・11区出土遺物実測図（1～16，1：3）（17，1：1）

第4節　出土瓦の概要

1．軒丸瓦（第31～34図，カラー図版1，図版8・9）

神門寺境内廃寺および神門寺付近遺跡より出土した軒丸瓦は，これまで3種類のものが知られていたが，今回の調査において新たに1種類が確認された。これにより複弁蓮華文軒丸瓦3種，単弁蓮華文軒丸瓦1種の計4種類となった。

軒丸瓦Ⅰ類（第31図，第32図―7～10）

Ⅰ類は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当直径18.3 cm前後，中房直径約6 cm，瓦当厚は約2～2.5 cmで2 cm程度のものが多い。下端に三角形状の突起（水切り）がある。圏線で区画された低い中房の中に1+4の大きい蓮子を配す。蓮弁は長さ2.8 cm前後と短い。子葉の周囲には凸線がめぐり，弁央の鎬線と子葉周囲の凸線は重複している。弁端が丸く，間弁は三角形状をなしている。内区外側には2重の圏線がめぐるが，外縁は平らで幅が広い。全て灰白色または赤褐色の軟質の瓦である。出土点数は16点，出土地点は15点が6区，1点が10区である。最も出土量が多く，創建期の軒丸瓦の1つと考えられる。

丸瓦との接合は，瓦当裏面上端に接合溝を入れて丸瓦を立て，丸瓦凹凸両面に接合粘土を付加している。瓦当裏面はナデ，オサエが施される。また，第31・32図中の笵傷パターン1～3に示したように，図中▲で示した特徴的な笵傷の位置がパターン1で6時30分の位置に，パターン2で0時30分の位置に，パターン3で9時30分の位置に確認され，それぞれ笵の位置が時計回りに0°，180°，90°となっていることがわかる。笵傷パターン3の10については他より笵傷が少ないことが明らかであり，瓦当直径も約19.5 cmとやや大きい特徴を持つ。

軒丸瓦Ⅱ類（第33図）

Ⅱ類は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当直径17 cm前後，中房直径約5 cm，瓦当厚は約2.3 cmである。下端に三角形状の突起がある。突出した中房の中に1+7の大きい蓮子を配し，中房周囲には珠文21個が並ぶ。蓮弁長は2.5 cm前後と短い。子葉の周囲には凸線がめぐり，弁央の鎬線と子葉周囲の凸線は重複している。弁端は中央が反転し切り込みが入る。また，間弁は頭部がY字状をなし，珠文帯付近までのびている。内区外側には2重の圏線がめぐるが，外縁は平らで幅が広い。全て硬質の瓦である。出土点数は5点，出土地点は3点が6区，1点が10区，1点が11区である。Ⅰ類に次いで出土量が多く，創建期の軒丸瓦の1つと考えられる。

丸瓦との接合は，瓦当裏面上端に接合溝を入れて丸瓦を立て，丸瓦凹凸両面に接合粘土を付加している。瓦当裏面はナデ，オサエが施され，瓦当側面下半部は削りが施される。過去の調査における出土品と合わせても笵傷の位置は一定しているが，出雲市壱丁田遺跡における同笵瓦に枷型痕跡があり，枷型成形であることがわかる。

軒丸瓦Ⅲ類（第34図―17）

Ⅲ類は単弁8葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当直径17 cm前後，瓦当厚2.5 cm前後。中房は不明。蓮弁長は2.5 cm以上，弁端は中央が反転して切り込みが入る。また，間弁は頭部がY字状をなし，中

房付近までのびている。外区内縁には珠文が，外区外縁には内向した凸鋸歯文がめぐる。外縁形状は緩い傾斜縁である。硬質の瓦である。今回の調査で出土したⅢ類は1点のみで，10区から出土している。

丸瓦との接合は，丸瓦凹凸両面に少量の粘土を付加して直接接合する。瓦当裏面はナデ，オサエが施される。

軒丸瓦Ⅳ類（第32図－11）

Ⅳ類は今回の調査で新たに確認された複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。風化著しい小片1点のみの確認であるため細部は不確実であるが，瓦当直径18.5cm前後，瓦当厚2.5cm前後。中房は不明。内区外側には2重の圏線がめぐり，外縁は幅が狭い。蓮弁長は4cm以上と長い。子葉の周囲には凸線がめぐり，弁央の鎬線と子葉周囲の凸線は重複している。弁端が丸く，間弁は三角形状をなしている。基本的にはⅠ類と類似した文様構成で，瓦当面の直径がやや大きく，蓮弁が長い特徴を持つ。灰白色の軟質の瓦である。今回の調査で出土したⅣ類は1点のみで，6区から出土している。

軒丸瓦接合部（第34図18～22）

瓦当部と丸瓦部の接合手法には，丸瓦広端面と瓦当部の接合位置に刻み目を入れるものと、丸瓦広端面を削って刻みを入れずに接合するものの2種類があることが既に指摘されているが，今回の調査における出土品においては刻み目を持つものは確認できなかった。今回の調査で出土した軒丸瓦接合部は7点で，全て6区から出土している。

19，20で丸瓦広端部凹凸面削りが，18で凹面削りが確認できる。20は硬質の瓦，その他は灰白色，赤褐色の軟質の瓦である。22には凸面に格子叩きの痕跡がわずかに残り，丸瓦部が丸瓦1類であることがわかる。

2．軒平瓦（第35・36図，カラー図版1，図版9）

軒平瓦はこれまで断片的な資料しか存在しなかったが，今回の調査において複数の資料が確認されたことにより，その様相が明らかとなった。確認された軒平瓦は全て無紋軒平瓦であった。

確認された無紋軒平瓦は，全て分割後の粘土板桶巻作り平瓦（平瓦1類）の広端部を折り曲げて叩き伸ばし，裏面に粘土を付加して三日月形の瓦当部を成形するものである。瓦当顎面に木目の痕跡が確認され，木型による成形であることがわかる。瓦当部の最大厚は7cm程度のものが多いが，5.5cm程度の厚の小さい個体（27）も存在する。また，瓦当部幅は，平瓦1類広端部幅と出土軒平瓦の形状から約30cmと推定できる。出土点数は11点，出土地点は8点が6区，3点が9区である。

23・24では平瓦広端部凸面に幅3～3.5cmの板状工具によるナデも観察できる。確認できた範囲では，平瓦は全て後述の平瓦1類，灰白色でやや軟質のものである。軒丸瓦Ⅰ類と組み合うものと考えられる。

3．丸瓦（第37～44図，図版10・11）

丸瓦には行基式丸瓦（無段式）4種，玉縁式丸瓦（有段式）1種が従来から確認されていたが，今

回の調査において行基式丸瓦の丸瓦1類(格子叩きスリケシ)において模骨痕のないものが存在すること，粘土板作りと粘土紐作りが存在することが確認された。よって，1類を1A，1B，1Cに細分する。

丸瓦1A類（第37図—28・29，第38図—32・35）

凸面に格子叩き痕を残す行基式丸瓦。凸面全体にスリケシ調整があるが，叩き痕はよく残っている。凹面には模骨痕，糸切り痕，粘土板合わせ目が残り，側板連結模骨を使った粘土板巻き付け作りであることがわかる。硬質，軟質のものが混在し，厚手のものが多い。法量は，広端復元幅約17 cmのものが確認される。全長，狭端幅のわかるものはなかった。

基本的には側辺と広端部の凹凸面角，狭端部凹面角を面取り状に削り，狭端部下面を斜めにカットするものが多い。32に粘土板合わせ目Zが残る。

丸瓦1B類（第37図—30，第38図—33・34）

凸面に格子叩き痕を残す行基式丸瓦。凸面全体にスリケシ調整があるが，叩き痕はよく残っている。凹面には模骨痕，粘土紐巻き付け痕が残り，側板連結模骨を使った粘土紐巻き付け作りであることがわかる。硬質，軟質のものが混在し，厚手のものが多い。法量は，広端幅約20 cm，狭端幅約14.5 cmのものが確認される。全長のわかるものはなかった。

基本的には側辺と広端部の凹凸面角，狭端部凹面角を面取り状に削るが，30のように削らないものもある。また，狭端部下面を斜めにカットするものが多い。

丸瓦1C類（第39・40図）

凸面に格子叩き痕を残す行基式丸瓦。凸面全体にスリケシ調整があるが，叩き痕はよく残っている。凹面は模骨の痕跡はなく，糸切り痕，布綴じ痕が残る。硬質のものが多く，厚手，薄手のものが混在する。法量は，全長約34 cm，広端幅約15 cm，狭端幅約11 cmのものと，狭端幅約14 cmのやや大型のものが確認される。

41は丁寧なスリケシによって格子叩きがわずかしか見えない。また，基本的には側辺と広端部の凹凸面角，狭端部凹面角を面取り状に削るが，38・40のように凹凸面いずれかにしか削りが施されないもの，37・38・41・42のように広狭端部の削りが施されないものもある。

丸瓦2類（第41図）

凸面にタテ縄叩き痕を残す行基式丸瓦。スリケシ調整がなく，また凸面の横断面がきれいな円形でなく多角形状となるのが特徴である。凹面には模骨痕はなく，糸切り痕，布綴じ痕が確認できる。軟質の瓦で，厚手のものが多い。法量は，狭端復元幅約12.5 cmのものが確認される。全長，広端幅のわかるものはなかった。

基本的には側辺凹面角のみを面取り状に削る。46では凹面側から切り込み（分割截線）を入れて粘土円筒を分割しており，側辺の破面調整を施さない。やや薄手の48は瓦質である。

丸瓦3類（第42図—49・50）

凸面にタテ縄叩き痕を残す行基式丸瓦。スリケシ調整がおこなわれるが，縄叩きの痕跡は残っている。凹面には模骨痕はなく，糸切り痕が確認できる。硬質，軟質のものが混在するが，薄手で硬質のものが多い。法量不明。

軟質の49では広端部凹面と側辺の凹面角を面取り状に削り，硬質の50では狭端部凹面と側辺の凹凸面角を面取り状に削る。

丸瓦4類（第42図－51，第43図）

丁寧なスリケシ調整が施される行基式丸瓦。凹面に模骨痕はなく，糸切り痕が確認できる。基本的には薄手の軟質の瓦が多いが，やや厚手のもの（54・55）や硬質のものも存在する。法量は，広端復元幅約18 cmのものが確認される。全長，狭端幅のわかるものはなかった。

51は広端部凹面と側端部の凹面角に，52は広端部凸面角に面取り状の削りがみられ，53には端部削りはみられない。やや厚手の54・55は狭端部凹面角，側辺の凹凸面角のほか，凸面の一部まで削りが上がっている。55の凹面には凸型台圧痕が残る。これら厚手の4類はやや硬質のしっかりした焼きで，他の4類とは明らかに異なる様相を示す。

丸瓦5類（第44図）

玉縁式丸瓦。丁寧なスリケシ調整が施されるが，わずかに格子叩き，縄目叩きの痕跡が観察されるものが存在する。凹面に模骨痕はなく，糸切り痕，布綴じ痕の残るものが確認できる。57・59で格子叩きの痕跡が，56でわずかに縄目叩きの痕跡が確認される。56が硬質の瓦，他は灰白色，赤褐色の軟質の瓦である。法量は，硬質の56で玉縁長約5 cm，玉縁幅約13 cm，段部での筒部幅約16.5 cmを測る。全長，広端幅のわかるものはなかった。

56では側辺凹凸面角の面取り状の削りが明瞭である。58は玉縁部分の布袋にダーツを入れる。

4．平瓦（第45～53図，図版12～14）

平瓦は，粘土板桶巻き作り4種，一枚作り3種の計7種に分類されている。今回も基本的に同様の平瓦が確認された。

平瓦1類（第45～47図）

粘土板桶巻き作り平瓦で，凸面は叩き締めの円弧を描く格子叩き痕をスリケシてあるが，叩き痕は見える。凹面には模骨の痕跡を残し，糸切り痕，粘土板合わせ目，撚紐の分割界線，布綴じ痕が確認できる。硬質，軟質のものが混在し，厚手のものが多い。法量は，広端幅約29 cmのものが確認される。63では狭端部幅約26.5 cmを測るが，焼け歪みにより正確な法量は把握できない。全長，狭端幅のわかるものはなかった。桶巻き作り平瓦では最も出土量が多い。丸瓦1類とセットであろう。

67では丁寧なスリケシによって凸面の格子叩きがわずかしか見えない。62・64・66では凹面にも補足の格子叩き痕が残る。また，比較的薄手の65では凹面側の側辺角を面取り状に削り，特に薄手の68・69では側辺角のみでなく広端部または狭端部の角も面取り状に削る。62・64・66に粘土板合わせ目Zが，67に粘土板合わせ目Sが残る。

平瓦2類（第48図）

粘土板桶巻き作り平瓦で，凸面は格子叩き痕が明瞭に残り，スリケシ調整がない。凹面には模骨の痕跡を残し，糸切り痕，撚紐の分割界線の残るものが確認できる。凹面側から切り込み（分割截線）を入れて粘土円筒を分割しており，側辺の破面調整を施さないものが多い。硬質，軟質のものが混在

するが，軟質で厚手のものが多い。法量は，狭端復元幅約12.5cmのものが確認される。全長，広端幅のわかるものはなかった。丸瓦1類とセットであろう。

平瓦3類（第49図）

粘土板桶巻き作り平瓦で，凸面を丁寧にスリケシ調整しているが，叩き締めの円弧を描く縄叩きの痕跡が観察されるものが存在する。凹面には模骨の痕跡を残し，糸切り痕，粘土板合わせ目の残るものが確認できる。硬質のものが多く，薄手，厚手のものが混在する。法量不明。

73・74では凹面側の側端部，狭端部角を細く面取り状に削る。74に粘土板合わせ目Zが残る。

平瓦4類（第50図，第51図―78・79）

粘土板桶巻き作り平瓦で，凸面にタテ方向の縄叩き痕を明瞭に残しているもの。凹面には模骨の痕跡を残し，糸切り痕，撚紐の分割界線の残るものが確認できる。軟質で厚手のものが多い。法量不明。丸瓦2類とセットであろう。

平瓦5類（第51図―80，第52図）

一枚作り平瓦で，凸面にタテ方向の縄叩き痕を残している。凹面の縁辺部を中心として，細い無文の板を用いた補足の叩き痕が明瞭で，それに対応して凸面には，凹型台の圧痕が顕著に残る。須恵質で薄手のものが多い。法量は狭端幅約23cmのものが確認される。全長，広端幅のわかるものはなかった。一枚作りの平瓦のほとんどがこのタイプである。丸瓦3類とセットであろうか。

基本的には凹面側の側辺，広端部，狭端部全ての角を面取り状に削るものが多いが，82のように側辺のみのものもある。

平瓦6類（第53図―85）

凸面にヨコ縄叩き痕を残す一枚作り平瓦。凹面に糸切り痕が残る。法量不明。出土量はわずか。

平瓦7類（第53図―86～88）

凸面に粗い格子叩き目を残す一枚作り平瓦。正格子叩きのもの（86・87）と斜格子叩きのもの（88）がある。法量不明。出土量はわずか。

5．その他の瓦（第54図，図版14）

その他の瓦には，従来から鬼面文鬼瓦，熨斗瓦（平瓦5・6類），磚が確認されていたが，今回の調査では隅切瓦（平瓦4類），熨斗瓦（平瓦1・4類），ヘラ描き瓦などがあった。

89は平瓦4類の隅切瓦である。その他，前章で報告した高西遺跡（1区）の調査においても平瓦1類の隅切瓦が出土しており（第9図―10），神門寺付近遺跡関連の資料と見られる。

90～92は切り熨斗瓦である。90・91は短辺6～7.5cm程度と幅が非常に狭いもので，いずれもわずかに凸面に格子叩きの痕跡が見え，平瓦1類を裁断したものである。凹面には粗いナデが施されている。90は長辺側面1面と短辺側面に分割時の糸切り痕を残し，91は長辺1面にのみ分割時の糸切り痕が残っている。92は短辺幅約13cmの熨斗瓦で，平瓦4類を半裁したものである。

94は風化により判然としないが，凸面に蓮花のようなヘラ描き状の痕跡が見える。軟質でわずかに縄目状の痕跡が残っており，平瓦4類と思われる。

表１　出土瓦重量集計表

（単位：kg）

総量

	丸瓦	平瓦	軒丸瓦	軒平瓦	不明	計	kg/m²
5区	0.35	1.05	0.00	0.00	0.08	2.35	0.107
6区	117.00	184.70	5.65	2.85	83.05	393.25	2.809
7区	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.000
8区	0.10	3.35	0.00	0.00	0.30	3.75	0.375
9区	15.80	32.70	0.40	0.45	5.05	54.40	1.046
10区	5.45	13.05	0.45	0.00	8.90	27.85	2.321
11区	3.30	10.20	0.20	0.00	7.65	21.35	1.525
計	142.00	245.05	6.85	3.30	105.75	502.95	1.942

軒丸瓦

	軒丸Ⅰ類	軒丸Ⅱ類	軒丸Ⅲ類	軒丸Ⅳ類	軒丸不明	計	kg/m²
5区	0.00	0.00	0.00	0.00	0.15	0.15	0.007
6区	3.05	0.85	0.00	0.15	1.75	5.65	0.040
7区	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.000
8区	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.000
9区	0.00	0.00	0.00	0.00	0.40	0.40	0.008
10区	0.10	0.20	0.15	0.00	0.00	0.45	0.038
11区	0.00	0.20	0.00	0.00	0.00	0.20	0.014
計	3.15	1.25	0.15	0.15	2.15	6.85	0.026

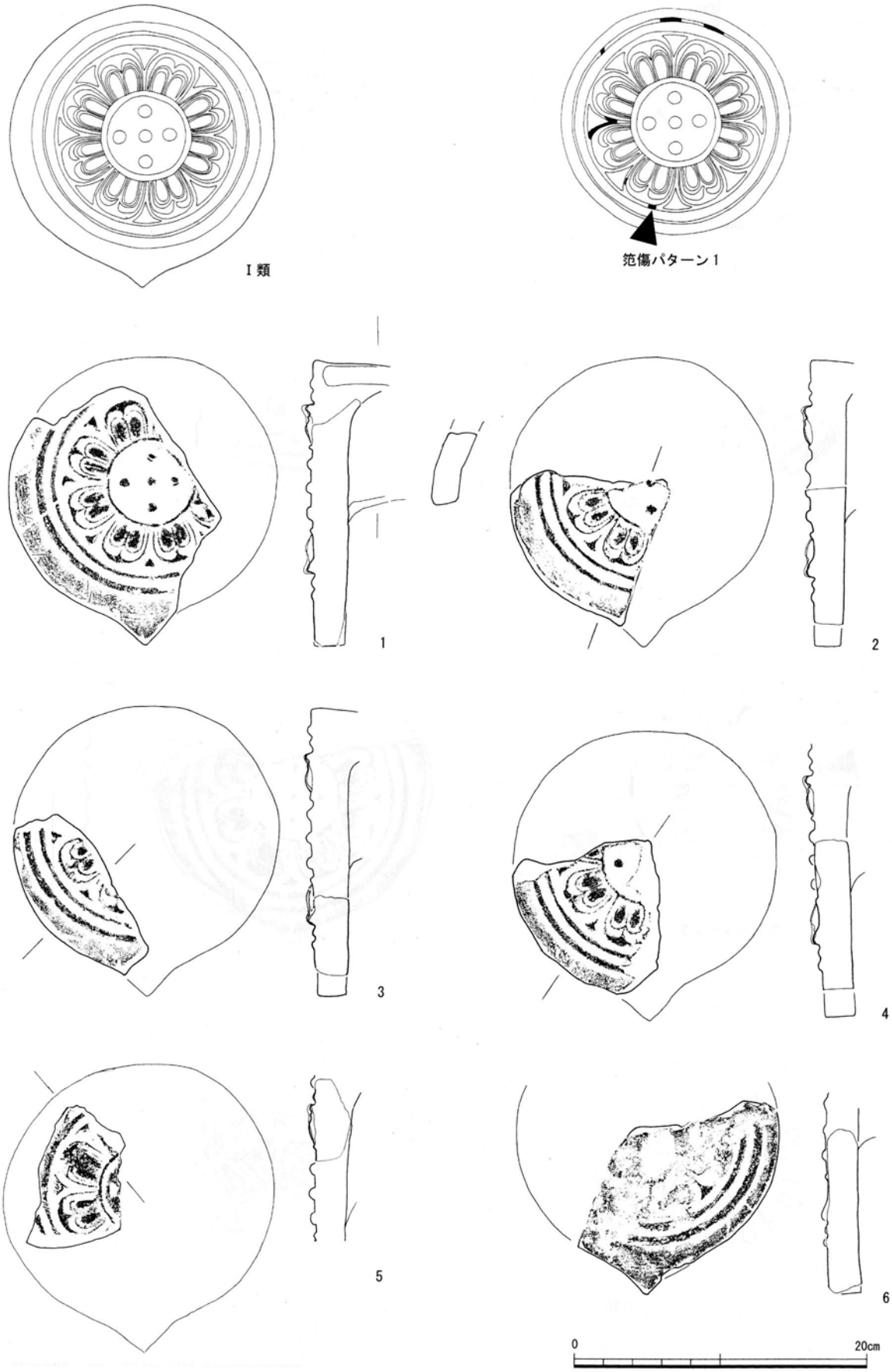
丸瓦

	丸１類	丸２類	丸３類	丸４類	丸５類	計	kg/m²
5区	0.30	0.05	0.00	0.00	0.00	0.35	0.016
6区	49.35	29.10	7.90	24.70	5.95	117.00	0.836
7区	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.000
8区	0.00	0.00	0.00	0.10	0.00	0.10	0.010
9区	9.95	2.80	1.55	1.50	0.00	15.80	0.304
10区	2.40	1.50	0.40	1.10	0.05	5.45	0.454
11区	1.90	0.40	0.20	0.70	0.10	3.30	0.236
計	63.90	33.85	10.05	28.10	6.10	142.00	0.548

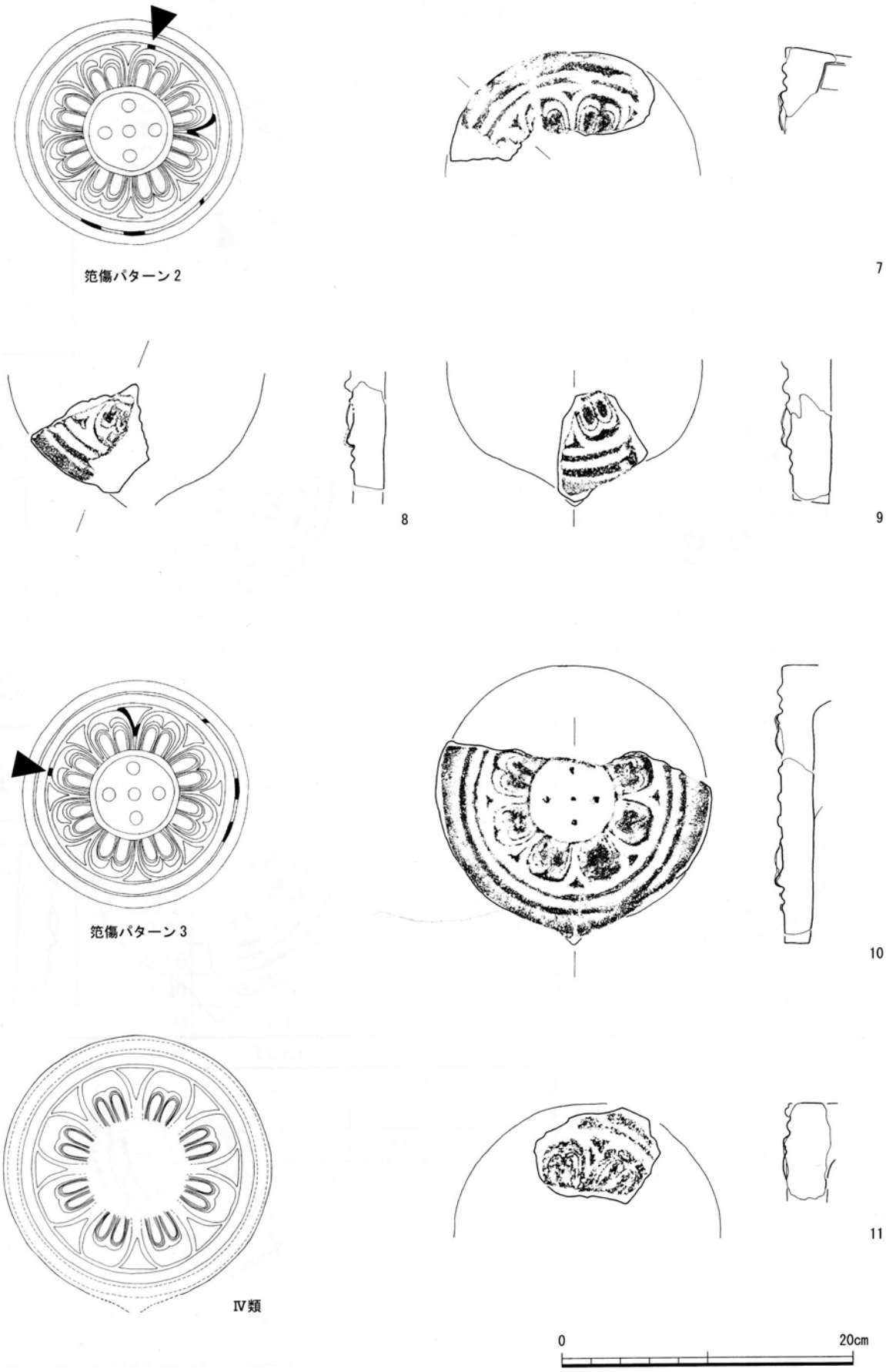
平瓦

	平１類	平２類	平３類	平４類	平５類	平６類	平７類	計	kg/m²
5区	0.35	0.00	0.00	0.35	0.35	0.00	0.00	1.05	0.048
6区	65.70	12.60	17.00	63.60	23.85	1.30	0.65	184.70	1.319
7区	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.000
8区	1.00	0.00	0.00	0.95	0.00	0.00	1.40	3.35	0.335
9区	16.70	1.70	1.35	10.05	1.80	0.40	0.70	32.70	0.629
10区	4.80	0.00	1.15	3.70	2.85	0.40	0.15	13.05	1.088
11区	1.50	0.15	0.00	2.25	5.80	0.20	0.30	10.20	0.729
計	90.05	14.45	19.50	80.90	34.65	2.30	3.20	245.05	0.946

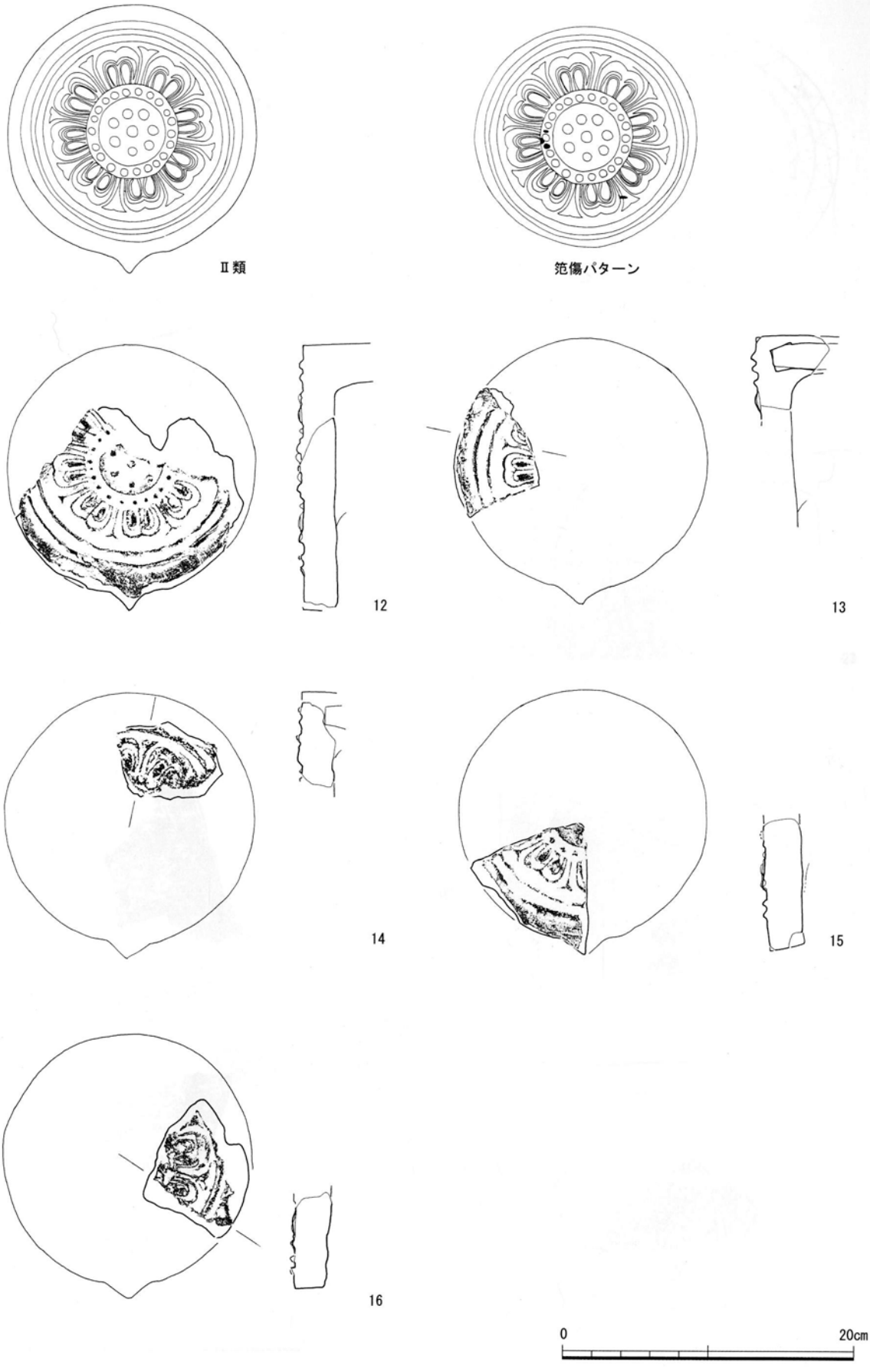
※面積は表土掘削後の調査面で換算



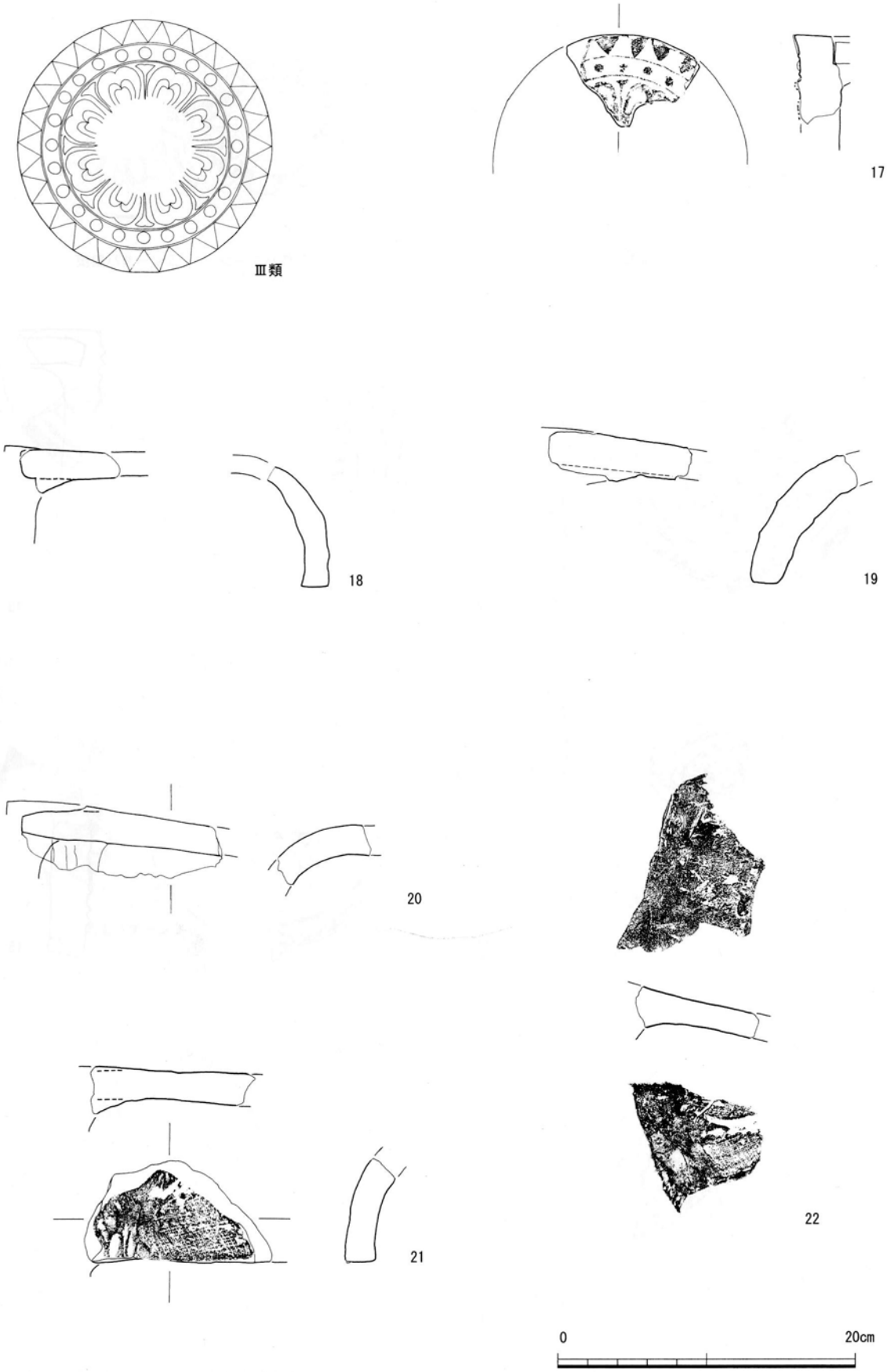
第31図　軒丸瓦（Ⅰ類）実測図（1：4）



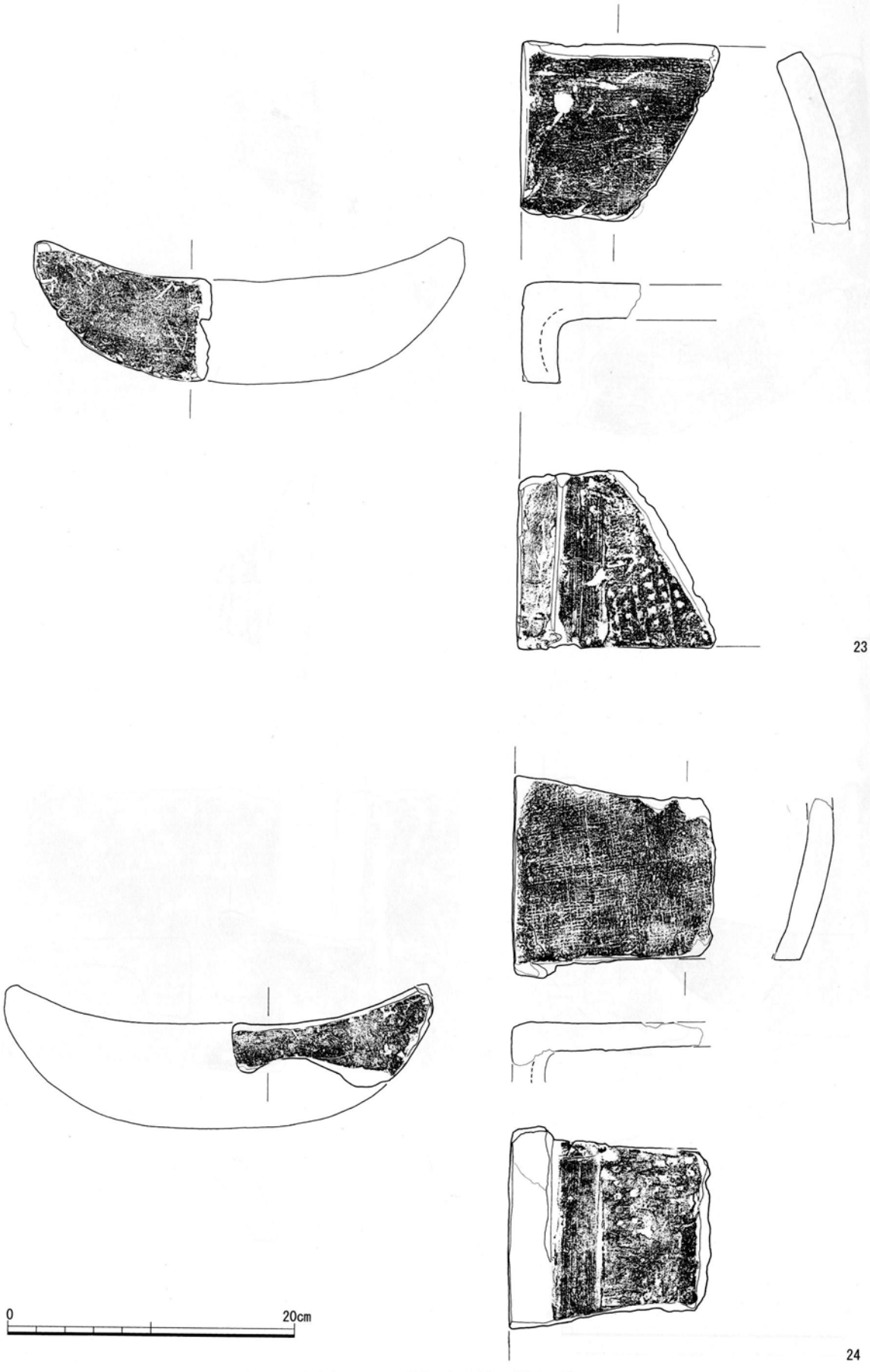
第32図　軒丸瓦（Ⅰ・Ⅳ類）実測図（1：4）



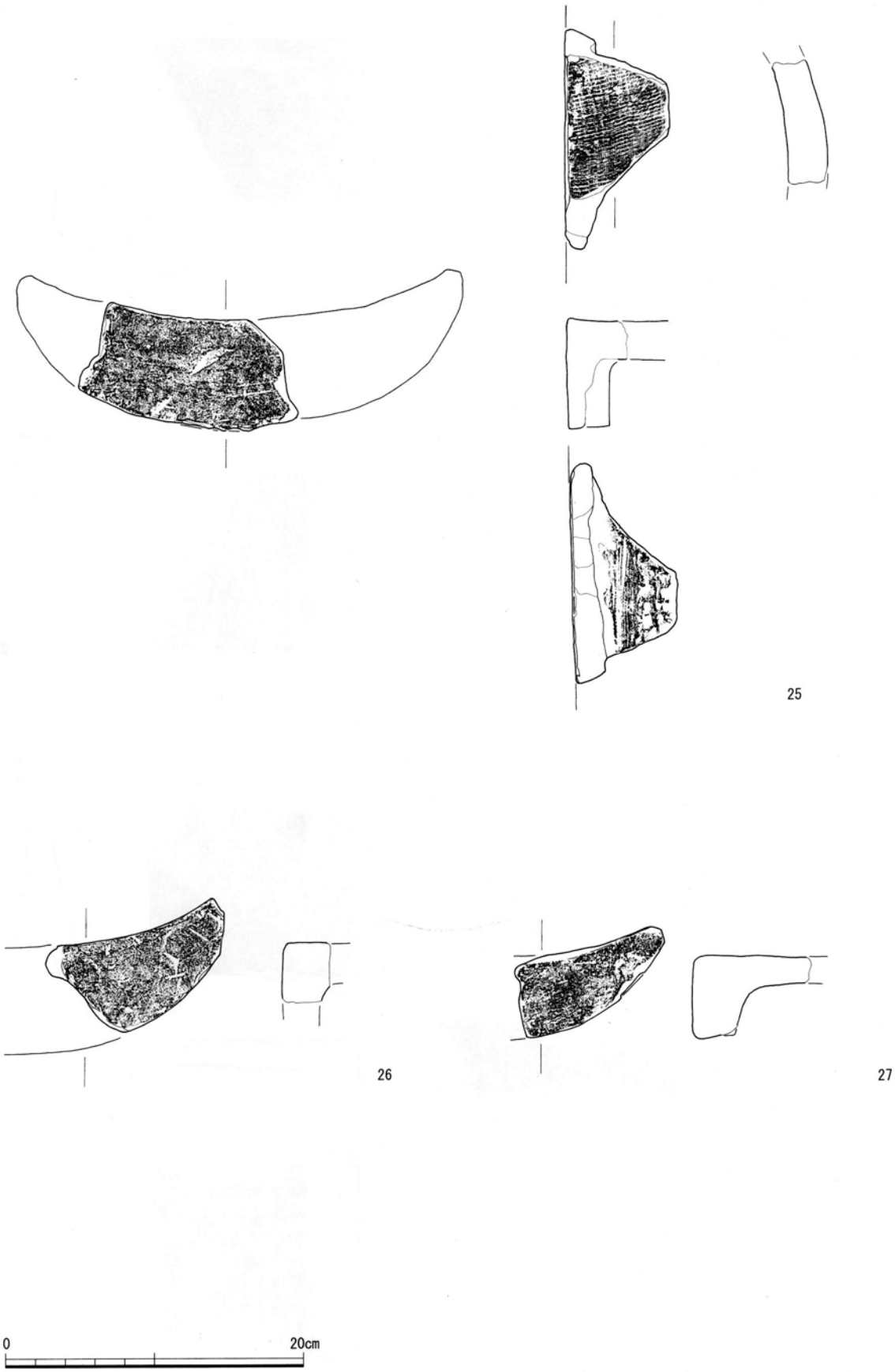
第33図　軒丸瓦（Ⅱ類）実測図（1：4）



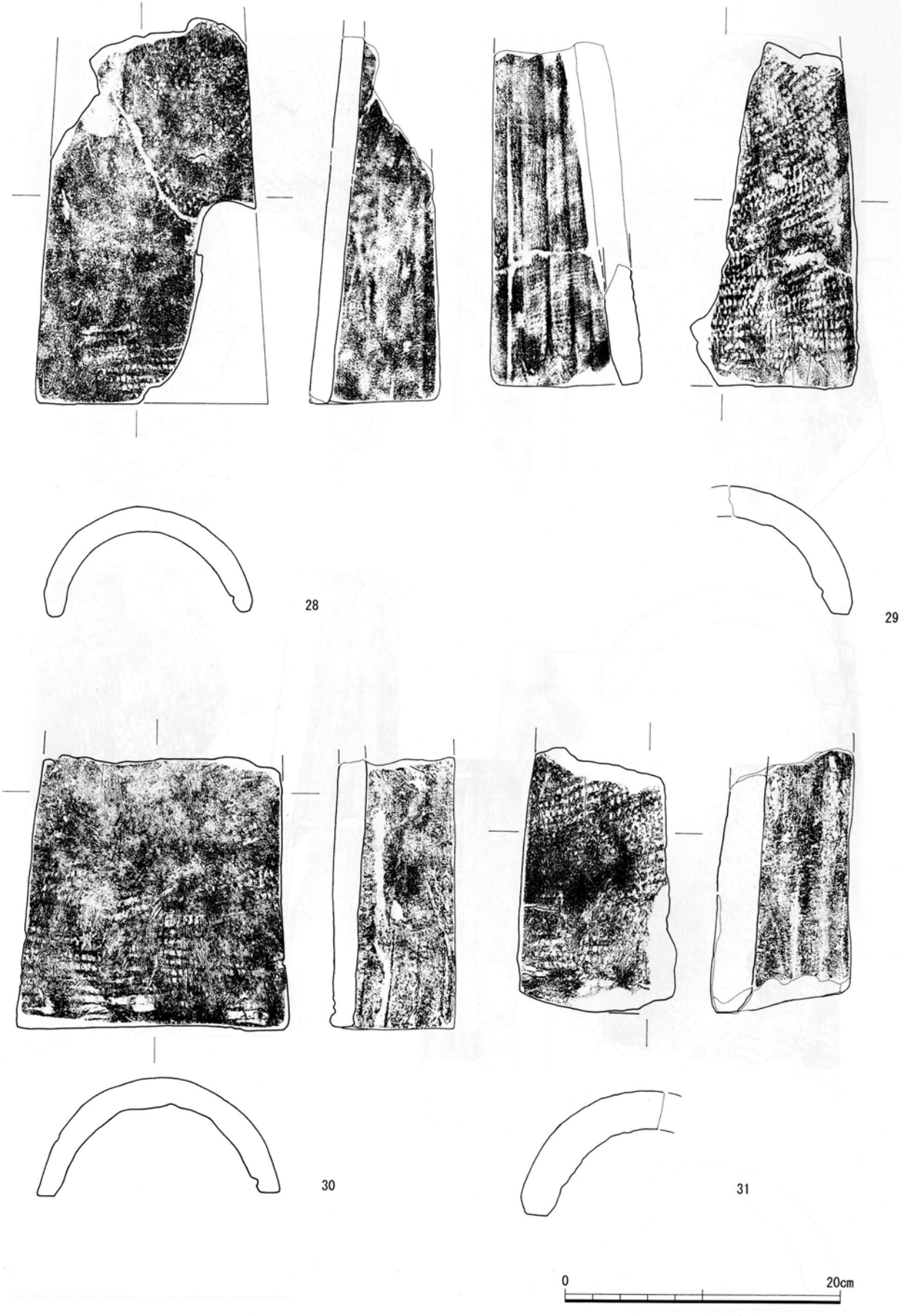
第34図　軒丸瓦（Ⅲ類，接合部）実測図（1：4）



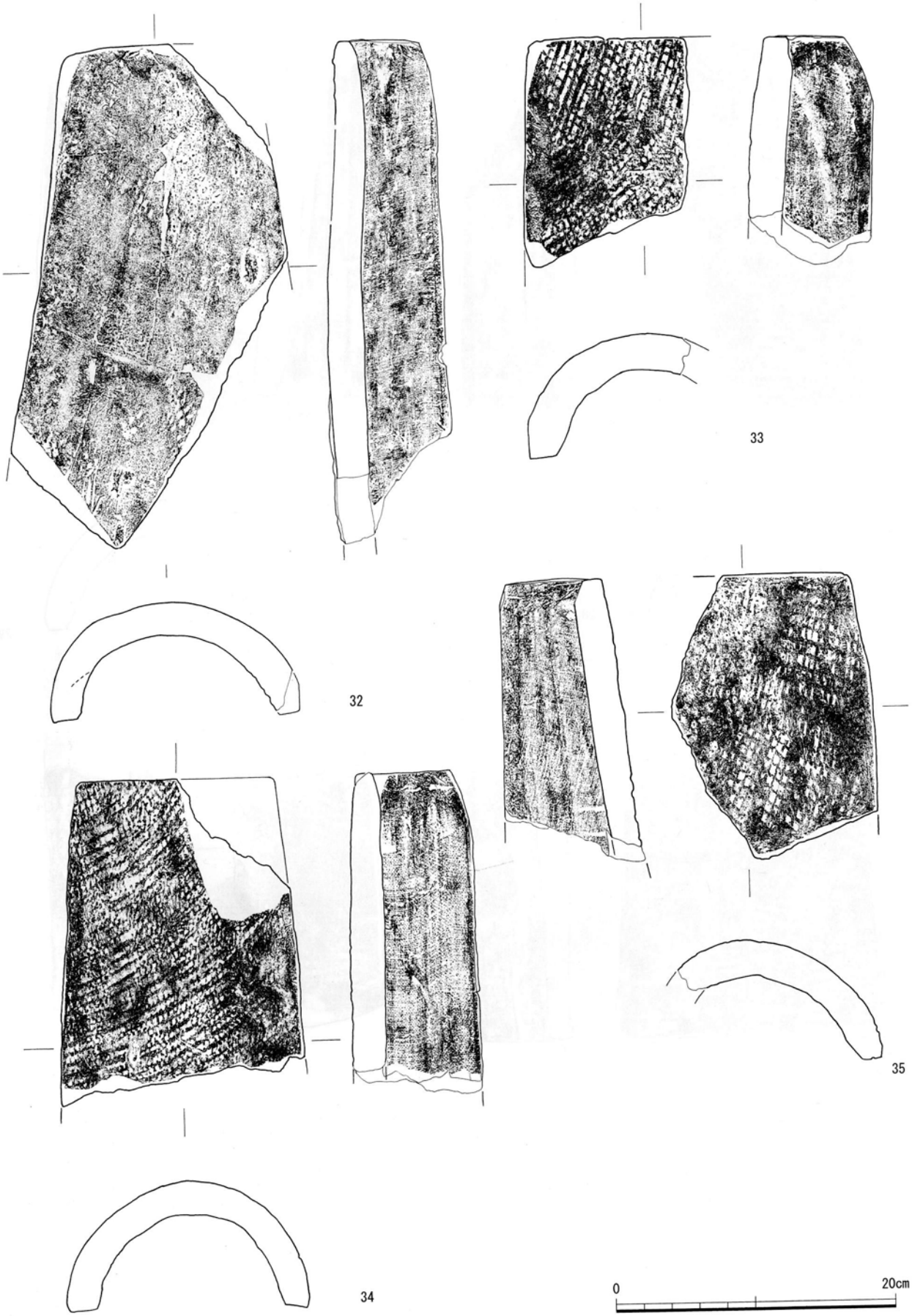
第 35 図　軒平瓦実測図―1（1：4）



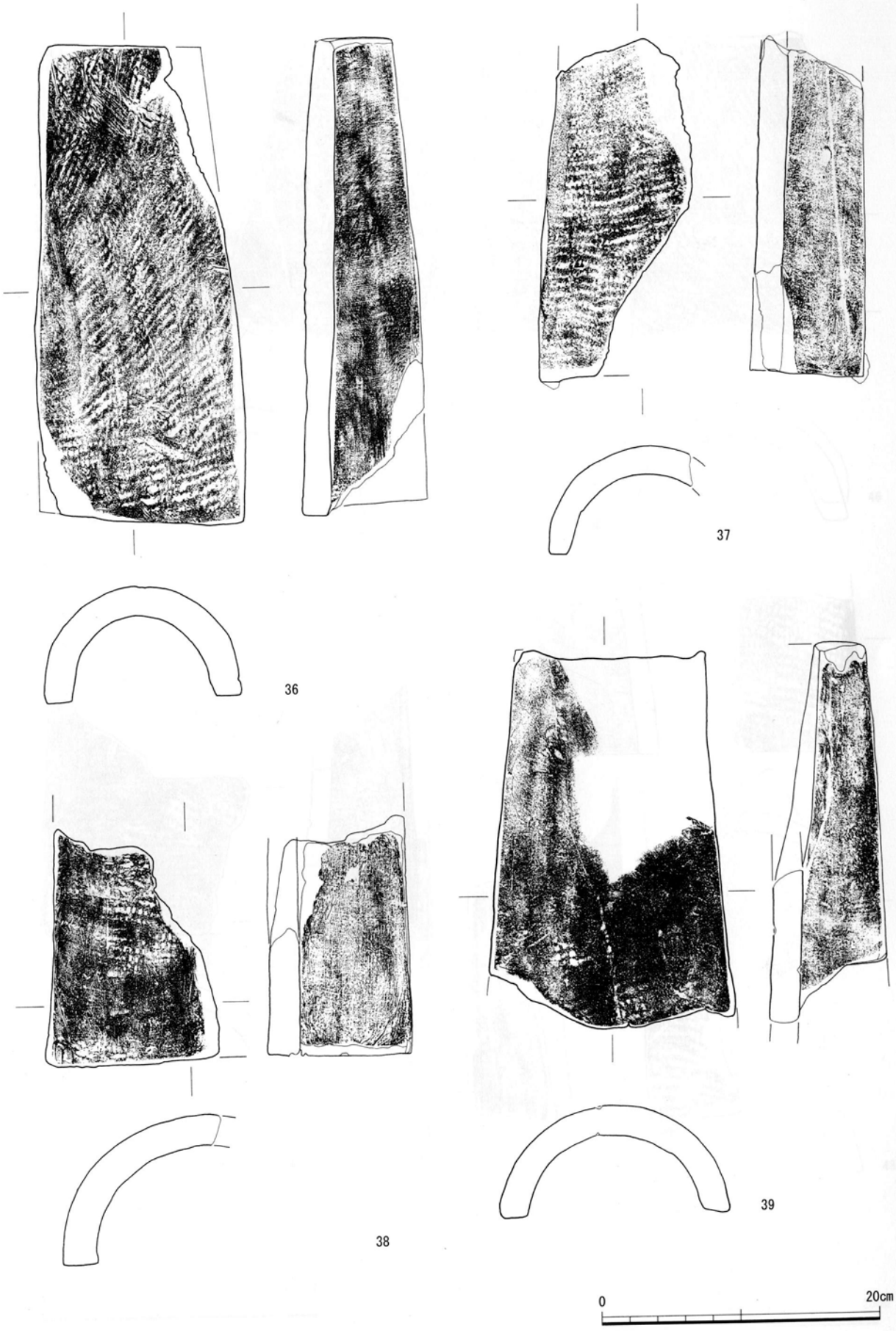
第36図　軒平瓦実測図―2（1：4）



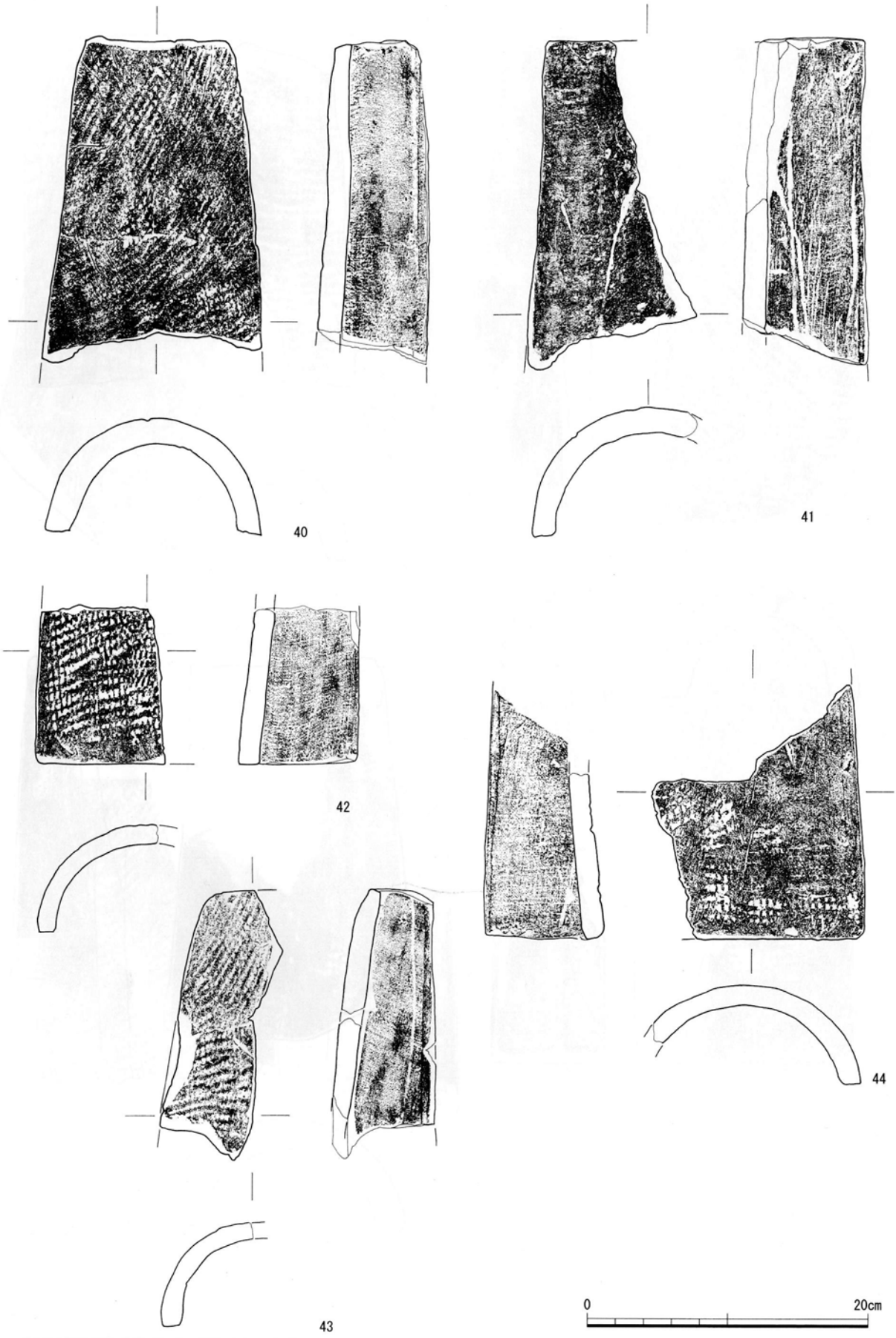
第37図　丸瓦（1Ａ・1Ｂ類）実測図ー1（1：4）



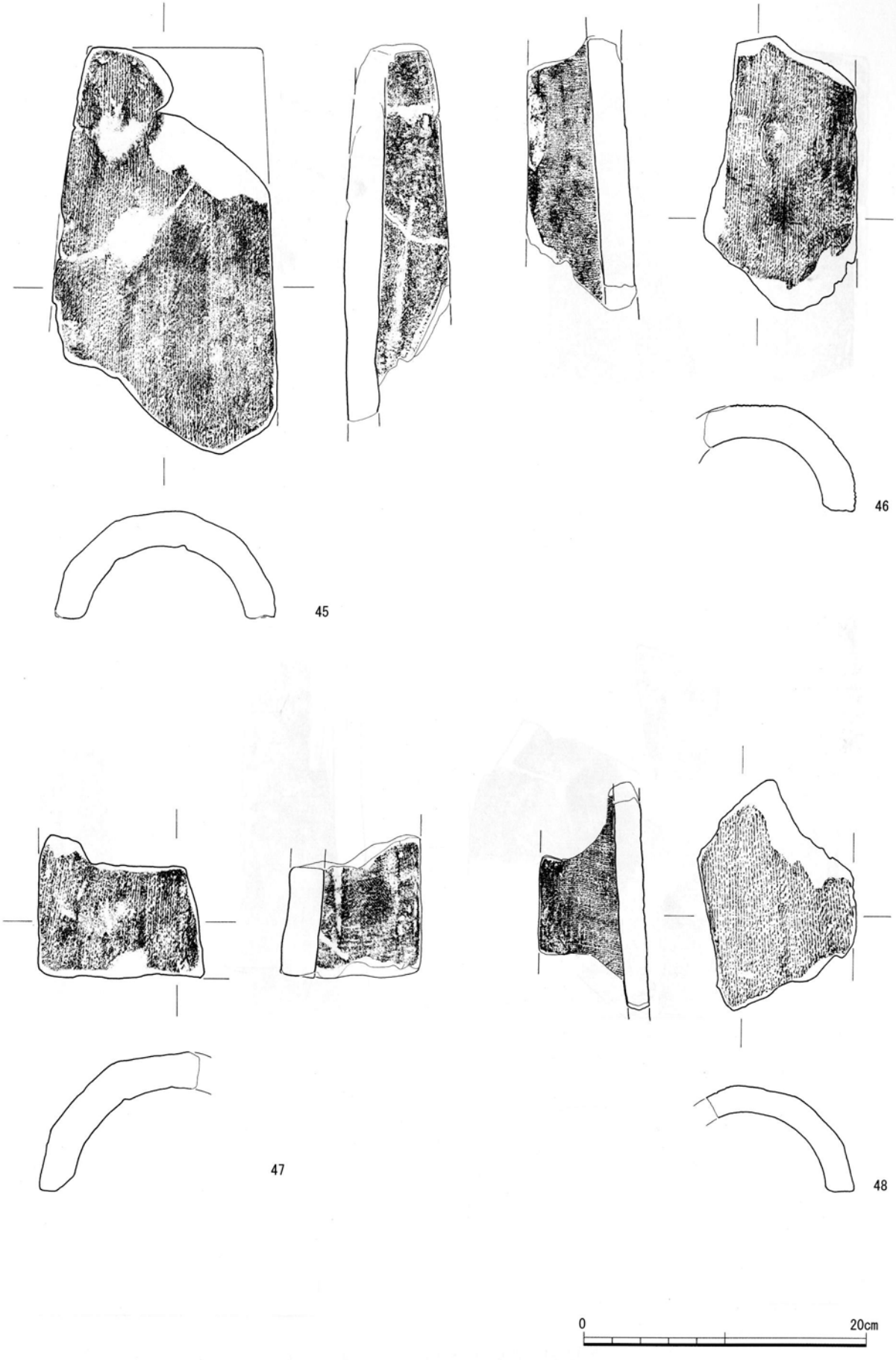
第38図　丸瓦（1A・1B類）実測図―2（1：4）



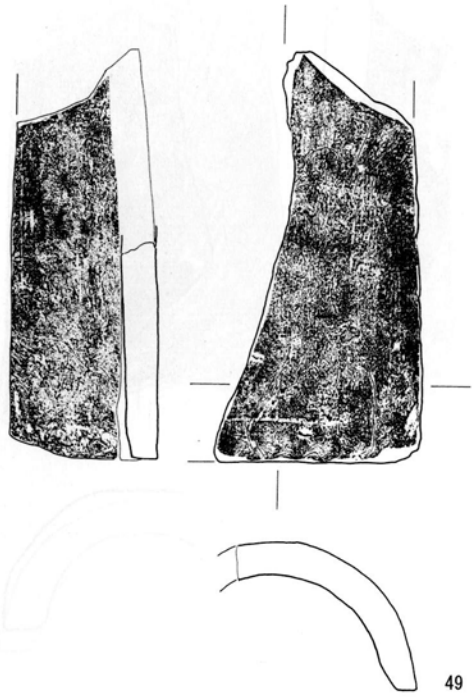
第39図　丸瓦（1Ｃ類）実測図―1（1：4）

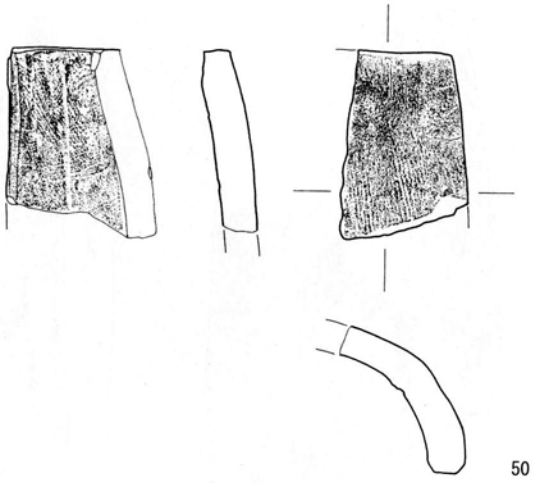


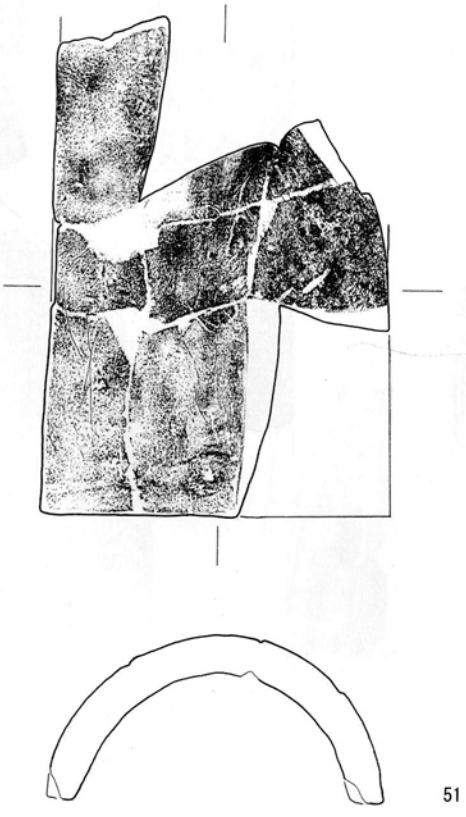
第40図　丸瓦（1Ｃ類）実測図―2（1：4）

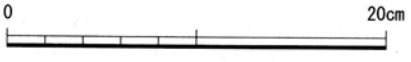


第41図　丸瓦（２類）実測図（1：4）

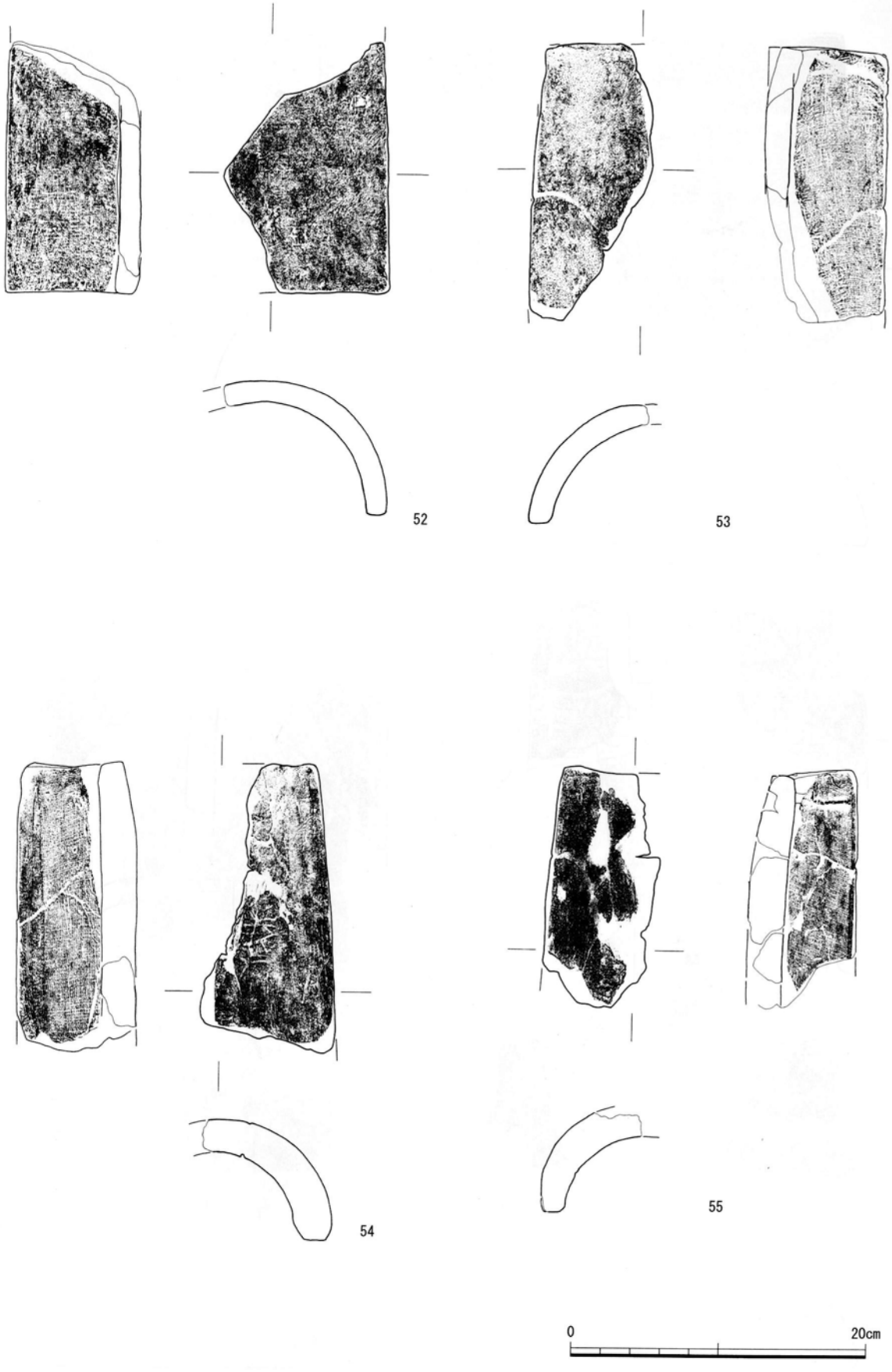




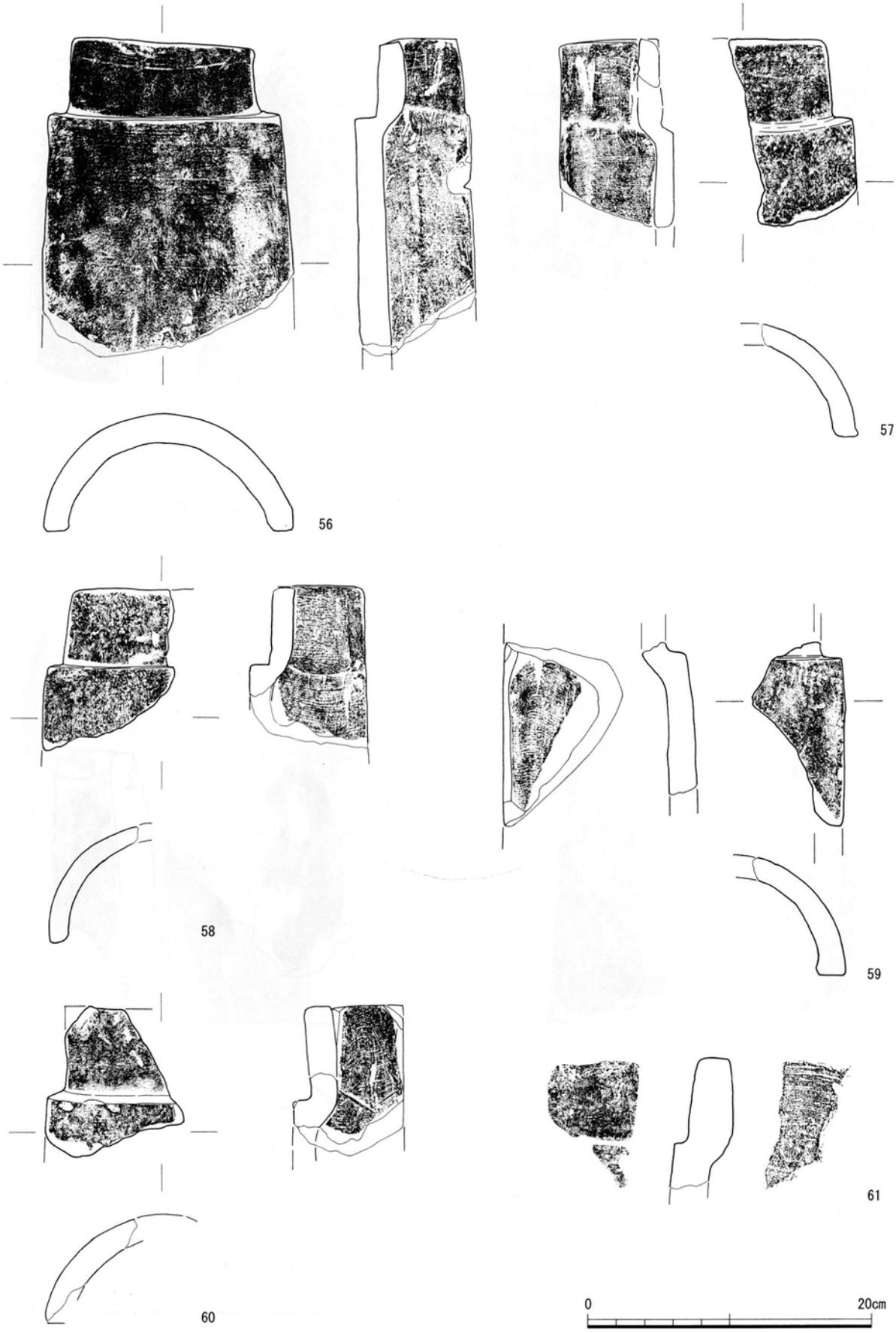




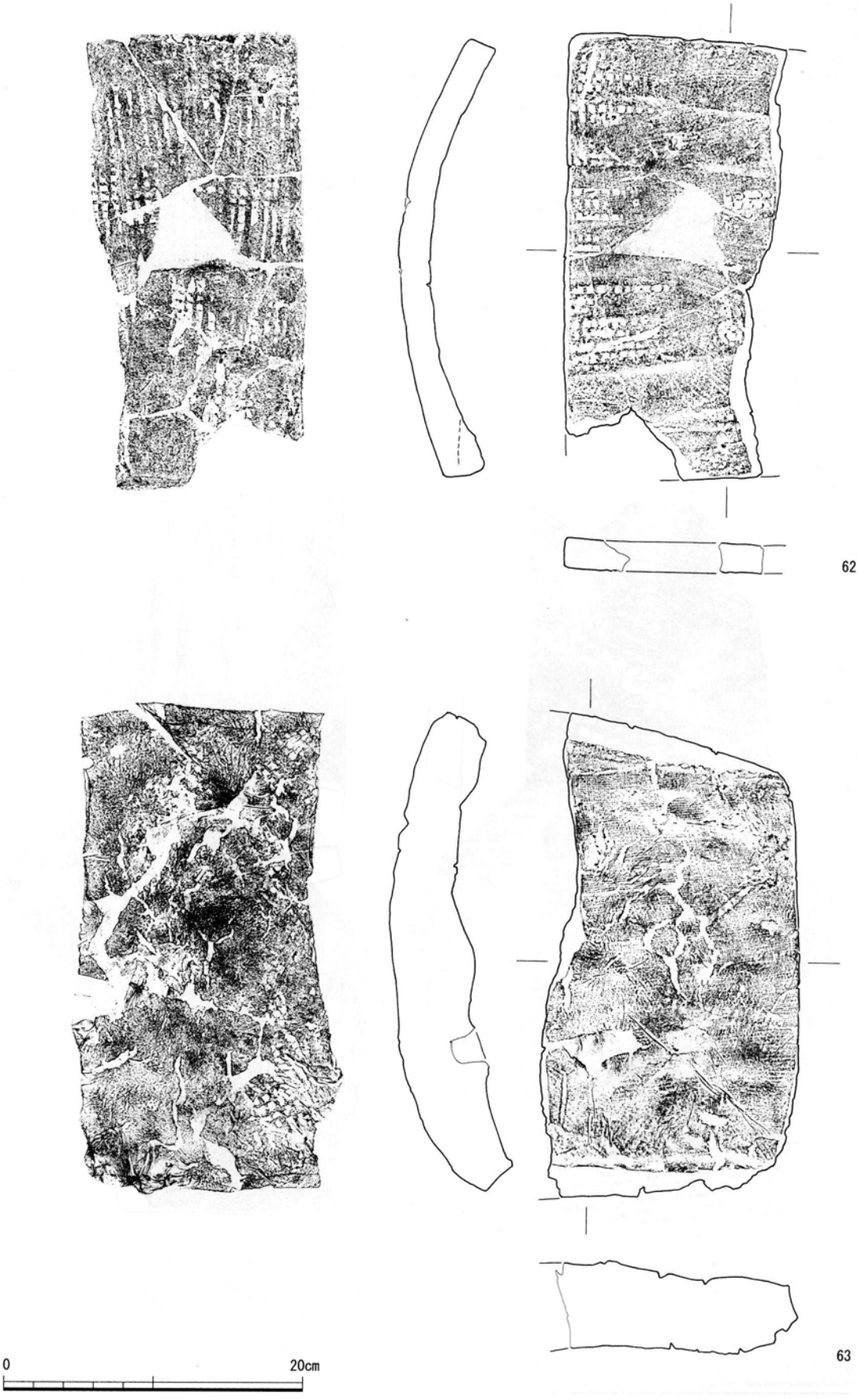
第42図　丸瓦（3・4類）実測図（1：4）



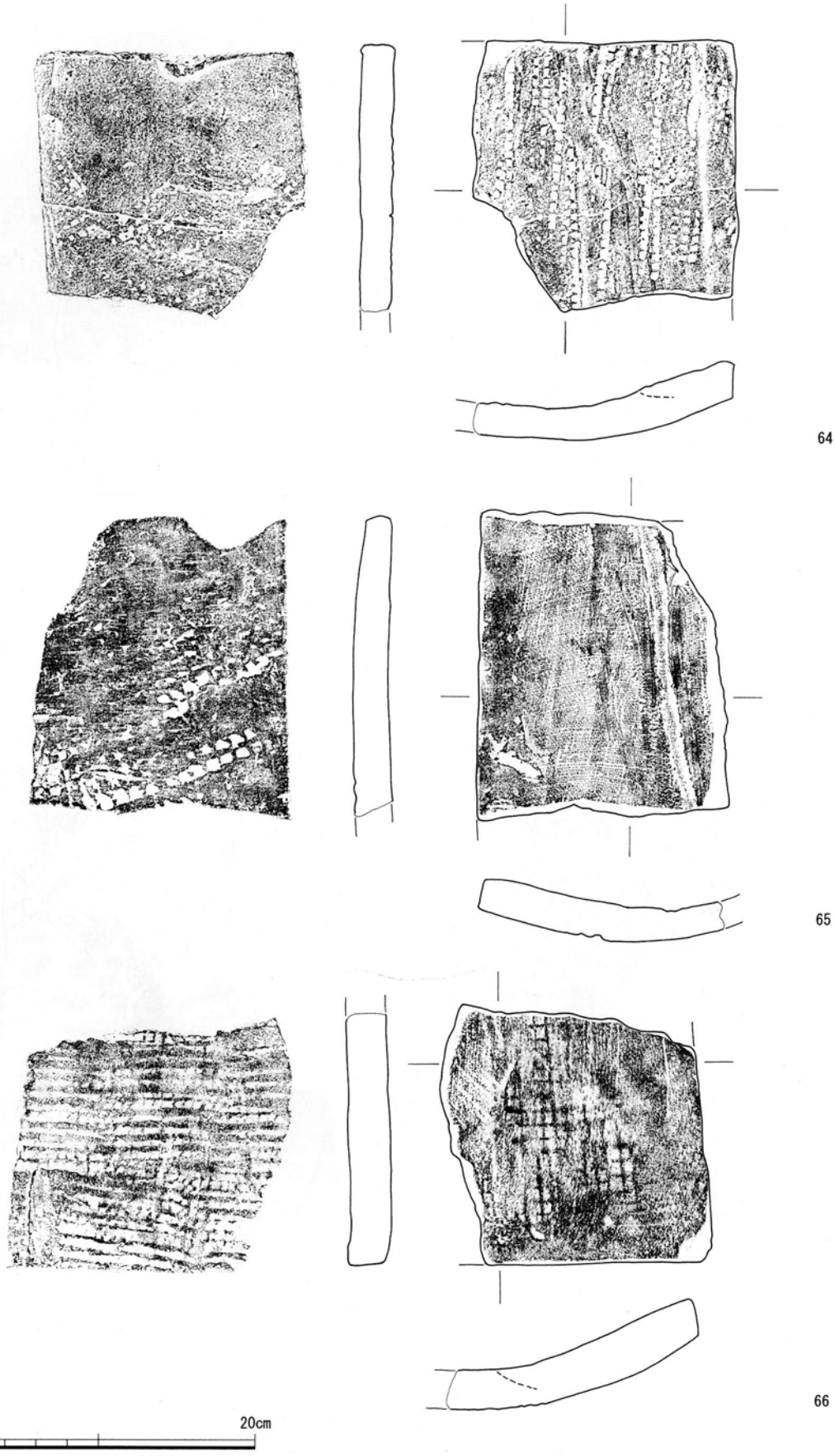
第43図　丸瓦（4類）実測図（1：4）



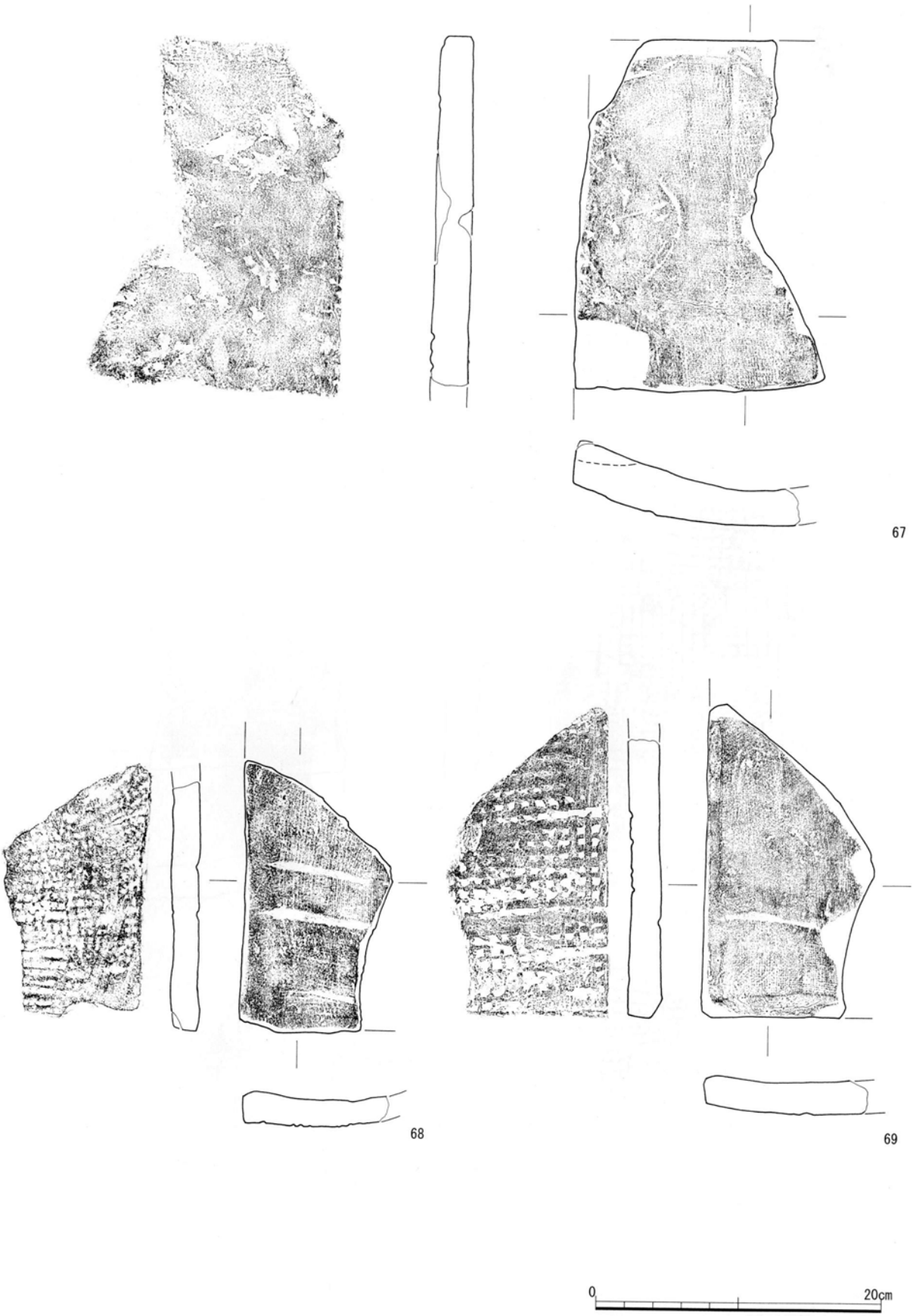
第44図　丸瓦（5類）実測図（1：4）



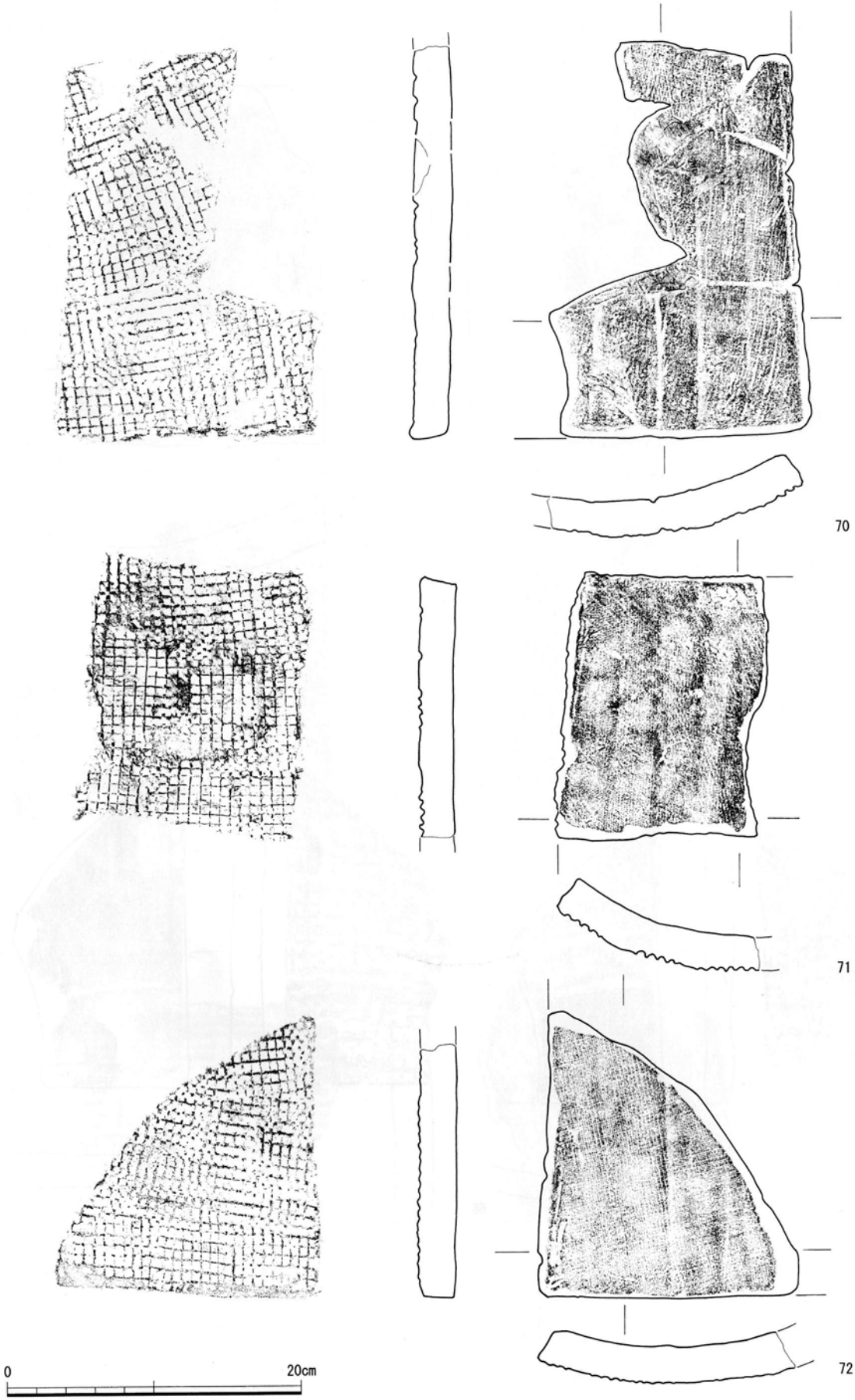
第45図　平瓦（1類）実測図―1（1：4）



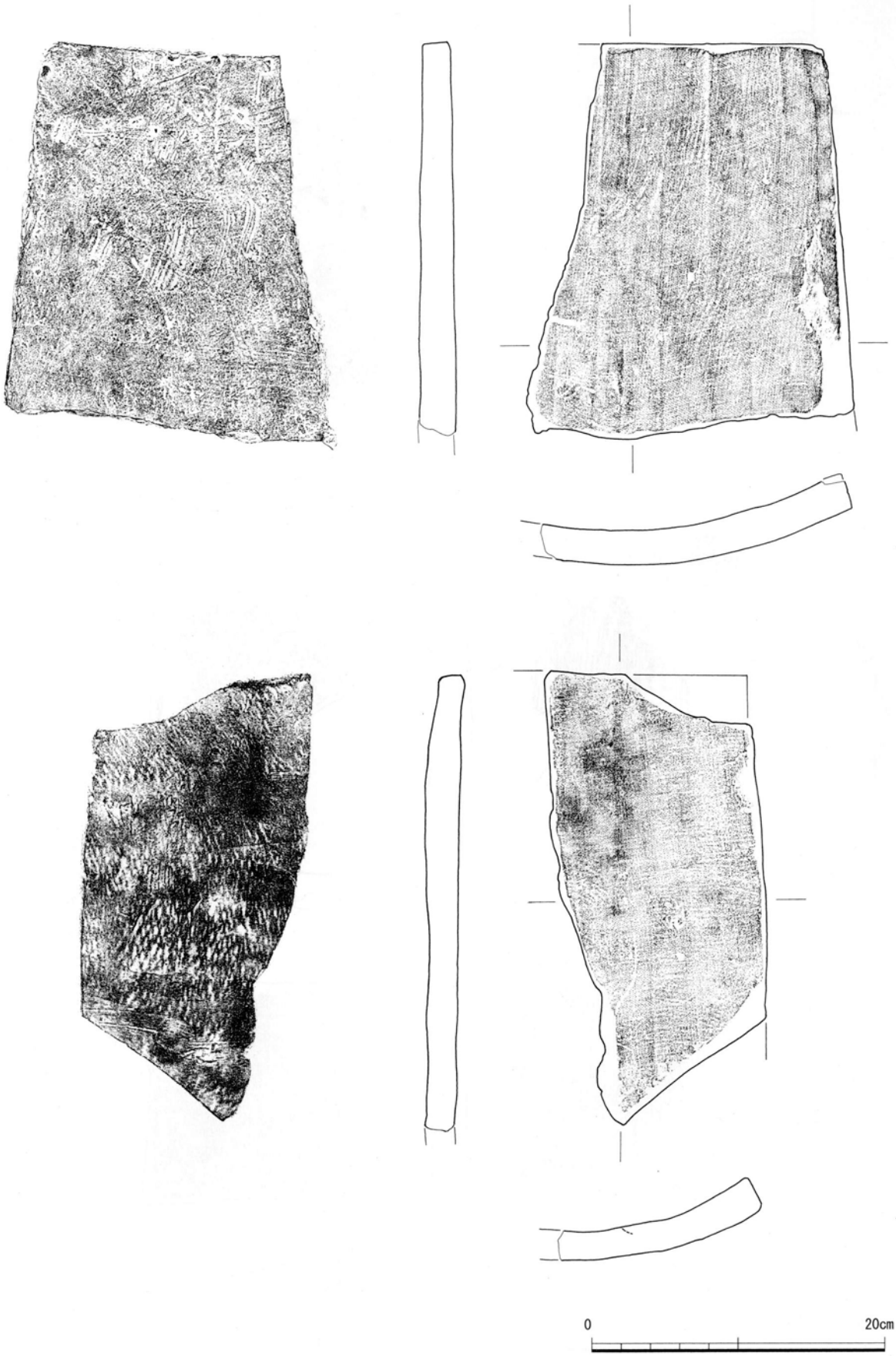
第46図　平瓦（1類）実測図―2（1：4）



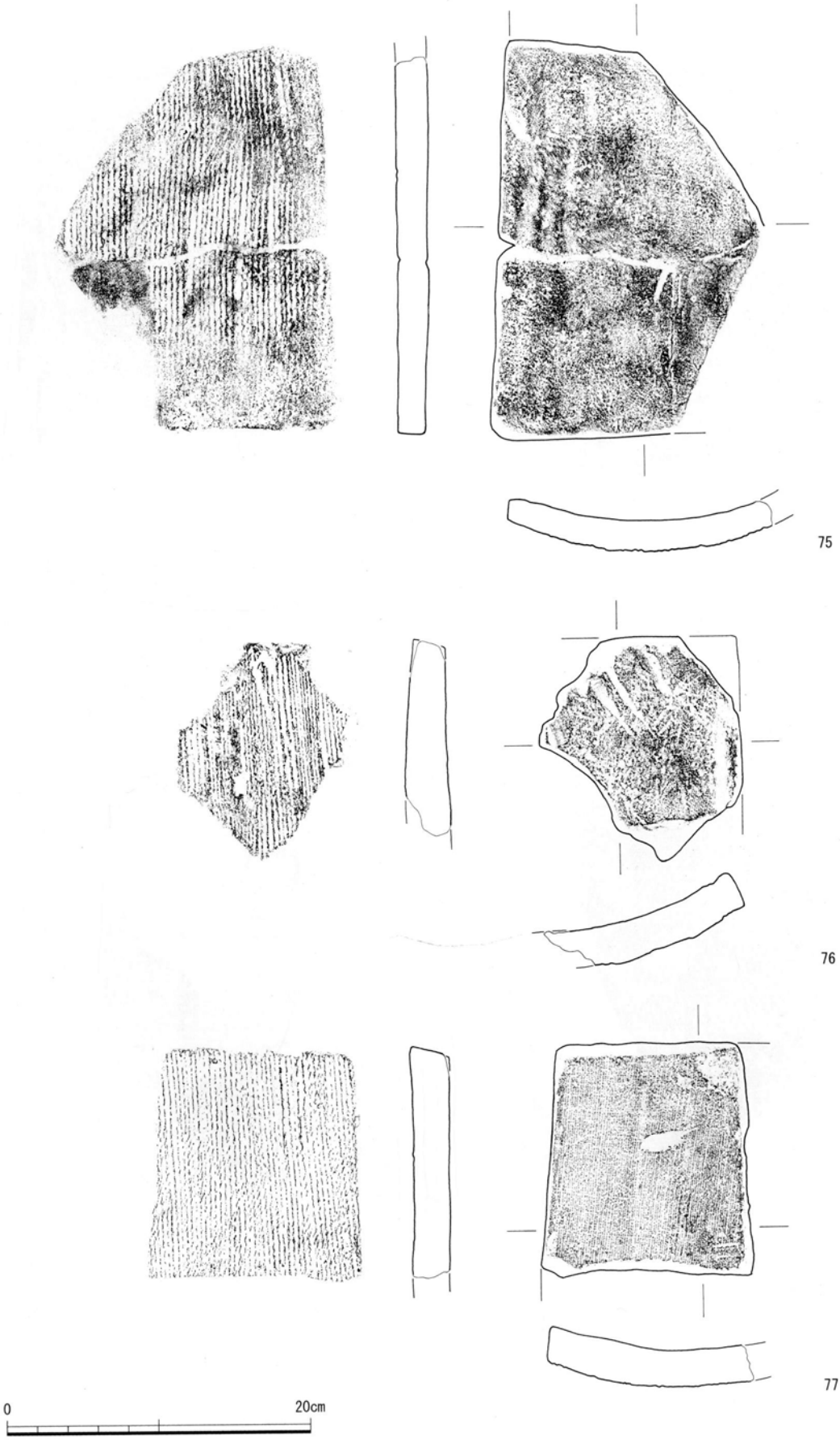
第47図　平瓦（1類）実測図ー3（1：4）



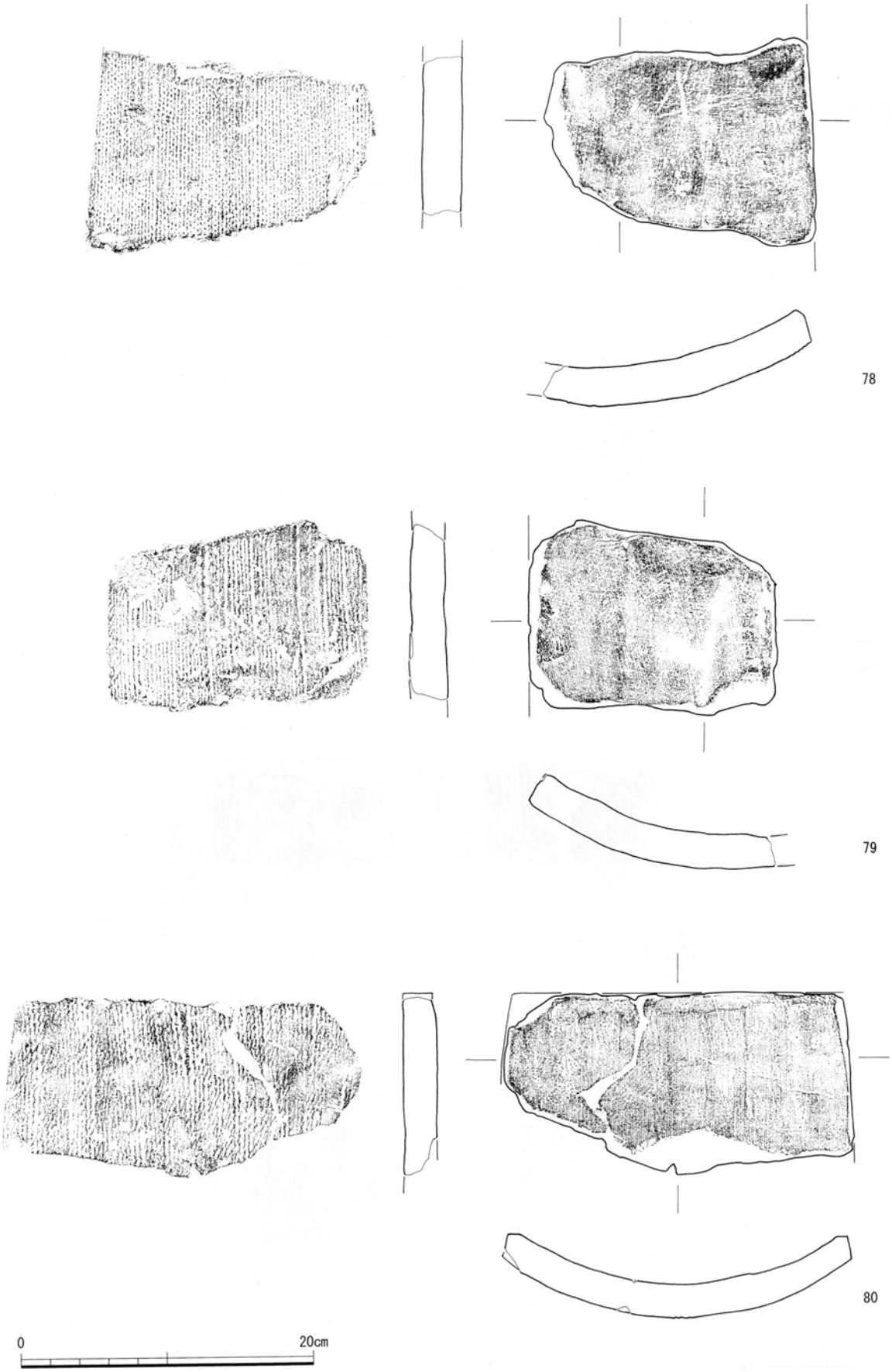
第48図　平瓦（2類）実測図（1：4）



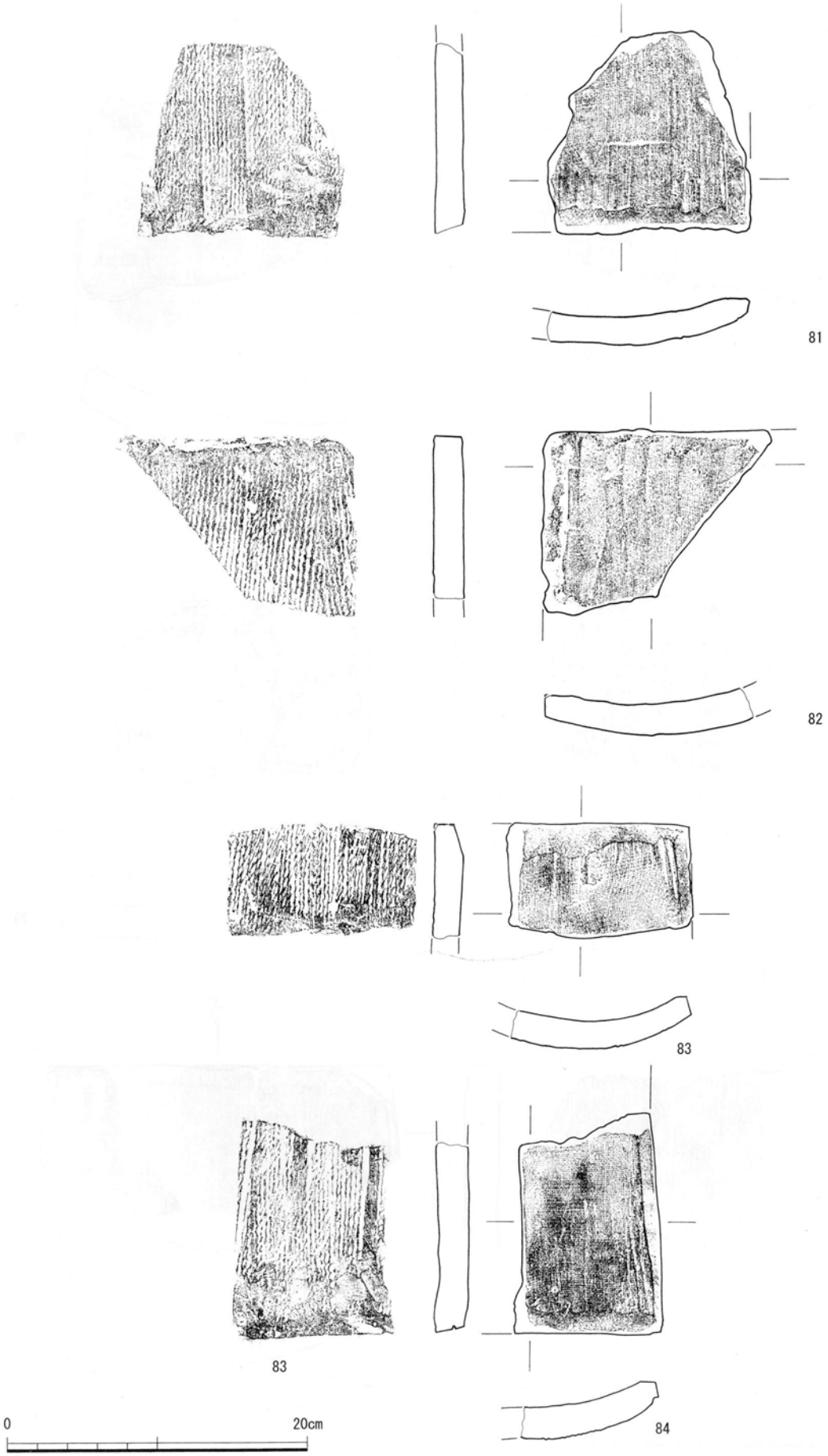
第49図　平瓦（3類）実測図（1：4）



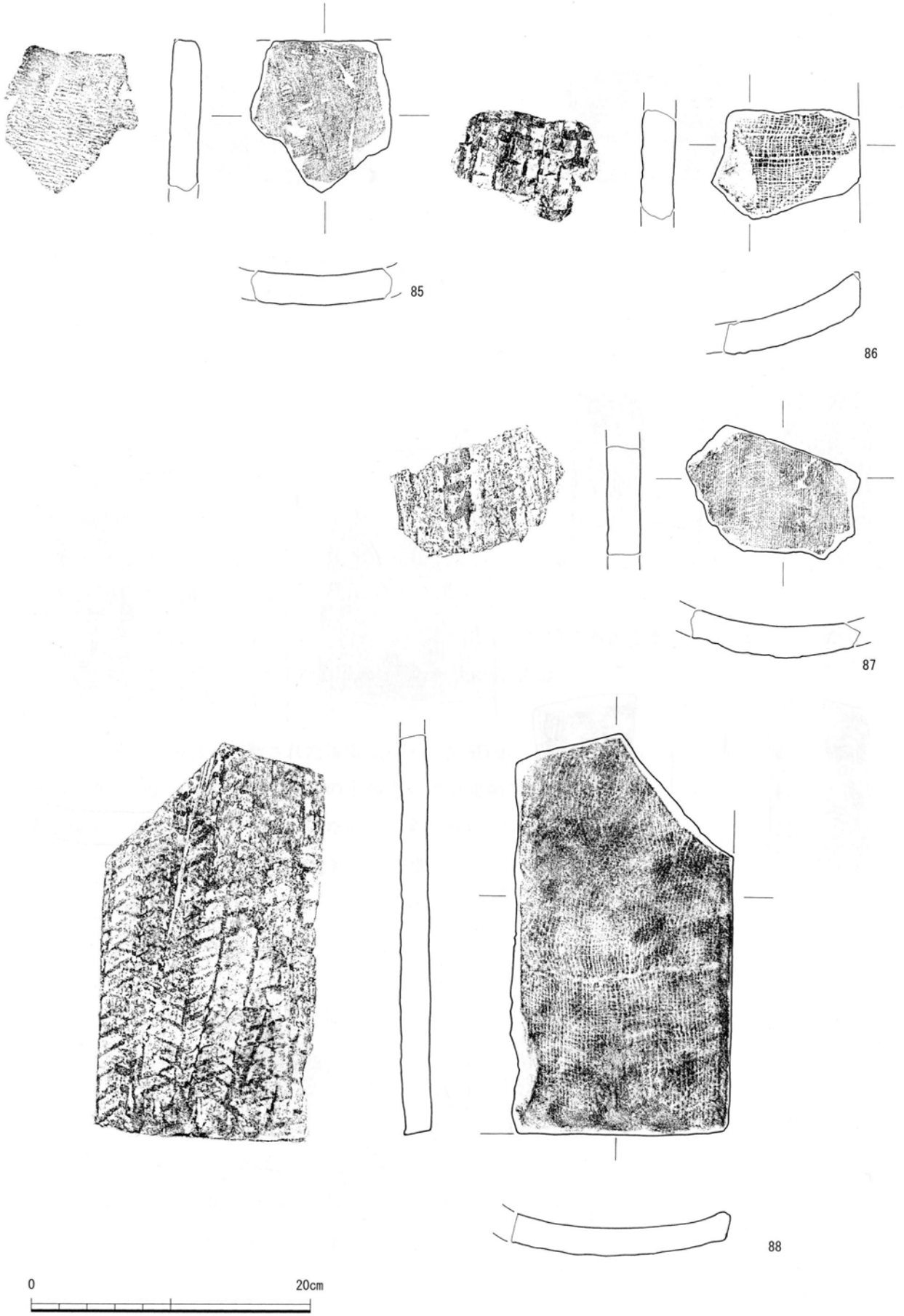
第50図　平瓦（4類）実測図（1：4）



第51図　平瓦（4・5類）実測図（1：4）



第52図　平瓦（5類）実測図（1：4）



第53図　平瓦（6・7類）実測図（1：4）

第54図　道具瓦実測図（1：4）

第7章　総　括

1．寺院関連遺構の変遷（第55・56図）

今回の調査で確認された遺構の大半は単独では時期，性格が不明なものが多い。そのため，遺構の時期，性格を考える上では遺構同士の重なり，配置や主軸方向から総合的に判断する必要がある。

遺構の主軸方向について，溝遺構等主軸の確認可能なものを抽出し，時期と方位の規則性について検討する。なお，1区の高西遺跡は別遺跡と判断し，検討には含めない。

古代の遺構

まず，今回の調査で確実に古代まで遡る寺院関連遺構と判断された唯一の遺構である6区の溝SD 06が基準となろう。溝SD 06主軸方向は南北軸でW－30°～35°－Nとなっており，同様の主軸方向を取るものは同じく6区の溝SD 09，土手状遺構SX 01のみであった。溝SD 09については古代の遺構として矛盾がない古い時期の遺構であるが，土手状遺構SX 01については明らかに中世以降の築造である。第56図に示した明治期の道水路図において，土手状遺構SX 01に対応する位置に小道が走っており，類似した方位の傾きを示している。直接関連するものかは断定できないが，近代まで同様の方位軸の地割りは存在したようである。

溝SD 06，溝SD 09の主軸方向は，遺跡の南西1.2 kmに位置する古志本郷遺跡で確認された官衙Ⅰ期の方位軸（33°前後）と近似する（島根県教育委員会2003）。

中世初期の遺構

11～12世紀頃の造営と判断された遺構に6区の溝SD 07，SD 08がある。溝SD 07の主軸方向は南北軸W－40°～50°－Nで，溝SD 08の主軸方向は南北軸W－60°～65°－Nである。溝SD 07と同様の方位軸をとる遺構は確認されていないが，溝SD 08と同様の方位軸をとる遺構は同じく6区の溝SD 03，SD 04があり，これらは中世初期の遺構としても矛盾ない。寺院関連遺構と判別可能なものはないが，溝SD 03，SD 04，SD 08は比較的近接した位置でほぼ平行に走っており当時の地割りを反映したものであろう。

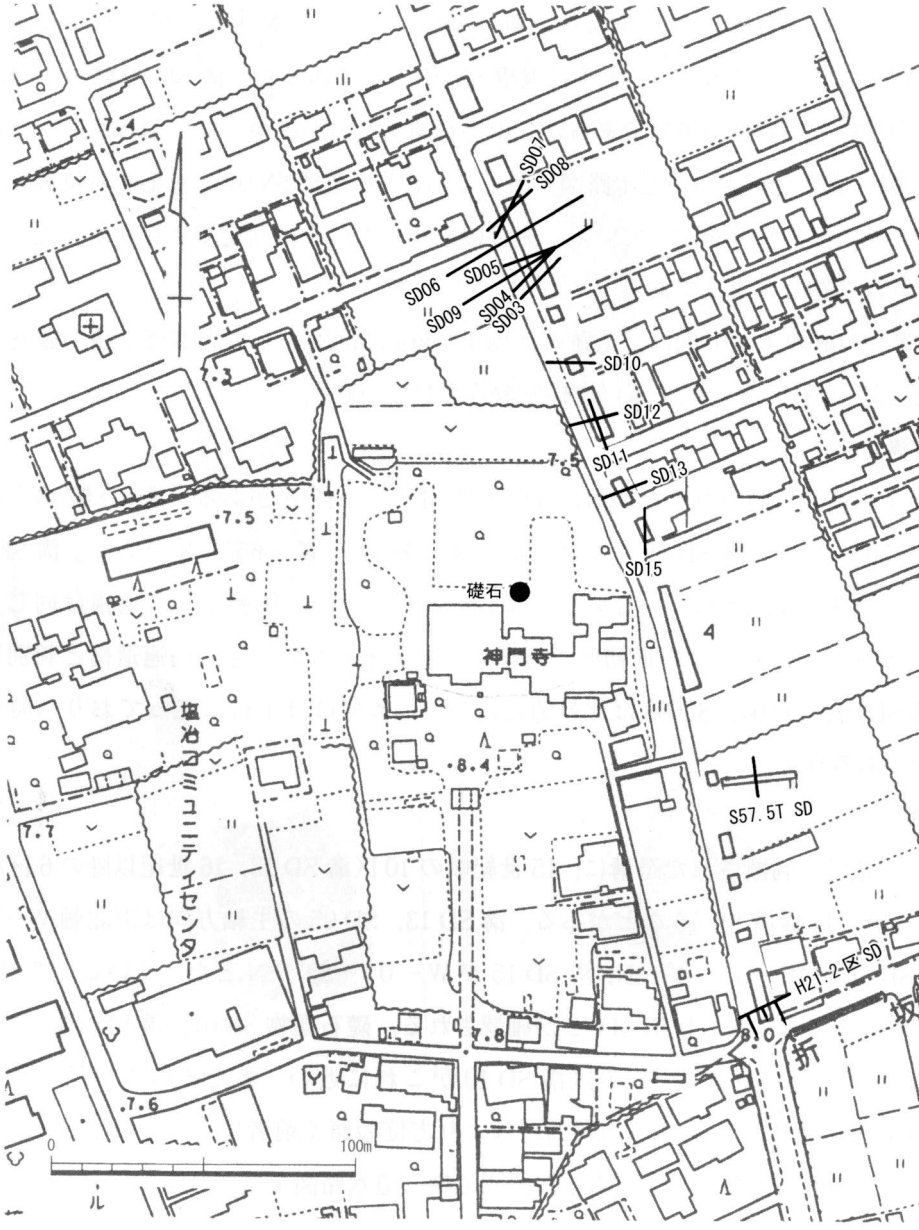
その後の遺構

13世紀以降の造営と判断された遺構に，15世紀頃の10区溝SD 13，16世紀以降の6区溝SD 05，9区礎石建物SB 01，11区溝SD 15などがある。溝SD 13，SD 05の主軸方向は南北軸W－25°～30°－N，礎石建物SB 01がW－3°～4°－N，溝SD 15がW－0°～20°－Nとなっている。溝SD 05，SD 13と同様な方位軸をとるものに9区溝SD 12が確認される。礎石建物SB 01，溝SD 15と同様な方位軸をとるものは確認されていないが，8区溝SD 10がこれに近い。またその中葉的な角度の9区溝SD 11，布掘り状遺構SX 03もある。相対的にはより方位の傾く前者に古いものが多く，より正方位に近い後者に新しいものが多いようであるが，明治期の道水路図を見ても正方位から25°前後傾いた区画は近代まで残っていたことがわかる。

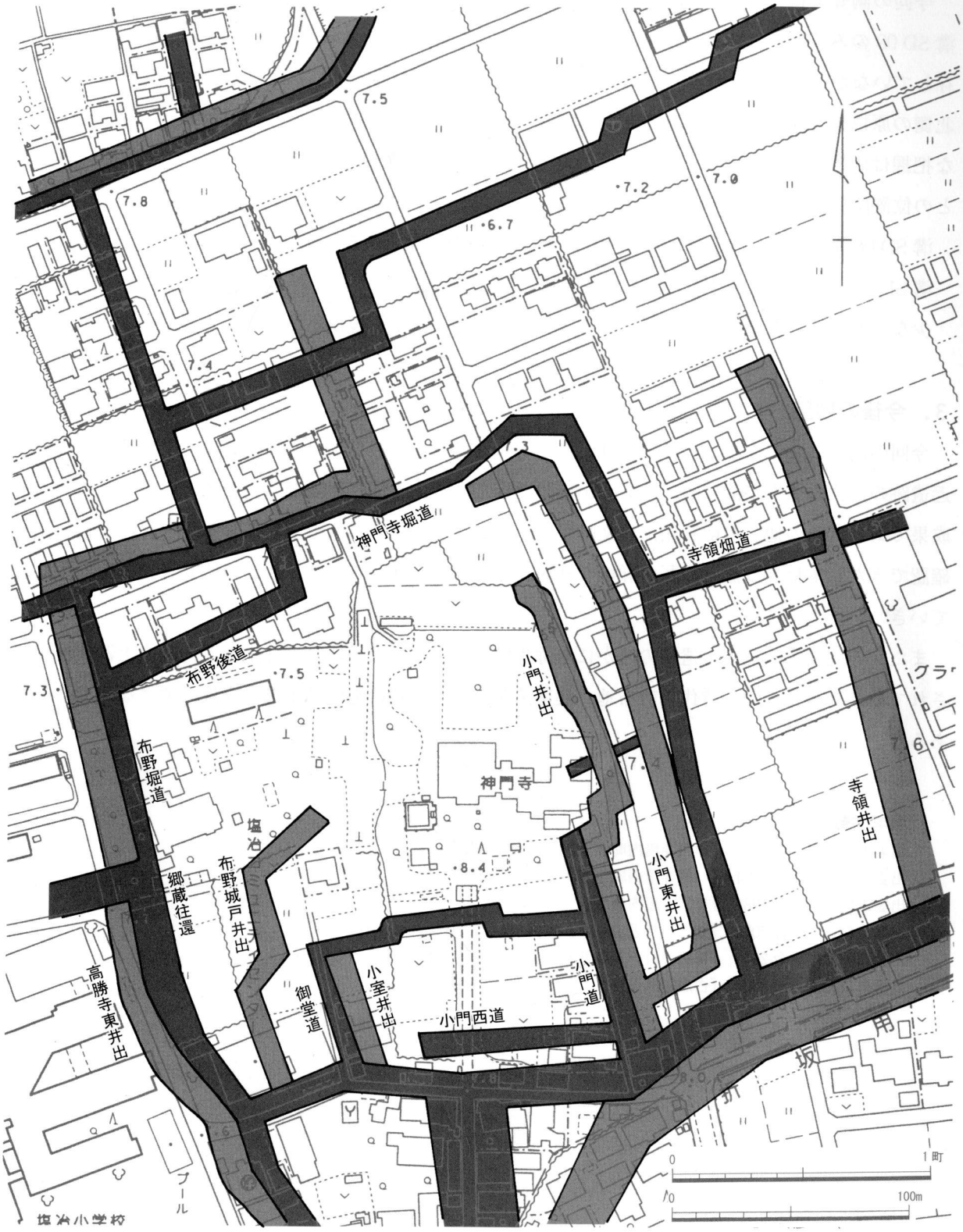
なお，この道水路図に示された道水路と関連する可能性のある遺構としては，6区土手状遺構SX

01，6区溝 SD 05のほか，過去の調査において昭和57年度調査の5トレンチ溝，平成20年度調査の2区溝などがある（出雲市教育委員会 1983，2009）。

明治期の道水路図に見える現在の神門寺を取り巻く方形区画はおよそ2町（約218 m）四方の値を示し，古老が伝えるかつての神門寺境内の規模（出雲市教育委員会 1984）と一致する。主軸方向は前述のようにW－25°－N前後であり，この方位軸に近い溝 SD 13，SD 05，SD 12等はこの寺院区画の中の施設であった可能性が考えられる。この区画が境内として営まれていた時期は不明だが，少なくとも近世のある時期までは寺域として維持されていたものであろう。よって，これより明らかに正方位軸に近く，現在の境内地の区割りにも近い礎石建物 SB 01，布掘り状遺構 SX 03，溝 SD 15，SD 10等はそれ以降の新しい時期の遺構である可能性が高い。



第55図　神門寺付近遺跡溝遺構配置模式図（1：2500）



道　　水路

第 56 図　明治 9 年下塩冶村道水路図合成図（1：2500）

2．古代寺院区画の評価

今回の調査で古代寺院に伴う遺構として確認できたものは寺院区画の北端付近を示す溝 SD 06 と溝 SD 09 のみであった。これより南については地形の削平と後世の構築物によって古代の遺構は残存していなかったとみられる。過去の調査に遡っても古代の遺構として確認されたものは神門寺庫裡北側の原位置を保った礎石（出雲市教育委員会 1985）のみであるため，現状では寺院区画の全体的な把握は困難である。ここでは創建期の北端区画溝である溝 SD 06 と過去の調査で確認された礎石との位置関係等を示すのみに留めておきたい。

溝 SD 06 主軸方向　　：N－55°～60°－E（南北軸 W－30°～35°－N）

溝 SD 06・礎石間距離：約 100 m（主軸延長線直交距離）

少なくとも神門寺境内廃寺の寺域は一辺 100 m を優に超える規模となるようである。

3．今後の展望

今回の調査においては，これまでほとんど明らかにされていなかった神門寺境内廃寺及び神門寺付近遺跡の古代の遺構が部分的ではあるが確認できた。特に寺域の北限を明らかにできたことは大きな成果である。その他，水切り瓦，無文軒平瓦を含む大量の瓦資料も出土しており，一部新型式の瓦も確認できた。本稿では個々の瓦の詳細な検討にまでは至らなかったが，今後の研究資料として活用していきたい。

また，寺院関連の遺構・遺物のほかにも弥生時代終末期の竪穴建物，弥生土器，縄文土器等が確認されており，縄文・弥生時代の散布地，集落遺跡としての遺跡範囲の把握も今後必要となってくるであろう。

参考文献

出雲市教育委員会 1983 『神門寺境内廃寺 1 次発掘調査概報』
出雲市教育委員会 1984 『神門寺境内廃寺 2 次発掘調査概報』
出雲市教育委員会 1985 『神門寺境内廃寺』
出雲市教育委員会 2009 『神門寺付近遺跡Ⅰ』出雲市の文化財報告 9
出雲市教育委員会 2010 『神門寺付近遺跡Ⅱ』出雲市の文化財報告 13
島根県教育委員会 2003 『古志本郷遺跡Ⅴ』

写　真　図　版

畑遺構（畝状遺構・溝 SD 01）全景（南東から）

畝状遺構検出状況（南東から）

畝状遺構完掘状況（南東から）

溝 SD 02（南東から）

溝 SD 01（北東から）

図版２　６区遺構１

6区　全景（北西より）

溝 SD 04・09 土層堆積状況（北東より）

溝 SD 04（北東より）

溝 SD 05（北東より）

溝 SD 03（北東より）

溝 SD 09（北東より）

図版 4　6 区遺構 3

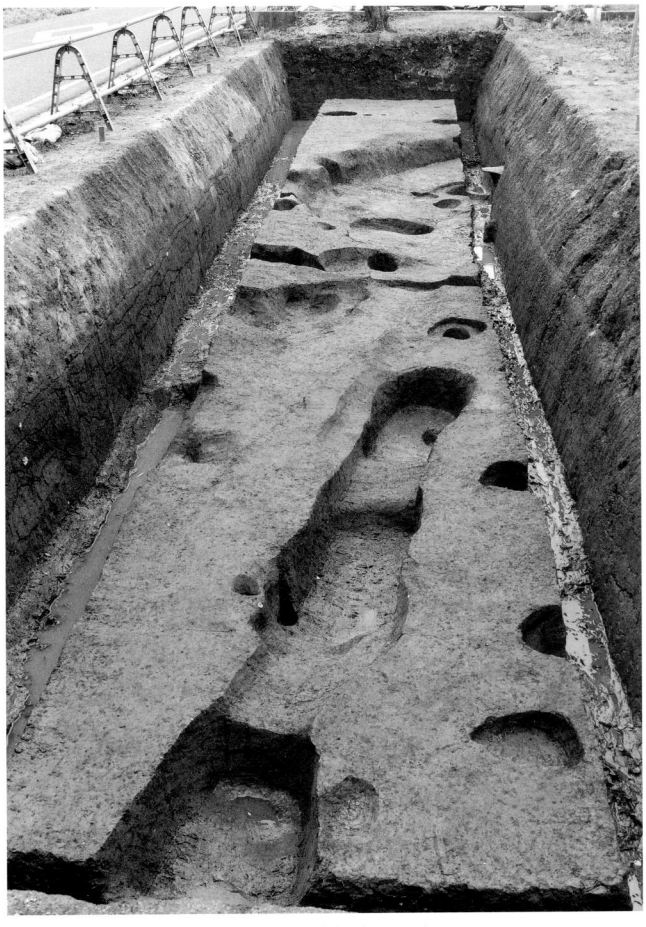
溝 SD 06 遺物出土状況（南西より）

溝 SD 06 完掘状況（北東より）

井戸 SE 01 遺物出土状況（北西より）

井戸 SE 01 完掘状況（北西より）

土手状遺構 SX 01（西より）

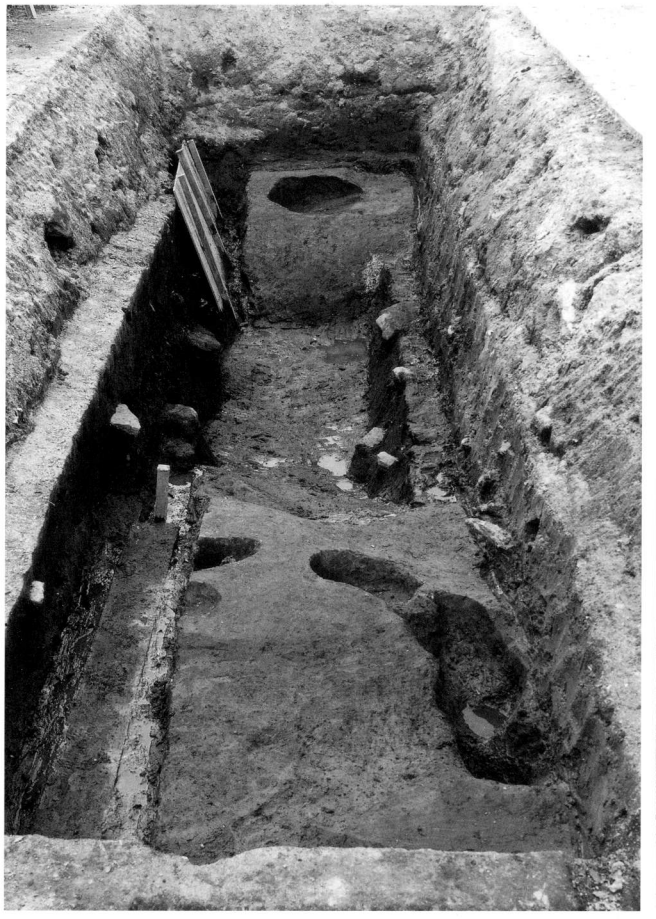


9区全景（南東より）

礎石建物 SB 01（南東より）

竪穴建物 SI 01（南より）

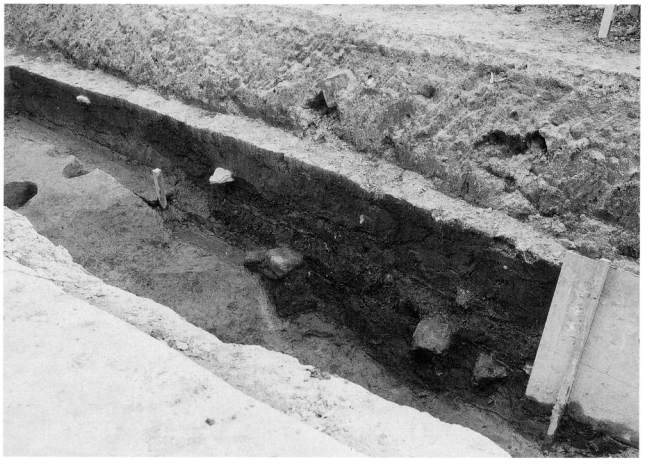
図版6　8・10区遺構



10区全景（南東より）

8区全景（南東より）

溝 SD 13 遺物出土状況（南より）



溝 SD 13 土層堆積状況（北より）

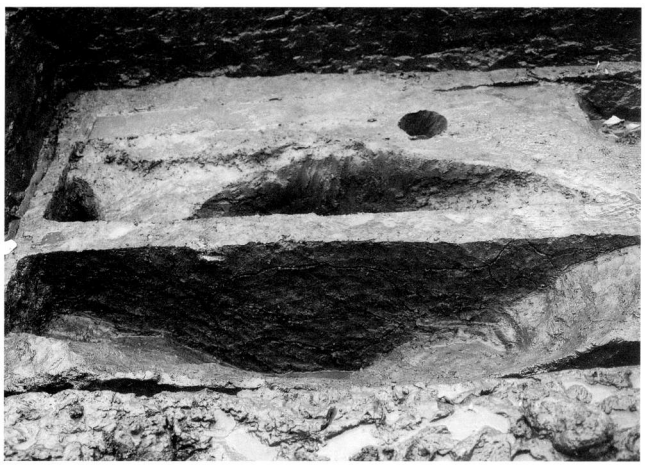
井戸 SE 02（南西より）

井戸 SE 02・土壙 SK 02（北西より）

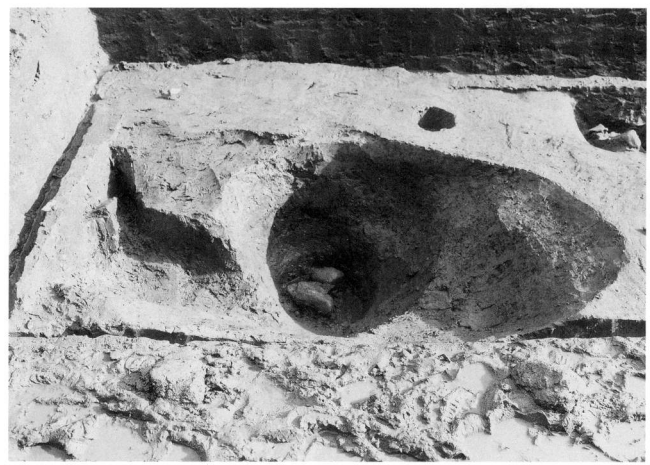
11 区全景（南東より）

溝 SD 15 土層堆積状況（北西より）

ピット P 29 遺物出土状況（北西より）



土壙 SK 05・06 土層堆積状況（北東より）



土壙 SK 05・06 完掘状況（北東より）

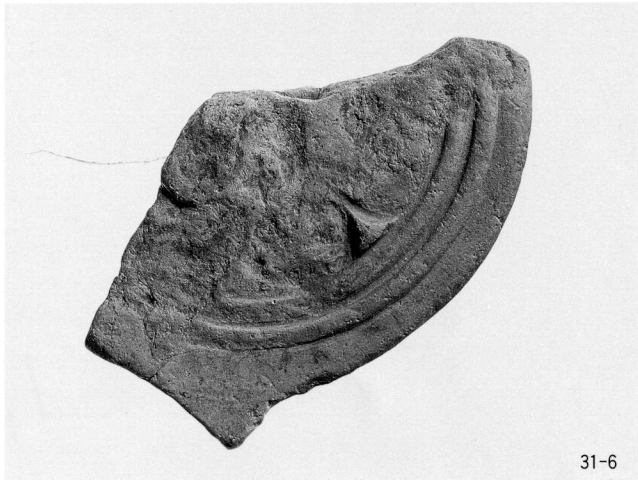
図版 8　瓦類 1

31-1

31-2

31-4

31-5



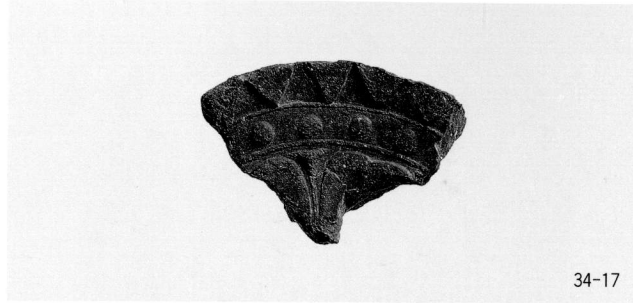
31-6

31-3

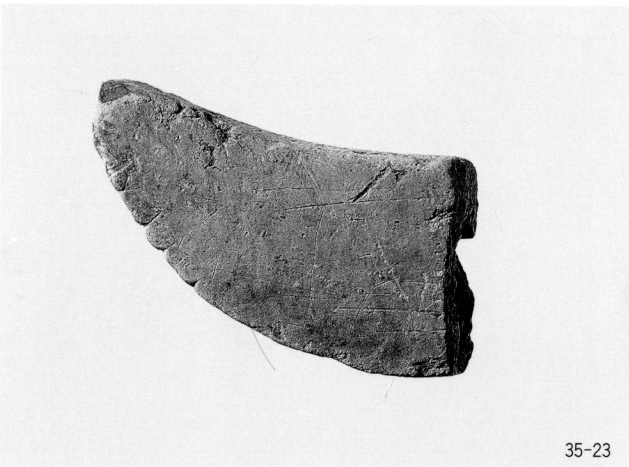
32-10

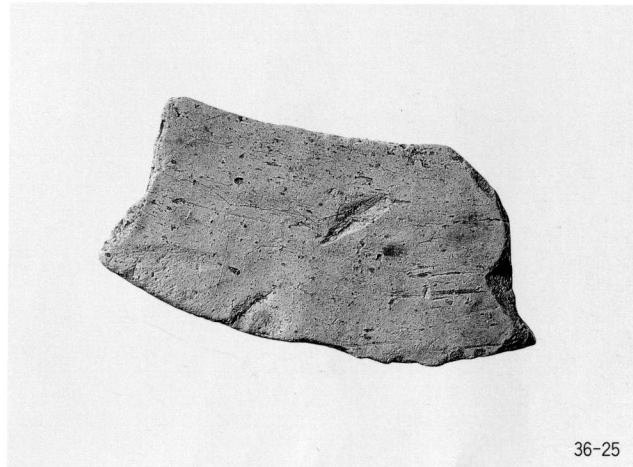
(2：5)

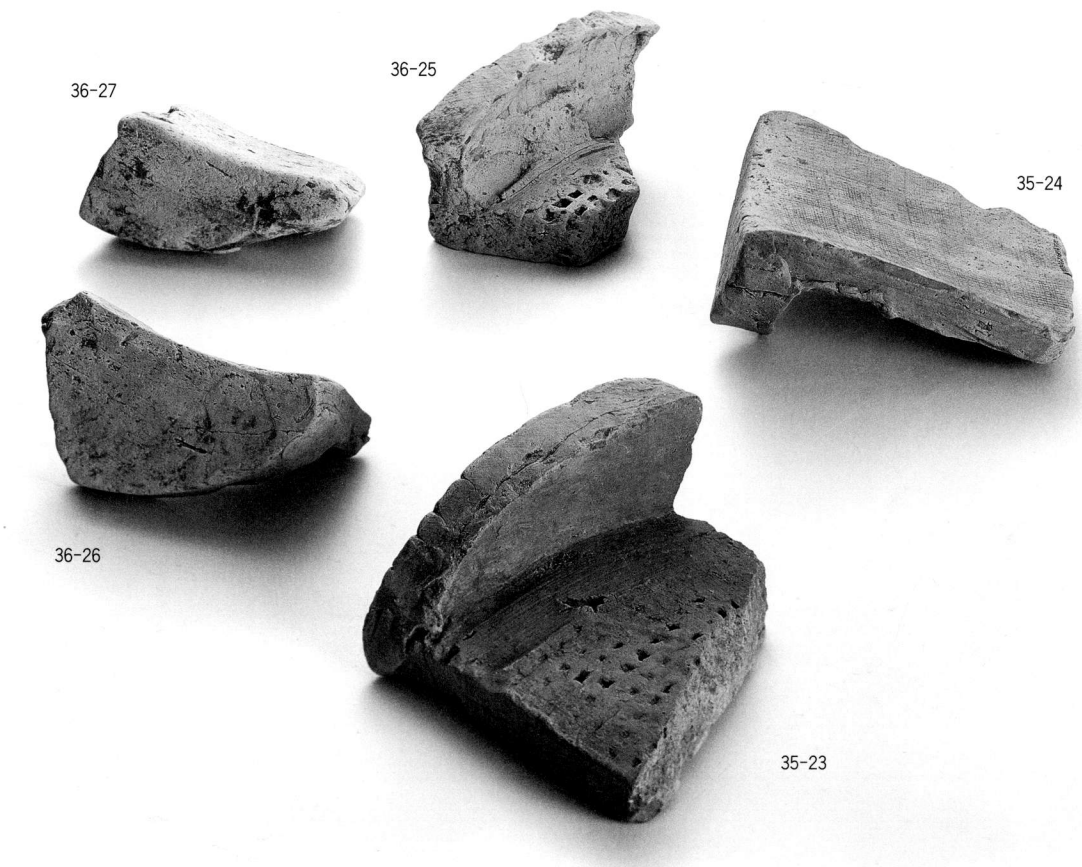
33-12


34-17

32-11

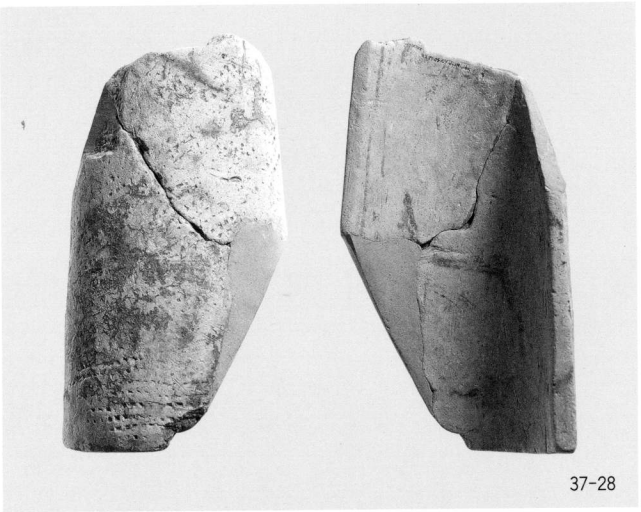

35-23

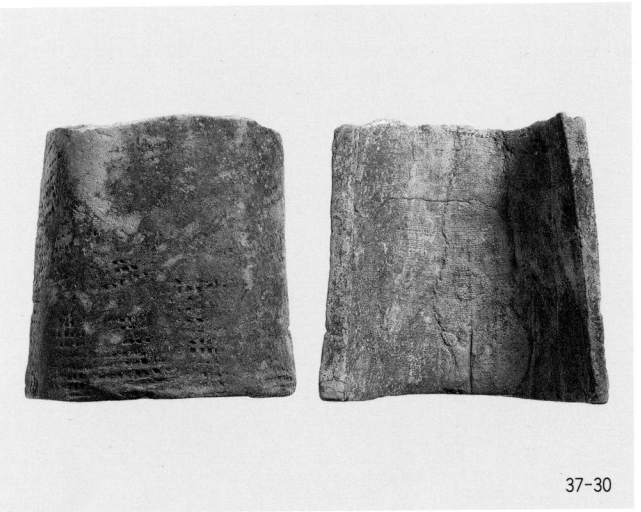

36-25

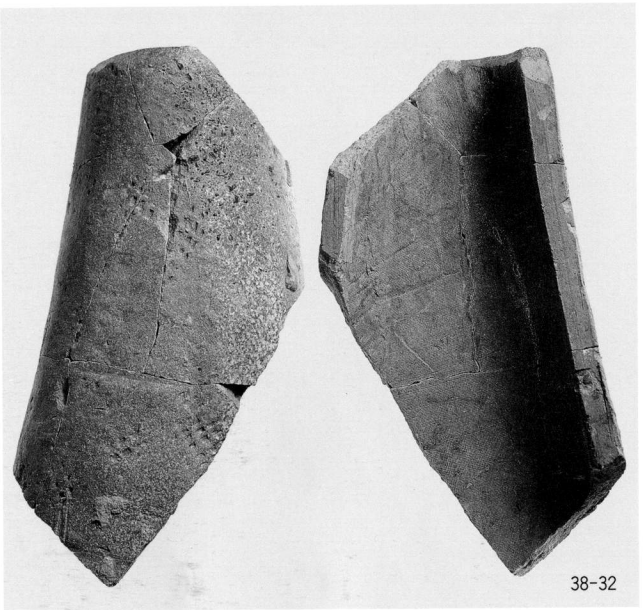


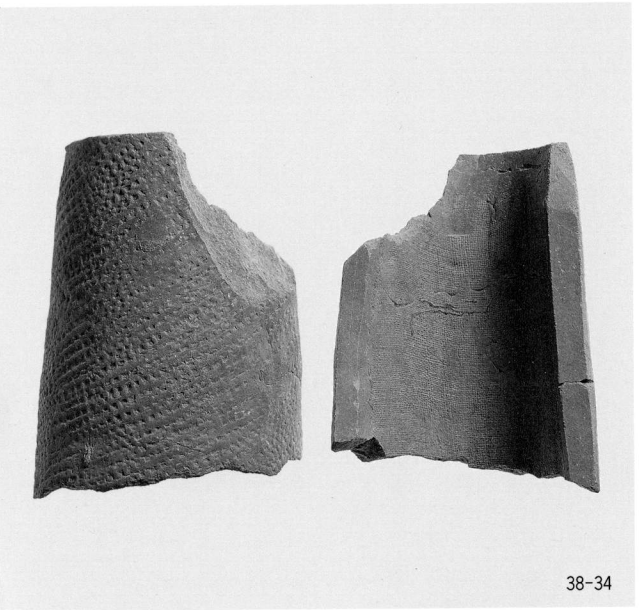
集合以外（2：5）

図版 10　瓦類 3

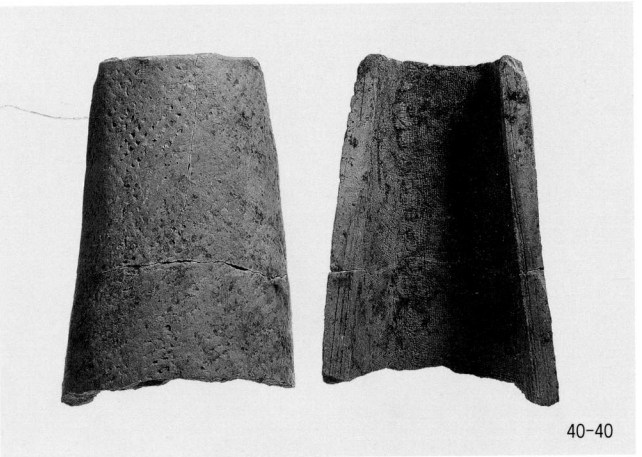

37-28

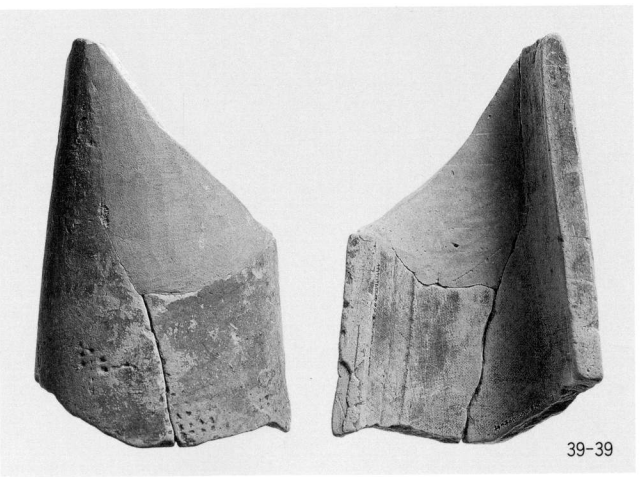

37-30


38-32

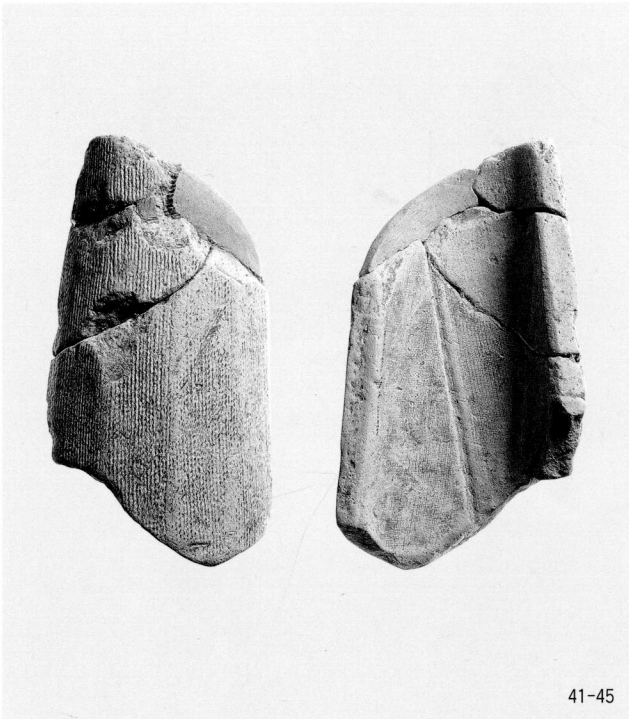

38-34

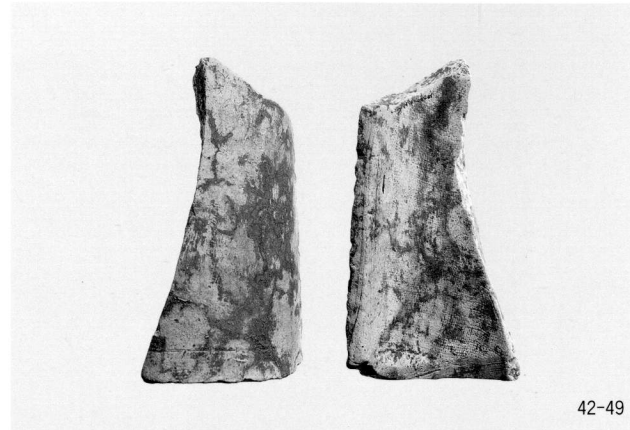
39-36

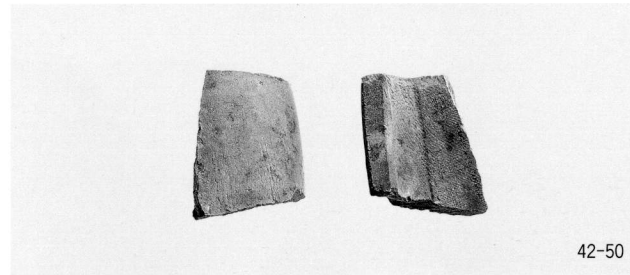

40-40

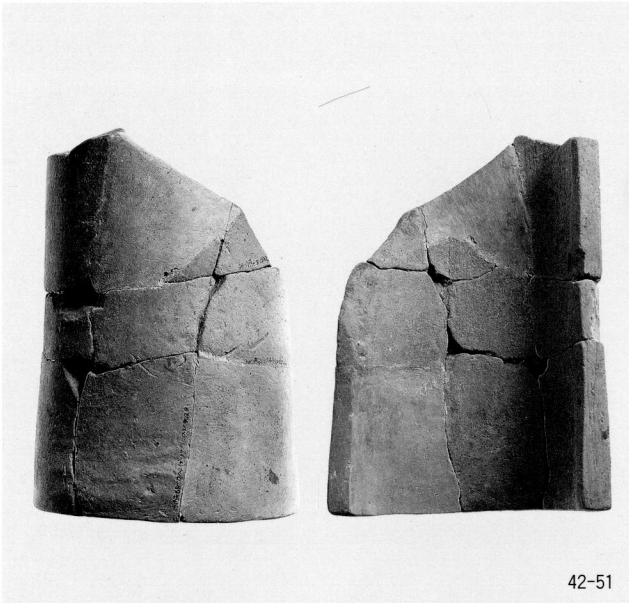

39-39

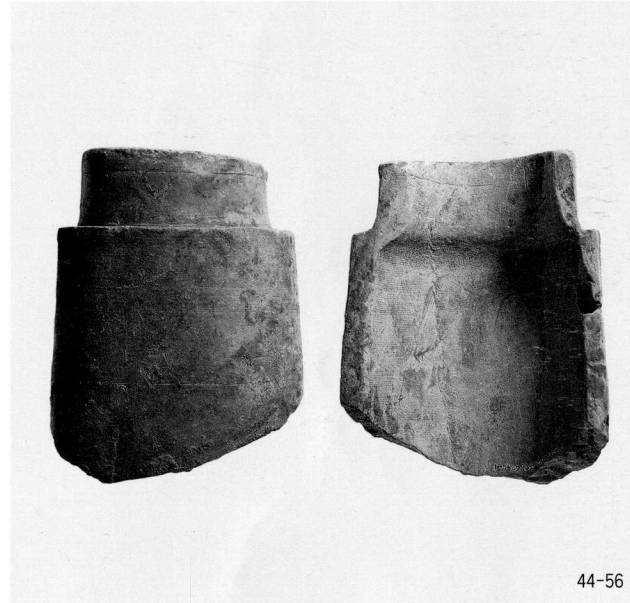
(1：5)

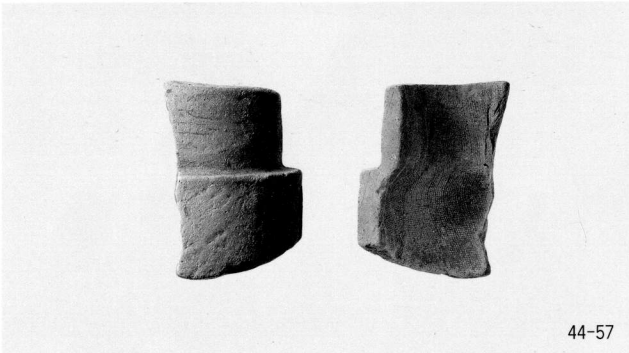

41-45

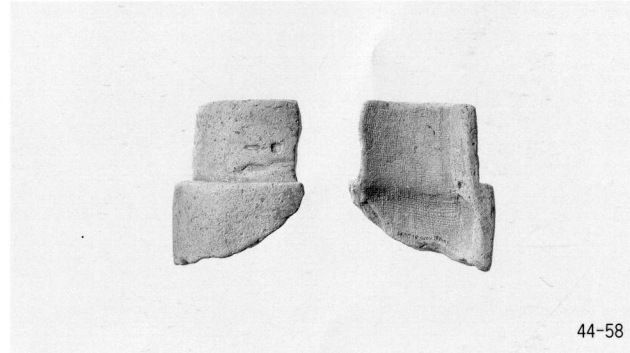

42-49

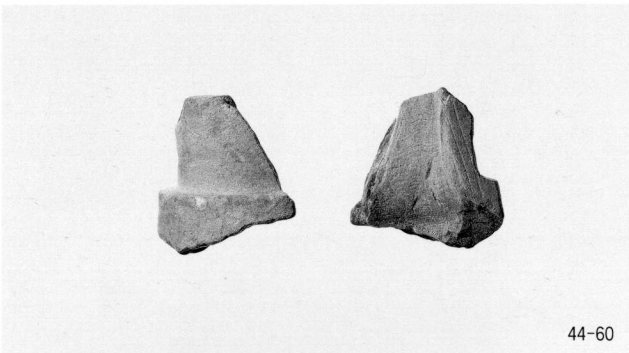

42-50

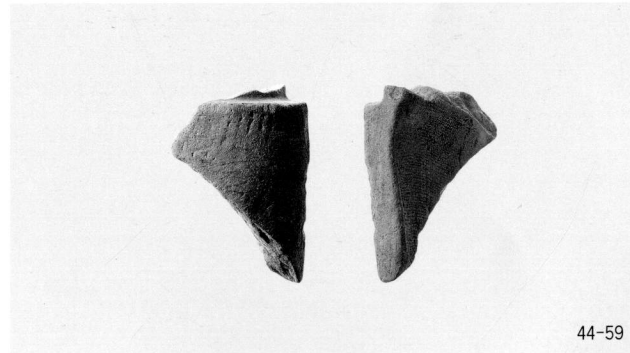

42-51


44-56


44-57


44-58

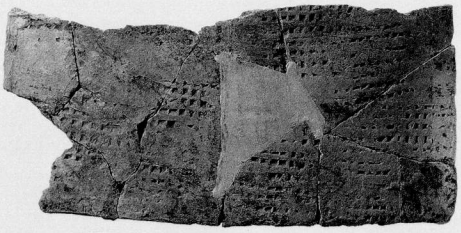
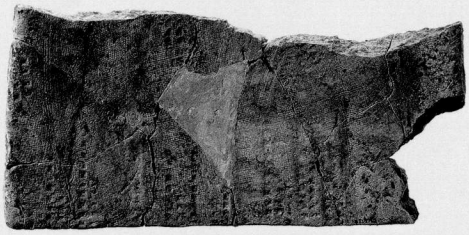

44-60


44-59

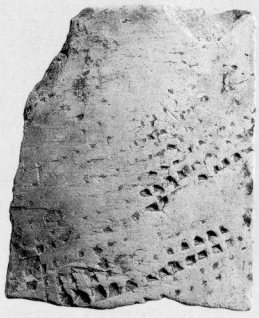
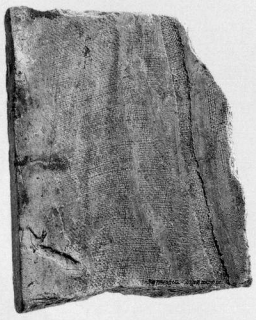
(1：5)

図版 12　瓦類 5

45-63

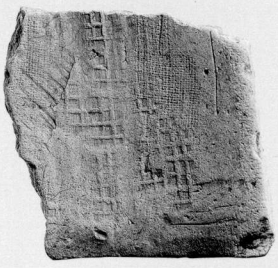
45-62

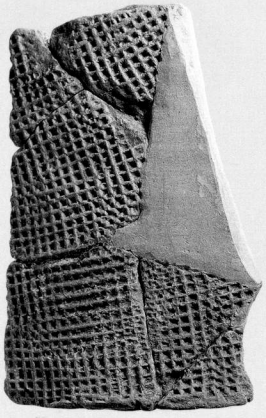
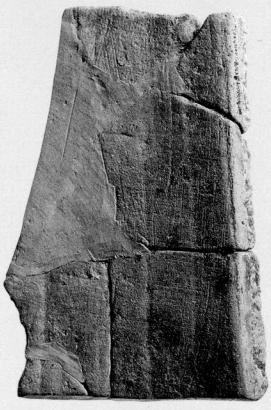
46-65

47-67

46-64

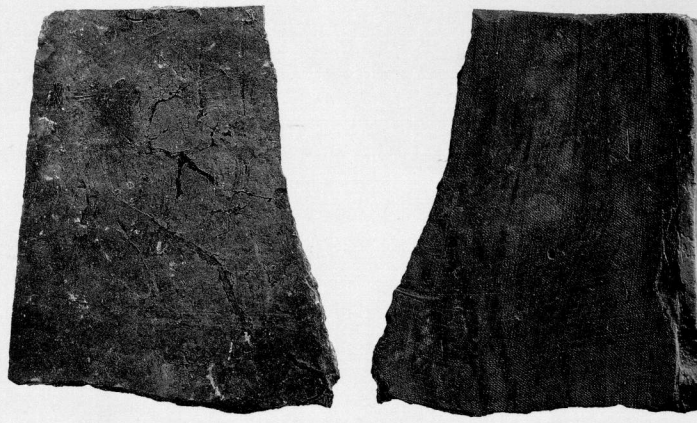


46-66

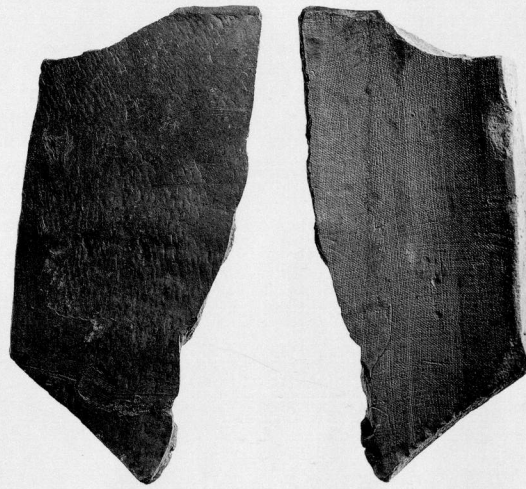



48-70

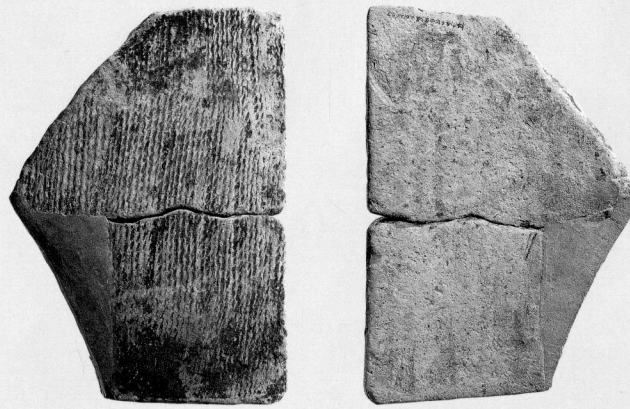
(1：5)



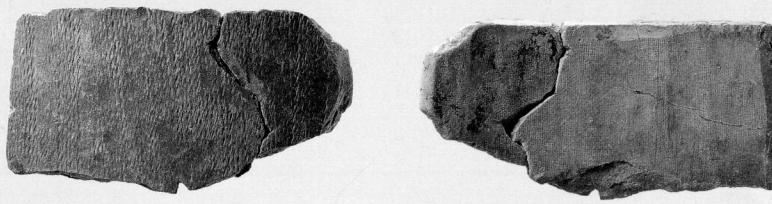
49-73



49-74



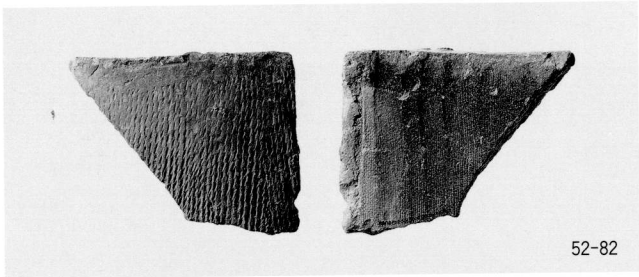
50-75

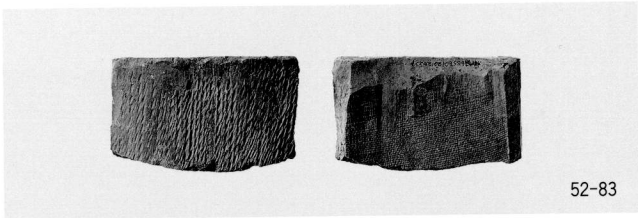


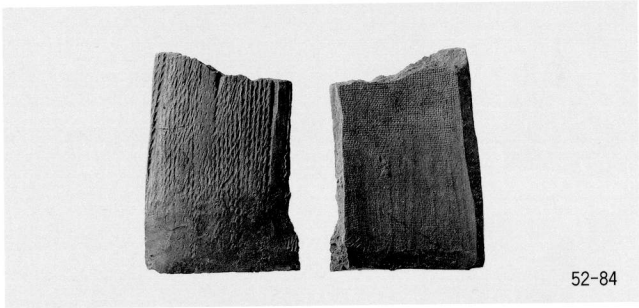
51-80

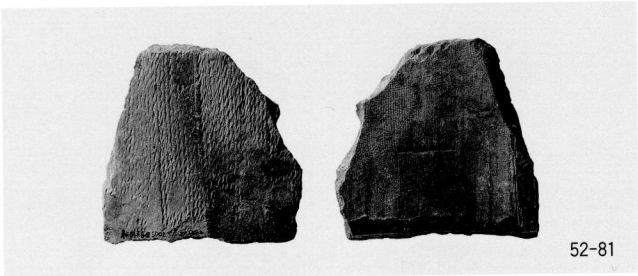
(1：5)

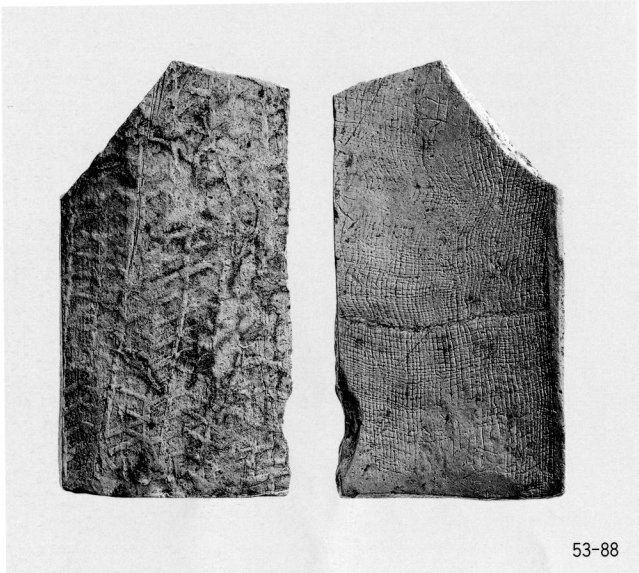
図版 14　瓦類 7

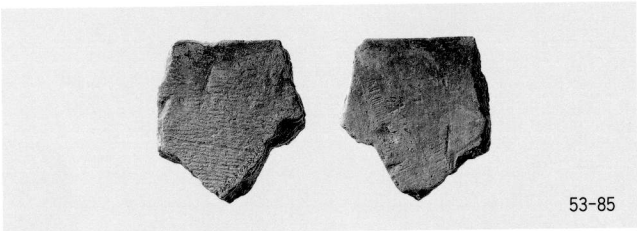

52-82

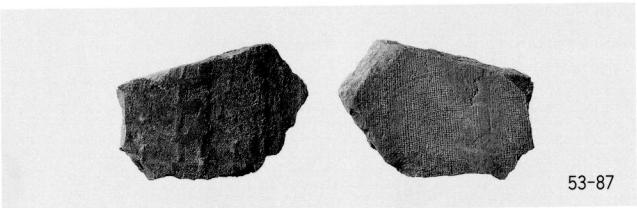

52-83

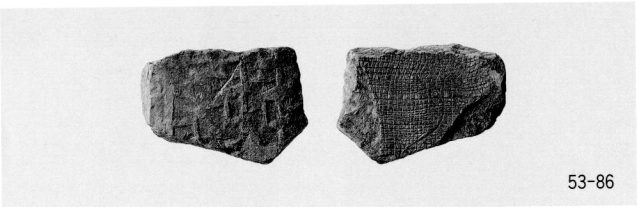

52-84

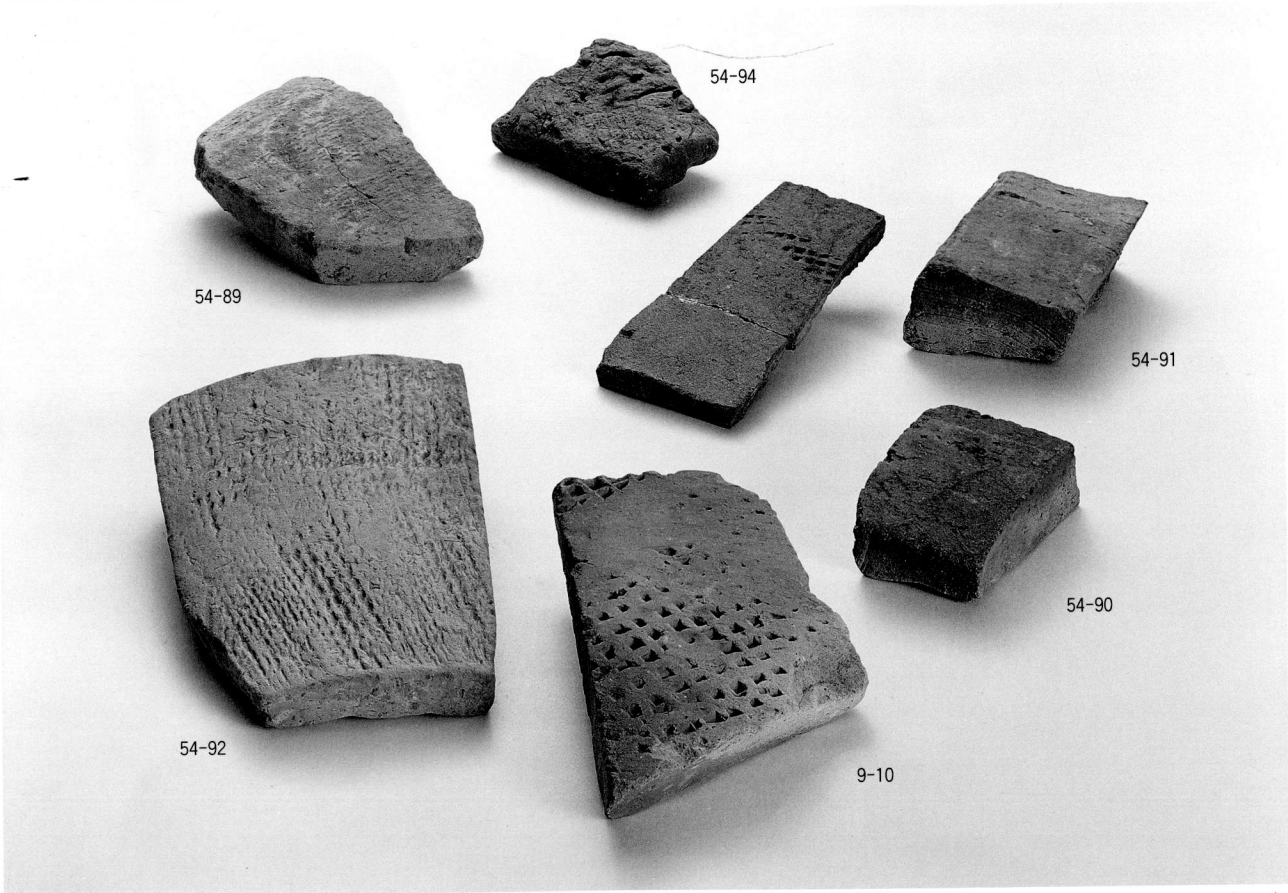

52-81


53-88


53-85


53-87


53-86



集合以外（1：5）

17-2

17-7

18-7

18-9

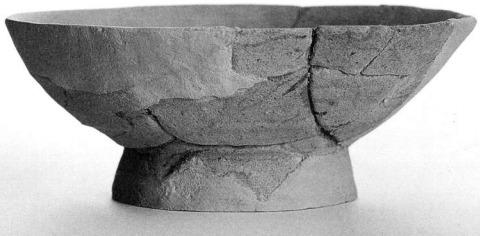
24-13

18-10

30-2

18-12

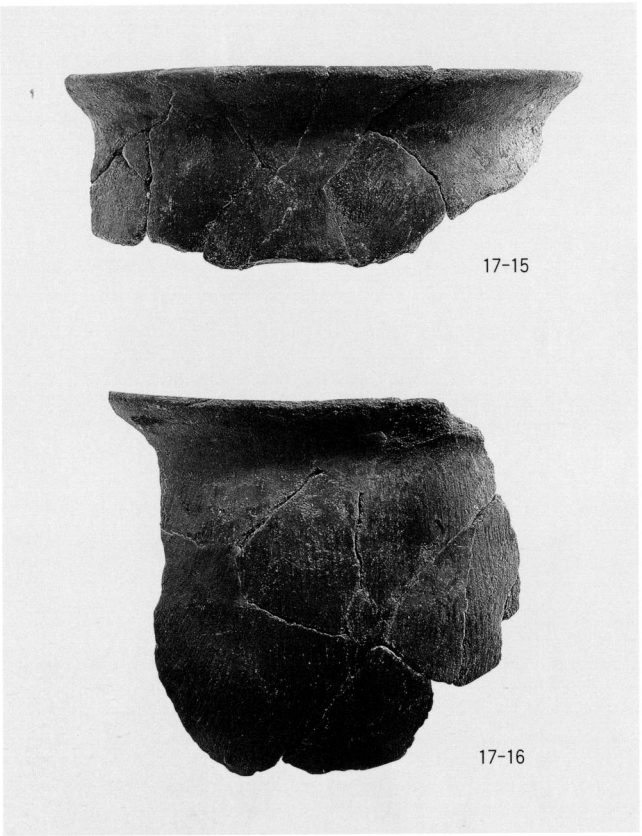
24-1

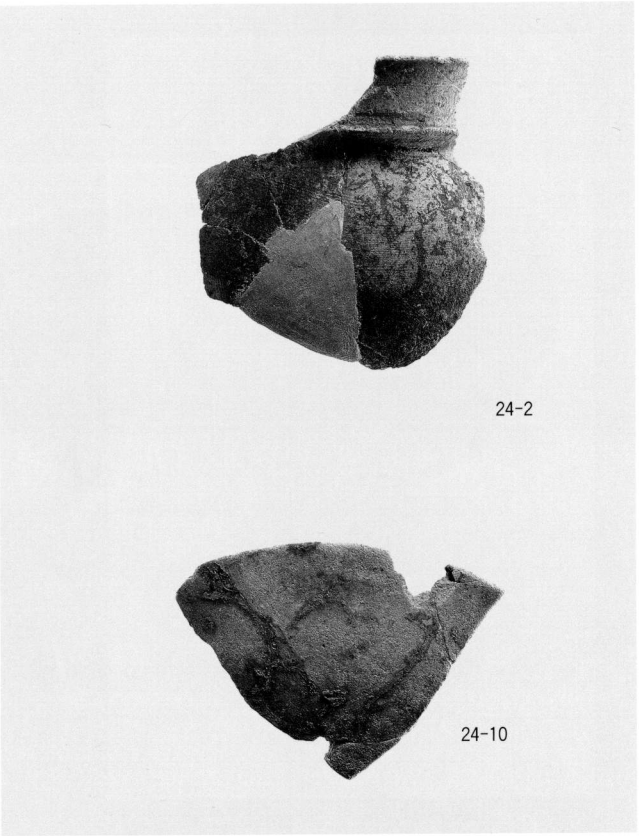


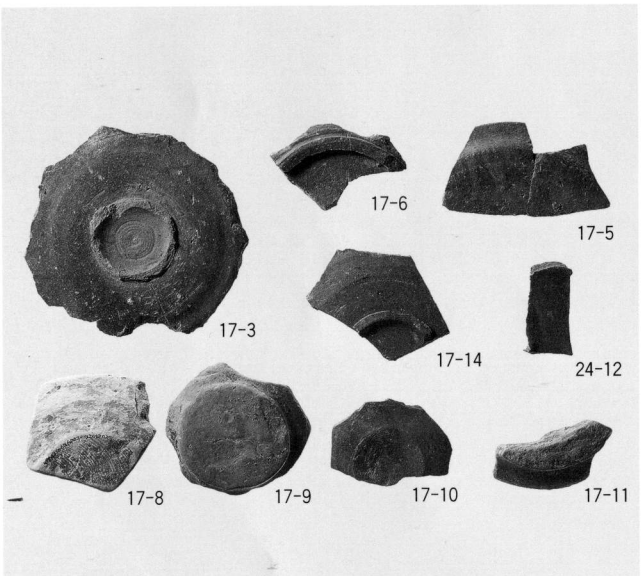
18-14

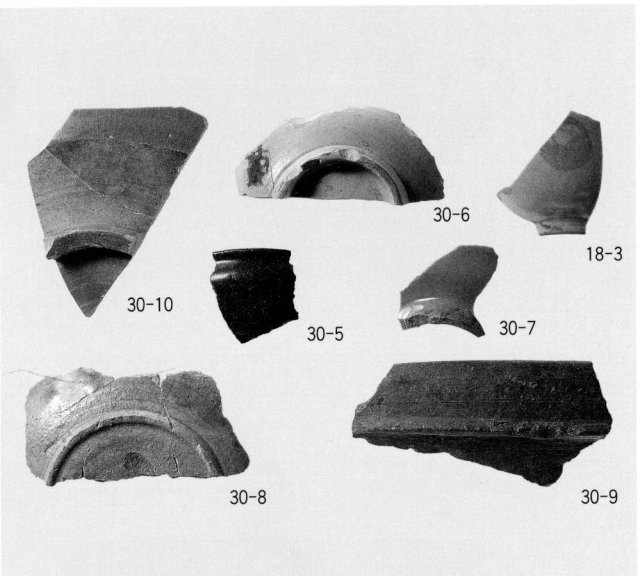
18-13

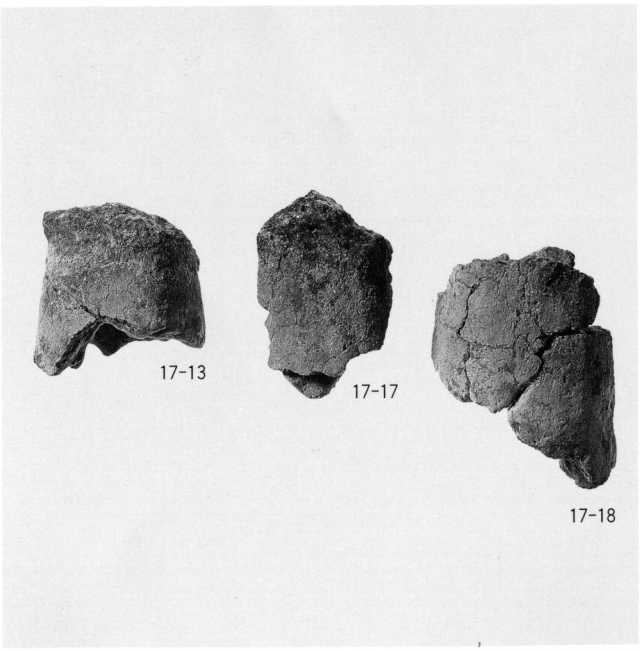
図版 16　土器・羽口・金属製品









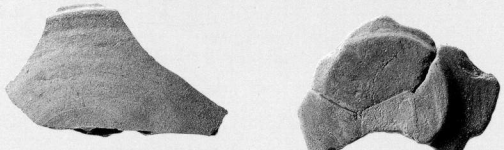


25-13

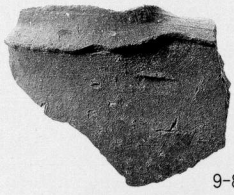
9-5

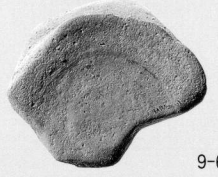
25-14

25-16


9-1

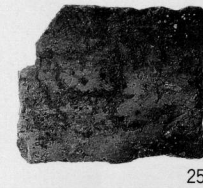
9-7


9-8


9-6

19-4

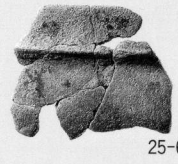
25-2

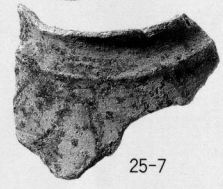

25-1

25-3

25-4

19-10

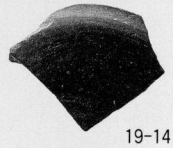

25-6


25-7

25-8

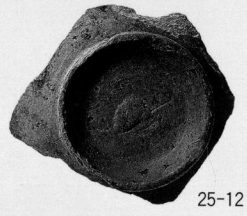
19-2

25-10


19-14

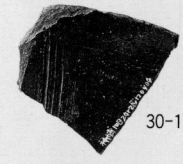
19-3

25-11


25-12

30-11

30-12


30-13

25-15

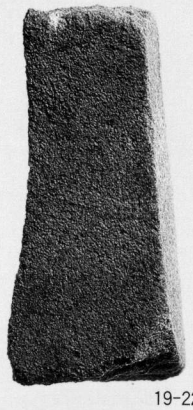
30-14

19-15

30-16

19-20

19-21

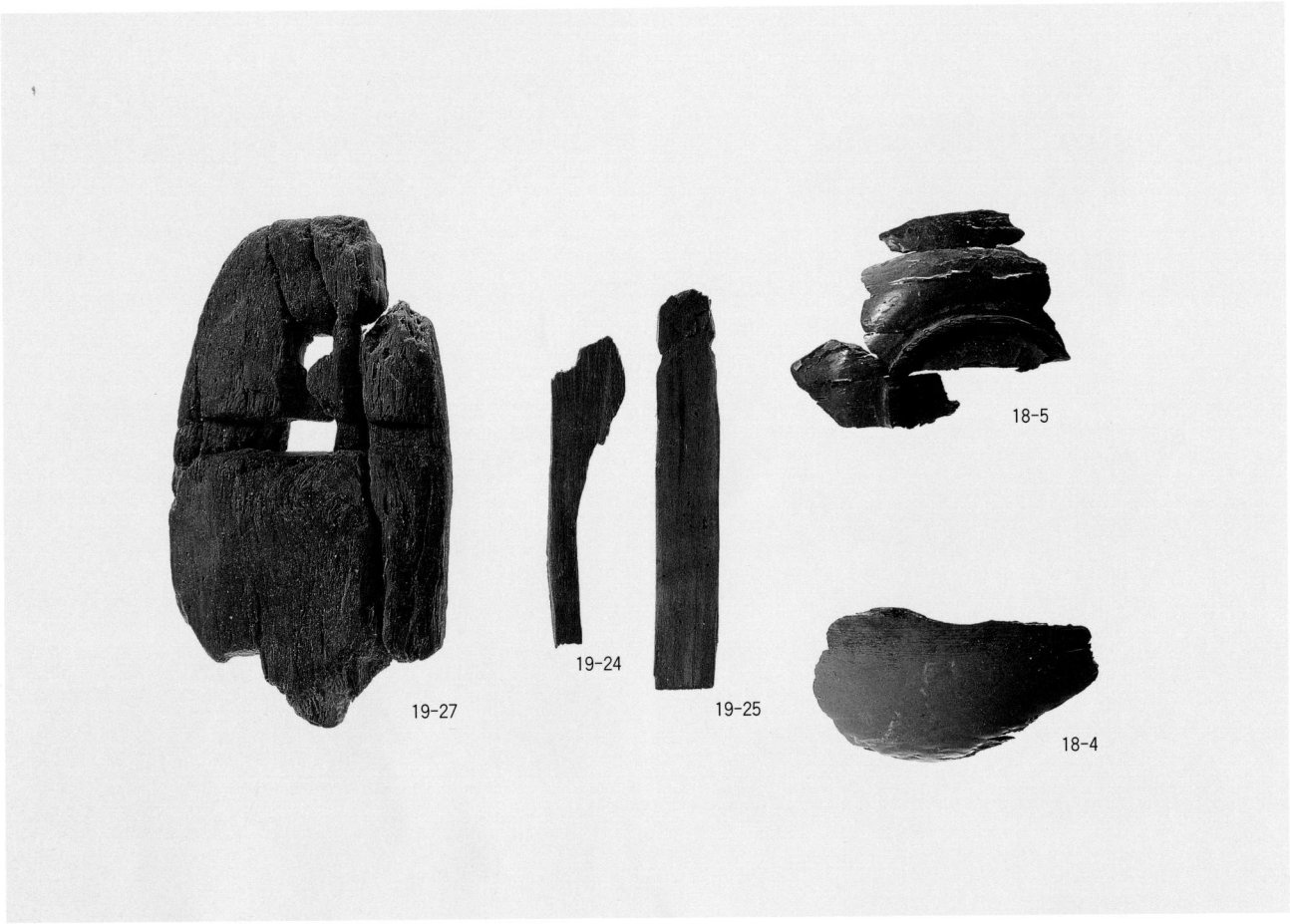

19-22

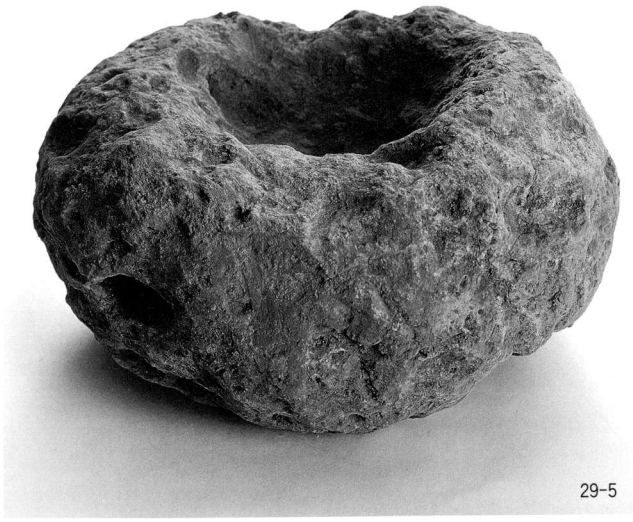
9-9

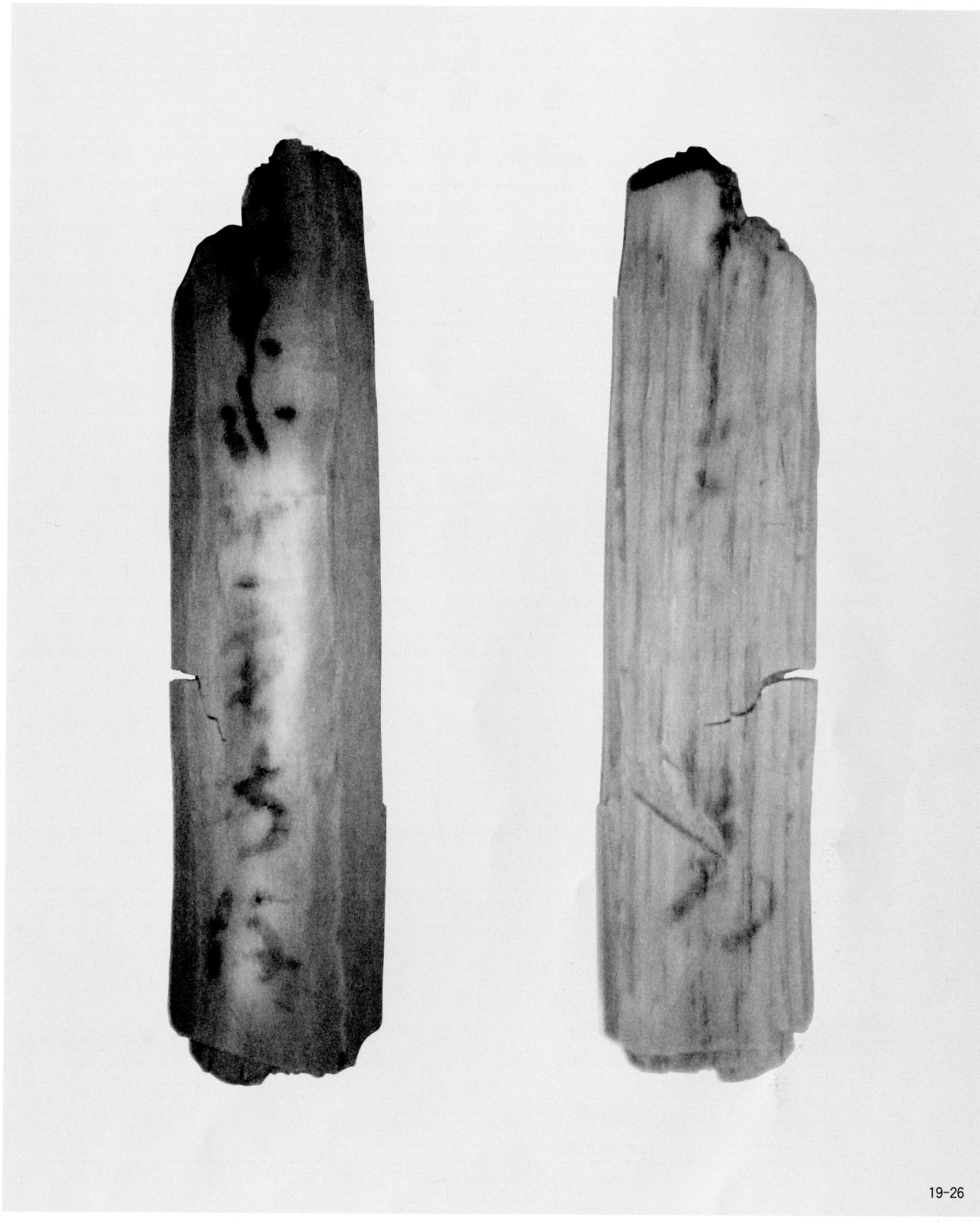
19-23

30-17

図版 18　木製品・石塔







19-26

(1：1)

報告書抄録

フリガナ	カンドジフキンイセキ　サン　・　タカニシイセキ
書名	神門寺付近遺跡Ⅲ・高西遺跡
副書名	出雲都市計画道路医大前新町線３工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	3
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	23
編著者名	須賀照隆
編集機関	出雲市　文化環境部　文化財課
所在地	〒693-0011　島根県出雲市大津町 2760　TEL 0853-21-6893
発行年月日	平成 25 年（2013）3 月

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積m²	調査原因
カンドジフキンイセキ 神門寺付近遺跡	シマネケン　イズモシ 島根県　出雲市 エンヤチョウ　バンチ 塩冶町 835 番地 4 外	32403	W-146	35° 35′ 47″	132° 75′ 15″	20111011 ～ 20120525	425 m²	道路改良工事
タカニシイセキ 高西遺跡	シマネケン　イズモシ 島根県　出雲市 エンヤチョウ　バンチ 塩冶町 869 番地 2 外	32403	W-128	35° 35′ 26″	132° 75′ 26″	20111011 ～ 20111219	400 m²	道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神門寺付近遺跡	寺院跡 集落跡 散布地	弥生時代 古代～近世	溝 建物跡 井戸 竪穴建物	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 瓦 木製品 金属製品	古代寺院の北限を示す溝 弥生時代の竪穴建物跡 大量の瓦
高西遺跡	集落跡 散布地	中世以降	溝 畝状遺構	土師器 須恵器 陶磁器 瓦 古銭	中世以降の畑跡

要　　約

本書は平成 23 年度から 24 年度に実施した神門寺付近遺跡，高西遺跡の調査成果を収録している。

特に神門寺付近遺跡においては神門寺境内廃寺に係わる大量の瓦が出土し，遺構としても古代寺院の北限を示すと思われる溝をはじめ，弥生時代の竪穴建物跡，中世から近世にかけての建物跡，井戸，溝などを検出しており，神門寺境内廃寺及び神門寺付近遺跡の概要をうかがえる数多くの資料を得ることができた。

平成25年（2013）3月発行

出雲市の文化財報告　23

出雲都市計画道路医大前新町線3工区道路改良工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

神門寺付近遺跡Ⅲ・高西遺跡

発　　行　出雲市教育委員会
出雲市今市町70

編　　集　出雲市　文化環境部　文化財課
出雲市大津町2760

印　　刷　株式会社 報　光　社
出雲市平田町993